

ちきゅうとなかよし はじめてのいっしょ その2

(地球と仲よし 初めの一步 その2)

—幼児期の環境学習・教育実践事例集—



兵 庫 県

もくじ

はじめに	1
------	---

第1部 ひょうごの環境学習・教育

第1章 ひょうごの環境学習・教育の推進	2
第2章 幼児期における環境学習・教育	5
第3章 環境学習・教育を進めるために ～管理職としての取組～	6
第4章 環境学習・教育に取り組むために ～幼稚園教諭・保育士に求められる力～	8
コラム ちょっとひといき ～園長のひとりごと～	10

第2部 効果的な環境学習・教育を進める具体的手法 13

第1章 幼稚園・保育所で環境学習・教育を進めるための考え方	14
第2章 幼稚園・保育所で環境学習・教育を具体化する方法	16
第3章 具体的実践に向けての保育者の心得	22

第3部 幼稚園・保育所における環境学習・教育の実践事例 25

第1章 身近な自然とかかわろう (多可町立きた保育所)	27
第2章 小さな命から学ぶこと (風の子保育園)	31
第3章 身近な環境の中で自然とかかわろう (太子町立斑鳩保育所)	35
第4章 自然物と触れ合う体験を通して、感動する心や探求心、 いたわりの気持ちを育てる (明石市立朝霧幼稚園)	39
第5章 四季を通して身近な自然「土」とかかわる (浜幼稚園)	43

参 考	47
-----	----

資料編	81
-----	----

は じ め に

兵庫県では、自ら「体験」、「発見」し、自ら「学ぶ」環境学習・教育を進めることにより、環境や生命を大切に思う“こころ”を育み、学習から実践へとつなげていくことを基本理念に幼児期からシニア世代までのそれぞれのライフステージに応じて体験を基本とする環境学習・教育（以下「ひょうごの環境学習・教育」という。）を展開しています。

特に、生涯にわたる人間形成の基礎が培われる幼児期から小学校の児童期の子どもたちを対象として、お米や野菜の栽培、動物や花木に触れるなどの自然体験等を通して、命の大切さに身をもって気付く幼稚園・保育所での環境学習・教育（「ひょうごっこグリーンガーデン実践事業」）および地域の自然に出掛けて行き地域の人々等の協力を得ながら自然観察や栽培・飼育などの自然体験活動を通して、環境の大切さを知る小学校3年生での環境学習・教育（「環境体験事業」）に平成19年度から他の都道府県に先駆けて取り組んでいます。

そして、平成21年度には県下すべての小学校で環境体験事業が実施されます。

この事例集は、ひょうごっこグリーンガーデン実践事業の定着を図るとともに、「幼児期のひょうごの環境学習・教育」を理論付け、体系化することにより、それぞれの幼稚園・保育所で環境学習・教育を進めるうえで有効活用してもらうためのものです。

そのため、ひょうごの環境学習・教育のねらいや理念を明確にするとともに、幼児教育の中で環境学習・教育を進めるうえでの具体的な手法やポイントを示しています。

幼稚園・保育所においては、子どもたちが命の大切さや不思議さに気付く、自然の大きさ・美しさ・不思議さなどに気付く、地域の中での自然やそれにかかわる人々に親しみをもつという他者とのかかわりに気付くといった＜自然体験＞からの「気付き」、また、生活の中で環境やその変化に気付く、資源を大切にしようとすることに気付くといった＜社会体験＞からの「気付き」に至るよう、幼児の“気付き”に対する先生方の共感も含め自然環境や社会環境との“出会わせ方”に留意し、地域の特性や園の独自性を生かした環境学習・教育に取り組まれることを期待します。

第1部 ひょうごの環境学習・教育

第1章

ひょうごの環境学習・教育の推進



1 持続可能な社会の構築に向けて

私たち人間は地球上に生きている。この地球上では、大気・水・土・生物、そしてこれらがつくりあげる生態系がつながり、かかわり合って、地球環境が成り立っている。

しかし、今この地球では、様々な環境問題が発生している。その原因は、このつながりとかかわり合いのバランスが崩れてきていることによるものであると言われている。

私たちが恵みを受けているこの豊かな地球環境は、祖先から受け継がれてきたものであり、将来を生きる子どもたちがその中で生きていくことができるようにする責任がある。

私たちは環境を介して世代を超えてもつながっている。私たちはこのことを意識し、そのためにも過去に学び、今に学んで、未来からの宿題に取り組み、「持続可能な社会」を構築していくことが必要である。

2 環境学習・教育とは

「持続可能な社会」の構築には、社会を構成する個人、家庭、民間団体、事業者、行政等が環境問題への取組を自らの問題としてとらえ、自発的に行動し、お互いの行動を理解し、立場を尊重し、適切な役割分担をすることにより主体的に参画することが必要である。

環境問題を考えるうえで何よりも大切なことは、自らが当事者であり、自らの問題としてかかわるという当事者意識である。環境学習・教育は、この意識の醸成に有効な手段と考えられる。

なぜなら環境学習・教育は、人間と環境とのつながりやかかわり合いのバランスという認識に立ち、自らが責任ある行動をもって、持続可能な社会の創造に主体的に参画できる人の育成を目指す「学び」であるからである。

環境問題は、現在進行形のテーマであり、一つの答えがあるものではないことから、環境学習・教育は、問題解決型の学びと言える。従って、指導者が知識を説明し、行動規範を示すといったことだけでなく、指導者と学び手が共に今を生きる自らの問題としてとらえ、いかに行動につなげていくかということを考えていくことが大切である。

このため、環境学習・教育での学びにおいては、自らが体験することにより、発見し、気づき、理解し、環境を意識した行動へとつながる「体験型」の学習が有効であると考えられる。

環境学習・教育は、単に自然と触れ合ったり、知識や情報を習得したりするだけではなく、これらを通じた「発見」や「気づき」により共感し、学び手の感性に届くものであるとともに、価値観に届くものであると言える。

従って、幼稚園・保育所における環境学習・教育を進めるに当たっては、いかに、日常の保育の中で、また、家庭や地域での幼児の生活の中で、子どもたち自らの「発見」や「気づき」を支援し、実践に結び付けていくかが大切である。

3 兵庫県における環境学習・教育

兵庫県では、阪神・淡路大震災の経験などから子どもたちが自らの体験を通して「命の大切さ」

に気付き、行動することができるよう、様々な体験活動を学校教育や社会教育を通じて行ってきた。

新たに、平成18年度から、自ら「体験」、「発見」し、自ら「学ぶ」環境学習・教育を進めることにより、環境や命を大切に思う“ところ”をはぐくみ、学習から実践へつなげていくことを基本理念に、体験活動を基本とする「ひょうごの環境学習・教育」を展開している。

また、全国に先駆けた兵庫県独自の取組として知事部局と教育委員会の連携体制を整え、小学校3年生での「環境体験事業」、幼稚園・保育所での「ひょうごっこグリーンガーデン実践事業」、幼稚園と保育所の指導者が共に学ぶ「環境学習リーダー研修」などを実施している。さらに、幼稚園・保育所、学校が地域住民やNPOなどと連携し、地域の自然や資源を活用した体験型環境学習・教育の充実にも努めている。

4 環境学習・教育を通じて学ぶ「命の大切さ」

環境学習・教育が「命の大切さ」に自ら気付くことのできる手段となるのはなぜだろう。

「命の大切さ」に気付くためには、自らが他者とつながり、かかわりあっていることに気付くことが必要である。そのためには、例えば、園内でのウサギやリスなどの飼育を通して、その命の温もりや成長、まれには死を直接体験することにより、「命」に身をもって気付く、また、水辺や里山の自然の中で四季の移り変わりや生き物との触れ合いを直接体験することにより、水辺や里山に息づく「命」に気付くといった例が挙げられる。

これらは、同時に「命」あるものが様々なつながりやかかわりの中で存在し、これらがなければ存在ができないことや自らもまた、そういったつながりやかかわりのなかで存在しているという「気付き」への大きなきっかけとなる。さらに、

これは、人間社会においてお互いを思いやり、尊重し、命や人権を大切にする心の基礎を培う大切な「気付き」へとつながるものでもある。

私たち人間は、地球上に生きる生物の一つとして、地球上の自然環境や資源、他の生き物とつながり、かかわり合いながら生きている。このつながりとかかわり合いの循環が断ち切られたとき、私たちは大きな問題に直面することになる。

「命の大切さ」を考えることは、環境問題を考える原点とも言えるものなのである。

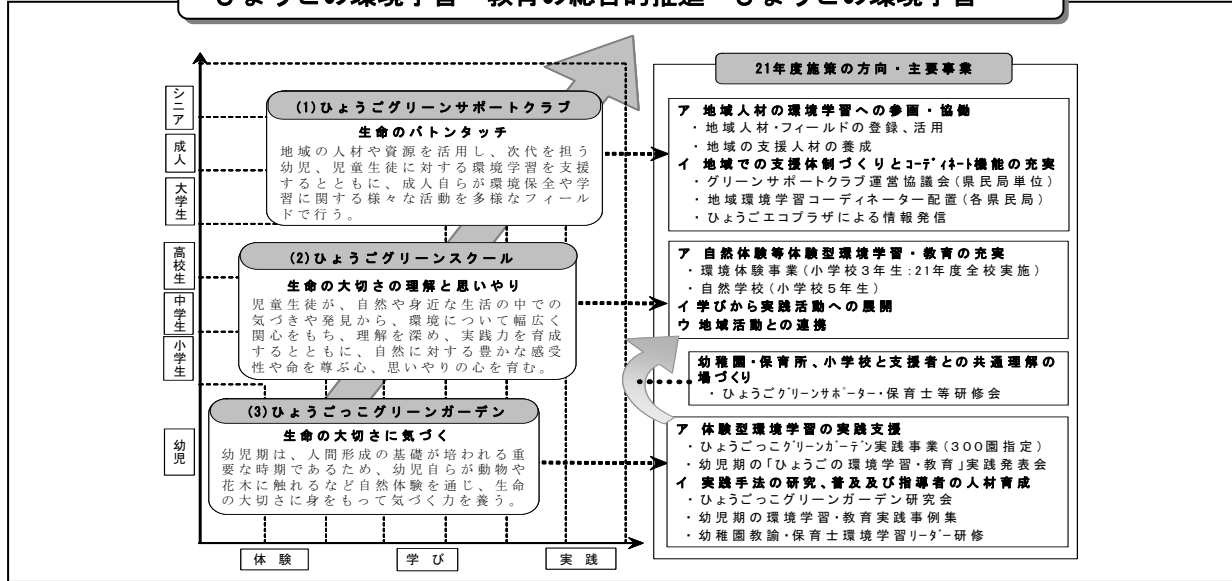
5 生活の中で実践できる人材を育成する環境学習・教育の展開

幼児期における環境学習・教育にとって大切なことは、「命の大切さ」に気付くことにつながる、自然の美しさや不思議さ、他者とのつながりやかかわりを発見したり、共感したりする体験を通して、豊かな感受性をはぐくむことである。自然や他者に対する豊かな感受性とそれから生まれる豊かな想像力がなければ、環境問題に対する知識や解決のための技術をいくら知ったとしても、問題解決への行動には結び付かない。

幼児は、あらゆる生活場面において周囲の事物や他の人と多様な方法でかかわっている。そして、そのかかわりの中で様々な発見を促す体験が含まれている。

幼稚園・保育所での環境学習・教育の実施に当たっては、この体験の機会を活用し、実践することができる考える。なぜなら、幼稚園・保育所における子どもたちの生活の多くが「環境」とかかわっているからである。遠足や園外活動のような特別な行事でなくても、登降園・昼食・散歩・遊び等の毎日の園生活は、地域の自然や草木花、水、食べ物、電気、紙、ごみ等とかかわりやつながりがある。つまり、園生活は、深く「環境」

ひょうごの環境学習・教育の総合的推進—ひょうごの環境学習—



とかかわっている。幼稚園・保育所での子どもたちの生活や活動を「環境学習・教育の観点」で見直すことが幼稚園・保育所における環境学習・教育の第一歩となると言える。

環境学習・教育では、環境を意識した行動ができる人を育てることが重要である。子どもたちの生活の場でもあり、「環境」とのかかわりが多い幼稚園・保育所で、環境学習・教育を進めるためには、日常的、継続的に取り組むことが大切である。そのためには、毎日の活動を「環境学習・教育の観点」でとらえ直し、日々や年間の教育計画・保育計画を立てることが大切である。従前から実施してきた遠足などの園外活動や七夕などの年間行事についてもその時期や場所だけでなく、「環境」への意識を日常的、継続的にもって計画・実施することで、子どもたちが命や環境の大切さを意識した行動をとることができるきっかけになる。ただ、このような取組を実践するためには、一職員、一管理職だけでできるものではない。環境学習・教育を効果的に展開するためには、園全体のものとして取り組んでいくことが必要である。

6 「連続性」を意識する

教育の目的は、子どもというものは連続的に学び、育ち、成長するものであるとの認識に立ち、子どもの育ちや学びを促し、子どもの成長を支え導くことである。兵庫県では、兵庫県で生まれ、育つ子どもたちに対して、幼児期、児童期等の発達段階に応じた「ひょうごの環境学習・教育」を体系的に推進している。(上表参照)

幼児期はこの原点と言える極めて重要な時期である。保育者が幼稚園・保育所における環境学習が小学校の環境教育とどのようにつながるのかを意識して保育に取り組むことで、保護者からの幼稚園・保育所への信頼にもつながると考える。

さらに、幼稚園・保育所における「遊び」を主導的活動として展開される生活と、学校における集団生活の中で「学習(教科学習)」を主導的活動として展開される小学校低学年教育とのスムーズな接続を図る一助となると考える。

今後、幼稚園・保育所での環境学習・教育を小学校3年生の「環境体験事業」とリンクさせながら進めることが重要である。

第2章

幼児期における環境学習・教育



1 幼児期の環境学習・教育をどのようにとらえるか

幼児期の教育において、自然や動植物とのかかわりは欠かせない。幼児にとって自然や動植物とのかかわりは、その対象を命あるものとしてとらえ、心を動かし、多くのことを気付く経験につながっている。幼稚園・保育所においては、このような幼児が自ら「気付く」活動を大切に考え、日常的に行っている。

幼稚園では幼稚園教育要領、保育所では保育所保育指針に基づいて保育が行われ、これらの中に、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の領域が示され、幼児期に育てたいねらい・内容等がまとめられている。幼稚園・保育所関係者は環境と聞くと、この領域「環境」と結び付けて考えがちであるが、幼児期における環境学習の「環境」とらえは、この領域「環境」だけを指しているものではない。むしろ、幼稚園・保育所で日常繰り返し広げられる「気付き」を大切にする生活そのものの中に、環境学習・教育につながる体験が含まれている。日々の生活を環境学習・教育の観点で見直すことが、より幼児の生活を豊かにしていくと考える。

2 環境学習・教育の観点で保育を見直す

幼児期の生活のほとんどは遊びである。幼児は周囲の事物や友達と思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れてそのかかわりを楽しむ。幼児が遊ぶときには、心も頭も体も働かせて活動するので、心身の様々な側面の発達にとって必要な経験が相互に関連し合

って積み重ねられていく。つまり幼児期には諸能力が個別に発達するのではなく、相互に関連し合い総合的に発達していく。

幼児の一つ一つの活動の中には、様々な発達を促す体験が含まれている。その体験を「環境学習・教育」という観点で見直し、幼児に気付かせたいこと、身に付けていきたいこと等を明確にし、見直しをもった保育を行う必要がある。

3 家庭・地域の教育力との連携

幼児期は自然体験と生活体験の両者の積み重ねにより、人と環境とのかかわりについての理解と関心が深まっていく時期である。幼児期の環境学習・教育を進めるに当たっては、自然体験、生活体験の両者を関連させることが重要である。

また、環境学習・教育の推進には、教育機関だけでなく家庭や地域が相互に連携しながら取り組んでいくことが大切である。そのためにも、幼稚園・保育所での取組を発信し、家庭や地域の教育力を保育に生かしていくことが有効である。

この事例集で取り上げた幼稚園・保育所における事例では、自然体験と生活体験の内容を以下のようにとらえ、日常行っている園の活動を環境学習・教育の観点から見直している。

<自然体験>

- ・生命の大切さや不思議さに気付く
- ・自然の大きさ・美しさ・不思議さなどに気付く
- ・地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しみをもつ

<生活体験>

- ・生活の中で環境やその変化に気付く
- ・資源を大切にしようとする

第3章 環境学習・教育を進めるために ～管理職としての取組～



保育にかかわる現場における環境学習・教育の現状はどうだろうか。一部熱心に取り組んでいる幼稚園・保育所はあるが、大半の幼稚園・保育所では、対象年齢が幼児でもあること、周囲に自然環境がないこと、環境学習・教育の指導計画や展開方法の難しさなどの理由で十分な取組がなされていないのが、現状だと思われる。確かに幼児期での環境学習・教育すべてが、子どもたちに理解されることは少ないかもしれない。

しかしながら、幼児期での環境学習・教育で経験した様々な体験が、今を生きる子どもたちの将来の備えとなるはずである。

ここでは、幼稚園・保育所で、実際に環境学習・教育を進めていくうえで、園の管理職がどのようなことに取り組んでいくべきかについて記すこととする。

1 環境学習・教育を進めるうえで必要な条件を整える

(1) 教職員全員が「環境問題を考える」という当事者意識をもち、意識を高めていくこと

管理職・幼稚園教諭・保育士・調理師など、幼稚園・保育所にかかわるすべての教職員が、環境学習・教育に取り組むという共通意識が必要である。それは、私たち自身が環境にかかわっている当事者であること、また、環境問題を自らの問題としてとらえるという当事者意識が環境学習・教育を進めるうえで大切であるということである。

環境学習・教育に取り組むことを通して、教職員も日々の環境への意識が高まり、子どもへのかかわりや教職員自らの意識や行動の変化にもつな

がっていくと考えられる。そのためにも、子どもたち自らの気付きや発見を促すこと、その発見を新たな気付きや行動へとつなぐものであるという意識を教職員全員がもつことが必要である。

(2) 園の運営自体を環境に配慮したものにする

幼稚園・保育所で環境学習・教育に取り組むうえで何よりも大切なことは、まず私たちの幼稚園・保育所が、「地球にやさしい幼稚園・保育所を目指している」というキーワードを掲げることであると考える。

現在、環境問題に対して世界的規模で様々な対策が立てられ、実行され始めている。国や地方自治体の施策、そして企業レベルでも環境に対して様々な取組が試されている。このような社会情勢の中、環境への配慮が、不十分な企業は、存在すら許されなくなる時代を迎えつつある。

幼稚園・保育所も環境とかかわりをもつ一事業者であり、子どもたちに恵まれた地球環境の中で生きていく未来を受け継いでいくためにも、園の管理職は、園自体が環境問題に取り組んでいく責任があるということを認識し、経営計画や年間目標に環境に配慮した取組を盛り込み、園全体として実践していくことが必要である。

(3) 保護者や地域を巻き込んだ取組とすること

幼稚園・保育所において、環境学習・教育を1年間通して継続して実施することは大切なことだが、子どもたちの生活は、幼稚園・保育所だけではない。家庭や地域の中で過ごす時間もある。幼稚園・保育所と家庭や地域が一体となって環境学習・教育が継続的に取り組んでいくことが大切である。そして、幼稚園・保育所での環境学習・教

育の取組の姿勢を保護者や地域の方にきちんと伝えていくことが大切であり、その取組が保護者に、そして地域社会に広まっていく「継続性」といったものを大事にしていきたい。

2 指導者自身の感性を高めるため、子どもたちに備わる「ちから」を活用する

環境学習・教育は、知識的授業ではない。草花や畑の野菜や野の虫に、子どもたちの興味を引き付けていくことが大切である。それには、保育者自身がまず自然に興味をもたなくてはならない。

日本での幼児教育の祖である倉橋惣三は、「自然を愛し、自然に興味をもつことは、子どもたちの教育者として、もっとも大切な資格の一つである」と言っている。

また、幼児期の子どもたちは、「花を踏んだら花が痛い」といったように対象を自分に置き換えて考えることができる発達年齢にある。このような子どもたちがもつ感性を生かすためには、保育者自らが、自然の不思議や美しさに共感できる感性を磨いていくことが大切である。

3 今までの幼稚園・保育所の「環境」の在り方を考え直す

環境学習・教育に取り組むには、子どもたちが、自然と触れ合うことが必要である。子どもたちと自然を出会わせるには、二つの方法があると思う。一つ目は、「子どもたちを自然に連れて行くこと」遠足や散歩などの方法である。二つ目は、「自然を子どもたちにもってくること」である。

自らの幼稚園・保育所の園庭を見回してほしい。日本の基本的な園庭の様に周囲に大型の固定遊具を配置し、中心部はグラウンドといった感じだろうか。せっかくの広い空間を年一度の運動会のために園庭を自然からほど遠いものにしておくのは

どうだろうか。運動会は、他に場所を移して行くこともできる。それよりも、毎日の生活の中でもっと身近に自然に触れる機会をつくるのが、子どもたちにとって意味のあることではないだろうか。特に、都市部の幼稚園・保育所であればあるほど、緑あふれる園庭にすべきではないだろうか。園庭に木々を植え、野の花や四季の花を植え、魚が泳ぐ小さな池があるなど、子どもたちの身近に感じられる自然豊かな園庭にするという発想の転換が必要であり、自然に包まれた子どもたちの生活を確保することが求められている。

また、倉橋惣三は『広い自由な遊び場と新鮮な空気と十分な日光』が、子どもたちにとっての宝である」とも言っている。私たち大人は、子どもたちからその宝を奪ってしまっているのではないだろうか。地球温暖化など自然界から様々な警鐘が鳴らされている。大人がつくり出した問題は、大人たちで解決しなければならないのにこのままでは、問題だらけの世界を次の世代の子どもたちに残すことになってしまう。これらの問題を私たち大人が解決することを第一に考えることはもちろんだが、それと同時に子どもたちに将来の備えを用意する必要性をもう一度私たちが考えることが大切である。

幼児期に自然に触れ遊んだという「原体験」があつてこそ、自然の大切さと自然とともに生きるこの意味を子どもたちが、大人になったときに理解できることにつながっていく。

幼稚園・保育所は、毎日、保護者や地域の方々といった大人が出入りし、地域において幼児から大人まで環境について意識を高めることのできる有効な場所である。これからの幼稚園・保育所の経営や運営においては、環境に配慮した幼稚園・保育所づくりは、欠かせないものであるということ意識したい。

第4章 環境学習・教育に取り組むために ～幼稚園教諭・保育士に求められる力～



1 保育者の感性を高める

自然の美しさや不思議さに心動かし、ワクワクする感性、幼児の感動に共感できる感性など、保育者の感性を高めていくことは、不可欠なことである。保育者自身が自然に興味をもち、五感を通して自然と触れ合うことに心地よさを感じ、楽しんでいる姿を子どもたちに見せていくことが大切である。

ある新規採用教員研修会でのことである。

「五感を通して自然を感じよう」というプログラムの中で、自然の中で木肌に触れたり、木々や海の匂いを感じたり、虫や鳥の鳴き声、風の音に耳を傾けたりなどした。参加者からは「こうした体験は初めてです」という声が多く聞かれた。保育者自身が、五感を通して自然に触れる経験が少なくなってきたという現状がうかがえる。今後、意識してこのような機会を多くもつことが必要である。

その一つの方法として管理職は、保育者が自然教育・環境学習・教育の体験型研修等に参加することを勧めるのもよい。また、地域の人材を保育に生かし、直接教えてもらったり、かかわる機会をつくったりしていく。幼児にとっても地域の方との交流は意義があるので、地域の人材は大いに活用していきたい。

いろいろな機会をとらえて保育者自身が、感性を高める努力をすることは言うまでもないことである。

2 保育者が「気付く眼」をもつ

幼稚園・保育所では、自然体験や生活体験を通して、幼児期から「命の大切さ」や「資源の大切さ」、「環境の変化に気付く力」を育てることを大切にしている。

「幼児期における環境学習・教育」について、ある園で、職員に尋ねてみたところ、「命の大切さに気付く」、「水や物を大切にする」、「自然の美しさや不思議さに気付く」、「ごみを分別する」、「落ち葉を腐葉土にする」、「空き容器を使って物を作る」などと答え、環境学習・教育の要素が、日々の幼児の遊びや生活の中にあるということに気付いている職員もいる。また、保育者自身が自然の変化などになかなか気付けないので、子どもたちも気付かないまま通り過ぎていてのではないかと感じている職員もいる。

保育者は、子どもたちが登園するに当たり、園舎内外の掃除や砂場の整備、遊具等の安全点検をする。そして、それぞれの学年や学級、個人の育ってほしい姿をイメージしながら環境をつくっていく。年齢や発達、季節に合わせた虫や生き物、用具や遊具などが、子どもたちの登園を待ち受けている。こうして、子どもたちは、様々な身近な環境にかかわり、遊びに夢中になればなるほど、「なぜだろう」、「不思議だな」などと、心を動かし始める。

夏の暑い日、運動遊びの後、4歳児の保育者が「園の中で涼しい場所を見つけて一休みしましょう」という言葉掛けをしたところ、子どもたちは木陰や石のトンネル等、様々な場所を発見する。園庭にある大きな樹の下に集まってきた子どもた

ちは、「涼しいね」、「どうして涼しいの？」と樹を見上げながら、青々と茂った葉っぱや、長く伸びている枝等に気付いている。

また、秋には、色付いた葉っぱを集めて、リス小屋に入れたり、ままごとに使ったりなどしている。冬には、園庭いっぱいには落ちていた小枝を集めて、造形遊びを楽しむ姿も見られる。子どもたちにとって、大きな樹の下は、四季折々の自然が楽しめる憩いの場所でもある。

ところが、様々な物が園庭や保育室にあるのに、それが子どもたちの遊びに生かされないこともある。これは、子どもたちの活動と環境がつながっていないのである。その環境に気付いていない子どもたちには、気付くような言葉を掛ける。また、直接言葉を掛けなくても、保育者が関心を示すことで子どもたちが気付くこともある。このように、保育者の援助により、子どもたちがその環境に心を動かしていくことは、日常の保育の中ではよくあることである。子どもたちの周りの環境は、子どもたちが心を動かすことで、子どもたちにとって身近な環境になっていく。環境と子どもたちをつなぐ媒介者としての保育者の役割は重要である。

何よりも、保育者が園内外の様々な環境の変化に対して、「気付く眼」をもつことである。「いつものこと、毎年のこと」、「身の回りにある環境は当たり前」という視点から、こだわりをもって園内外の環境を「環境学習・教育」の観点で見直していく。例えば、園内外の四季折々に出会える園庭マップ等を作成することから、園の全職員の意識を高めていくのも一つの方法である。

3 「環境学習・教育」を幼稚園・保育所の重点目標や指導計画に位置付ける

幼稚園・保育所では、自然体験や生活体験を通して、以下の内容を意識して取り組んでいる。

- ・生命の大切さや不思議さに気付く
- ・自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く
- ・地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しみをもつ
- ・生活の中で環境やその変化に気付く
- ・資源を大切にしようとする

そこで、園の実態に応じて、園としての「環境学習・教育」のねらいやテーマを全職員で話し合い、指導計画に位置付けていくことが必要である。

例えば、テーマとしては、「地域をテーマにした環境教育」、「近隣の公園を活用した環境教育」、「栽培活動を通じた環境教育」等、年間を通して、地域に出掛けたり、四季折々の自然に触れたりする内容等が考えられる。園庭であれば、毎日、園庭に出て遊び込める時間をつくる。また、風や光、雲の変化、雨の様子、木々や草花の変化、虫や飼育動物など同じ場所で、様々な変化に、繰り返し出会い、気付く、経験する機会をつくっていくことも大切である。このように、保育者が日常的に継続的に自然にかかわることを意識して取り組むことによって、子どもたちの自然への関心も高まっていく。

また、年間を通して地域に出掛けることで、自分たちが住んでいる地域の素晴らしさや良さを感じたり、人間関係を広げたりしていくこともできる。「環境学習・教育」は、幼稚園・保育所の中だけで完結するものではない。園全体の取組が家庭・地域へと広がっていくこと、幼稚園・保育所における「環境学習・教育」の取組を家庭や地域に啓発していくことが大切である。

このように、「環境学習・教育」の観点を意識して指導計画に明確に位置付け、幼稚園・保育所の活動全体を通じて実施する体制を構築していくことが必要である。

幼稚園や保育所における環境は、幼児が保育者とともに生活する中で出会う“ものや人などの様々な環境”のことで、その環境に、何よりも幼児が自ら興味や関心をもって取り組み、「〇〇かもしれない」「〇〇してみよう」などと、試しがかかわっていくことが重要です。その意味においては、テーブルや整理棚など生活に必要なものや遊具、自然環境などが幼児にふさわしいものかどうか大切です。

さらに、保育者が「幼児期の環境学習・教育」の視点で、子どもの気付きを促しているのでしょうか？特に、幼稚園や保育所では、それぞれのメリットを生かして、幼稚園は“降園後の保護者とのかかわり”保育所は“午後からの異年齢児とのかかわり”の中に、環境学習・教育の観点を取り入れていくことで、より遊びや生活が豊かになっていくように思います。



幼稚園

入園式に、ウサギの赤ちゃんを紹介すると、大喜びする幼児たち。保護者席からも「まあ、かわいい」と大歓声。ウサギの赤ちゃんとの出会いを楽しみに登園してきた幼児たちは、「ウサギさん、おはよう」「ニンジン持ってきたよ」「ふわふわしている」「あったかいね」「ドキドキ音がしている」など、抱っこしたり、声をかけたりして、すっかりウサギとも仲良しになりました。

保育者の援助により、友達や保育者の心臓の鼓動を聴き合ったり、ウサギ小屋を掃除し、ウンチに気付いたりしながら、幼児たちは、自分たちと同じように、“ウサギも生きているんだ”と実感していきます。このように、幼児たちは、五感を通してウサギと触れ合う中で、命の大切さや不思議さに気付いていきます。

さらに、幼稚園では、降園後も、幼児や保護者がより興味をもってかかわりたくなるような魅力ある環境を心掛けています。親子でウサギ小屋を覗き、「明日は、キャベツ持ってくるからね」「いっぱい食べて大きくなってね」と、成長を楽しみにする姿も多く見られます。降園時に、ウサギと触れ合う遊びの様子や育ちなどを保護者に伝えることで、家庭でも親子でウサギの大好きな野菜を準備するなど、幼稚園での楽しかったことが夕食時に生き生きと話され、家族で会話が弾んでいます。



五感を通してウサギと触れ合い、命の大切さや不思議さに気付きます。

ちよっと ひといき ～園長のひとりごと～



保育園

都会に暮らす子どもたちを取りまく環境（自然）は決して豊かなものとは言えません。しかし、乳幼児期は自然などの環境にかかわって遊び、身体感覚を働かせ興味や関心を育て、思考力や認識力の基礎を培う大切な時期であります。そのため、生活が主となる保育園ではできるだけ日常の中で自然に触れる機会をもてるよう取り組んでいます。

外遊びでは、園周辺の公園に出掛け自然に生息した草花を観察したり、図鑑で生態を調べ植物の特徴に気付くことを促しています。これらの植物は、こすり絵、押し花、色水を楽しんだり、ごっこ遊びの食材にしたりと多種多様に保育の材料として生かしています。

午後からは午睡をしなくなった年長児が園芸店に行き四季折々の花や苗を購入し、テラスや園庭で栽培活動を行っています。自分たちで苗植えに必要な土づくりから始め、大切に育て日々の成長から発見や驚きを得ることでより関心を高め、収穫する喜びを味わいます。そして、収穫したものでクッキングをし、それを自分たちだけでなく、生活を共にする異年齢児にもおすそ分けをする中で縦の関係を育み、小さい子をいたわる気持ちをもてるように導いていきます。

園の環境づくりとしては、玄関や園庭の植栽から感じる季節の移り変わりや保育室に置かれた観葉植物等々。さりげなく自然物を使った室内環境を構成し、特別のものでなく身近にあることで自然に対する興味づけをすることも大切だと考えています。

乳児期から最長6年という園生活のスタンスで、保育者の意図的な教育や養護により健やかに育んでいけるよう、日々心掛けています。



園のベランダを利用して狭い場所でもほうれん草を栽培し、日常の中で自然に触れる機会をもてるようにしています。



近所の花屋さんに行って季節の花をお店のひとに教えてもらいます。子どもたちの訪問を事前にお店にお願いしているのでいろんなお花を教えてもらえます。

第2部

効果的な環境学習・教育を進める具体的手法

第1章

幼稚園・保育所で環境学習・教育を進めるための考え方



ここでは、幼稚園・保育所で環境学習・教育の取組を進める際に、特に考慮しておきたい事柄を環境問題と教育の観点から述べるとともに、具体化（何を、どうやる）のための二つのアプローチについて説明します。

具体化（何を、どうやる）に際しての大切な二つの視点

1 自然の直接体験や学習を基本に据えましょう

大気汚染、水質汚濁、森林破壊、ごみ問題など、様々な現象として現れている環境問題の本質とは何でしょうか。環境問題は、その本質を踏まえてエコロジカル・カタストロフィー（生態的破局）と呼ばれています。本来、人間も含めてすべての自然の命は、多様な自然のモノや生命が織りなすつながり（生態系）の中で生かされています。しかし、そのつながりが私たち人間の自然に対する無関心、無理解、無責任な行為によって切られ、結果的に起こっているのが環境問題です。つまり、その原因は、私たち人間と自然とのかかわり方にあるということです。その意味では、環境学習・教育を進める際に、自然の仕組み、人間にとってのそのことの意味を感覚的・知的（生態学的）に深く理解する体験や学習を基本に据えることが重要と言えます。まさに、文部省（当時）『環境教育指導資料』の幼稚園教育の基本に示される「自然などの身近な事象への興味・関心を育て、それに対する豊かな心情や思考力の芽生えを培うようにする」を基本にしようということです。

2 意図的・系統的アプローチを心掛けましょう

環境学習・教育は深刻さを増す環境問題の解決に教育的な立場から応えていこうという試みです。その目的は、平たく言えば、「環境に配慮した暮らしが実践できる人を育てる、そうした暮らしが当たり前の社会をつくる」ということでしょう。その進め方（どうやるか）は、環境教育の必要性が叫ばれ始めた当初から、いわゆる系統立ったカリキュラムやプログラムを用いず、どちらかと言えば、様々な教科や場面で多様なテーマや手法で行う学際的アプローチが主流です。しかし、教育（保育）は、ねらい・目標・目的を達成する手段と言われています。その意味では、自然を深く理解し、そのことを、環境に配慮した暮らしにつなげていくために意図的・系統的に体験や学習をデザインし、提供していくことが重要だと言えます。

具体化（何を、どうやる）のための二つのアプローチ

1 生活習慣ベース

環境学習・教育の目的は、環境に配慮した暮らしが実践できる人の育成（＝環境に配慮した行動化・習慣化）を目指すものです。幼稚園・保育所の目標の一つは、健全で安全で幸福な生活のための習慣を養うことです。その意味では、日々の園の生活の中で環境に配慮した生活を積み重ねる中で、習慣化を図り、その大切さを理解してもらう試みです。

2 体験・学習ベース

園で実際に行っている様々な活動や行事を環境学習・教育の観点で見直したり、環境に関連する年間の催事や記念日、全国的に実施されているキャンペーンなどを新たな活動や行事として採り入れたたりして、子どもの発達段階を考慮したうえで、意図的・系統的な体験や学習として提供しようとする試みです。

● 園生活の場面：

登園・降園

● 環境学習として取り組める要素：

1. エネルギーのムダ使い、大気汚染防止
2. 自然に目を向け、大気汚染防止

1日

具体的な展開イメージ/アイデア

1. エネルギーのムダ使い、大気汚染防止

・前提として：
 永遠の園は環境に負かした園つくりを目指して！
 ← これを打ち出す

○ 自転車・徒歩登降園の場合

- ・アイドリングストップを呼びかけ
- 自転車 → 補助ブレーキの活用
- 園がより → 親子に合わせた

○ バスで登園の場合

- ・乗降者流の場合、上りの前座を確保して協力が要
- ・廃油利用のバスを使用
- ・廃油リサイクルの車を導入して回収

・具体的には

- ・エコバス
- ・ロールプレイ
- ・ペーパー
- ・パネルアター

2. 自然に目を向け

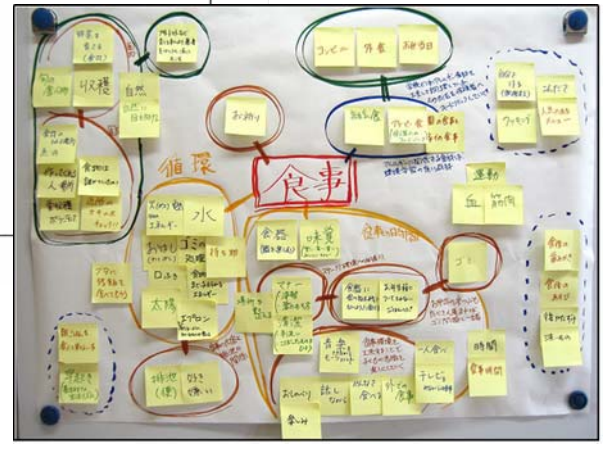
・登降園途中に見られる植物、草花を

(例)

・見つけたものを事前に示して、登降園時に目を向けさせる

・見つけたら、つづ(ま)にレポート貼りこむようにする

← 図1



↑ 写真1



↑ 写真2

● 環境学習として取り組める要素：

1年

環境学習の視点を取入れて...

具体的には...

- ・「みつけシート」を作成!
- ・「みつけシート」の活用
- ・「みつけシート」の活用
- ・「みつけシート」の活用

目的は...

- ・自然に親しむ
- ・自然の中に身を置く

☆親子満足☆

- ・大勢でゲームをして楽しいわ
- ・おしゃべりをして
- ・目で食べたらおいしいわ
- ・タトに出て行って気持ちいいわ
- ・ゴミは必ず持ち帰る!
- ・公共の交通のルールを守ろう!

このまちだいすき♡

子ども、大人も、花も、動物も、みんな元気!みんな幸せ!!

↓

大七刀な命、大七刀なまじも

↑ 図2

写真・ワークシートはいずれも、環境学習リーダー研修(平成19年度)で受講者が作成したものです。グループごとに園生活の1日の行動や1年の活動・行事を書き出したうえで、環境学習・教育として取り組む項目を選択し、ラベルワーク(写真1/手法については17ページ参照)やマッピング(写真2/手法については17ページ参照)で具体的なアイデアを出しました。

図1は、生活習慣ベースの具体化として登園・降園を取り上げ、図2は、体験・学習ベースの具体化として、遠足を取り上げ、それぞれまとめたものです。

第2章

幼稚園・保育所で環境学習・教育を具体化する方法



具体化（何を、どうやる）のための二つのアプローチについて、それぞれの手順を見ていきましょう。

生活習慣ベース：ECO（エコ）幼稚園・保育所づくり

1日・1か月・1か年と幼稚園・保育所での時間の流れをとらえた時、日々の生活そのものの多くが、環境学習・教育と直結していることに気付かされます。例えば、登・降園時の通園バス。昇降時はアイドリングストップを徹底し、月に1日「ノーマイカーデー」を設けて、道すがらの自然探索を含めた登園の推奨など視点を少し“環境”にシフトさせ工夫するだけで、今ある幼稚園・保育所での日常を、環境に配慮した暮らし（＝ECO幼稚園・保育所）に変えることができます。

この章では、職員会議や研修会など複数人で具体化を模索する場合の手順について説明していきます。

具体化の手順（3-Step）

1 現状を整理する

登園から降園までの1日の行動を時間軸で書き出します。（下図 STEP1 参照／ここではロジックツリーという手法を紹介しています。）

そのうえで、環境学習・教育として取り組むことのできるような観点を関連付けて細分化・図式化させます。

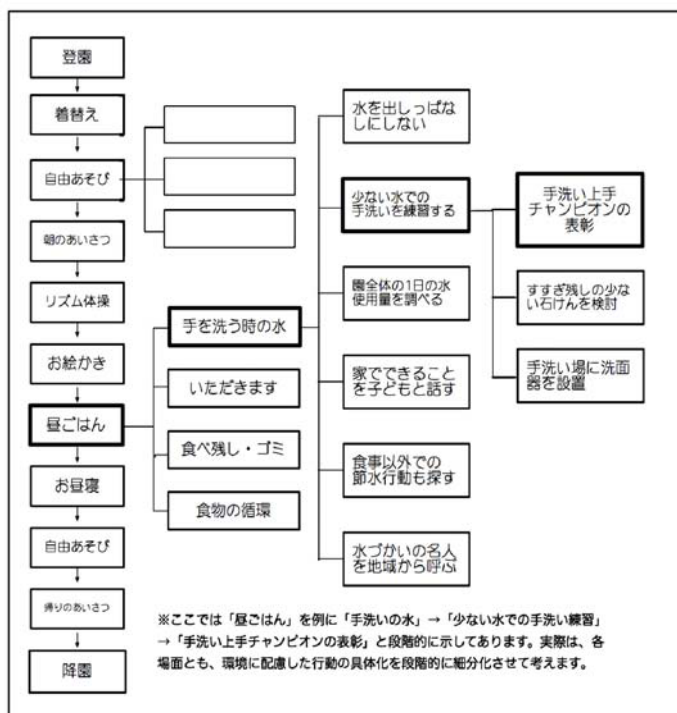
2 具体的なアイデアを出す

必要なこと（Needs）＋やりたいこと（Want）＋できること（Can）の3観点で、具体化のアイデアを広げます。（次頁図 STEP2 参照／ここでは①ラベルワーク、②マッピング、③マンダラチャートの3つの手法を紹介しています。会議の時間や人数、構成メンバー等により、適当な方法を選択してください。）

3 実施要項にまとめる

「やれたらいいね」、「いつかやりましょう」では絵に描いた餅に。具体的に展開するにあたっては、アクションシート（活動計画）のような形にし、かかわる人たちで共有しましょう（右頁図 STEP3 参照）

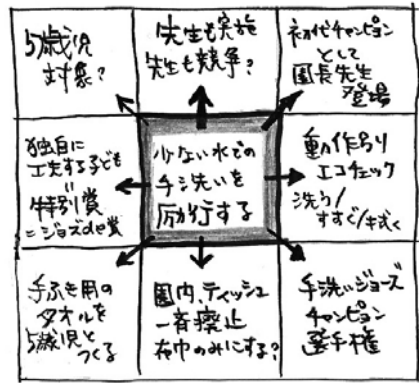
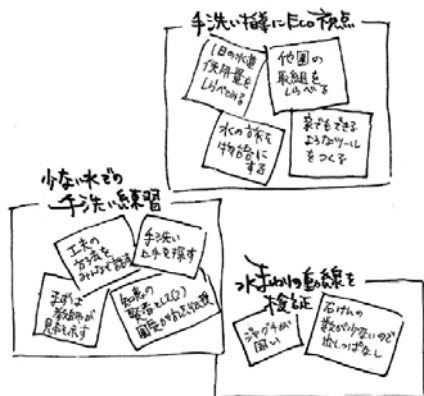
STEP1 現状を整理する：時間軸で細分化・図式化／ロジックツリー



ECO視点で考える際の動詞10キーワード

- へらす
・・・ゴミを/モノを/物を
- ふやす
・・・酸素を(緑を)/エコマインドを
- つかう
・・・長く/もう一度/代々
- つくる
・・・買わずに/材料から
- なおす
・・・捨てずに/買わずに
- えらぶ
・・・エコ商品を/自然素材を
- ずてる
・・・分別して/考えてから
- ゆずる
・・・人に/譲られたモノをまた
- やめる
・・・使い捨てを/迷ったら
- きめる
・・・実行することを/やめることを

STEP2 具体的なアイデアを出す：拡散&関連づけ/ラベルワーク・マッピング・マンダラート



【思考を分類・再構築：ラベルワーク】

ラベルワークは、アイデアをカード化（7.5cm角程度の付箋紙が最適）することにより、分類・整理・再構築を行う手法です。

まずは、思いつくアイデアをカードに書きます。この際、必ずカード1枚につき1アイデアのみを記述します。また、「節水」、「もったいない精神」などといった単語ではなく、「5歳児の洗い上手を探そう」、「習得した方法を年少さんに教えに行く」といった文章（1センテンス）で書くことがポイントです。このルールを守ることにより、抽象的でなく具体的な観点がカード化されるため、曖昧な分類を避けることができます。

【頭の中をそのまま外に：マッピング】

マッピングは、その名の通り「頭（思考）の地図」。大きめの紙（複数人で行う際は模造紙等）を横にして、中心にテーマを書き、そのテーマに連なるアイデア・問題意識・現状・情報など枝を伸ばすように、マーカーでどんどん書いていきます。

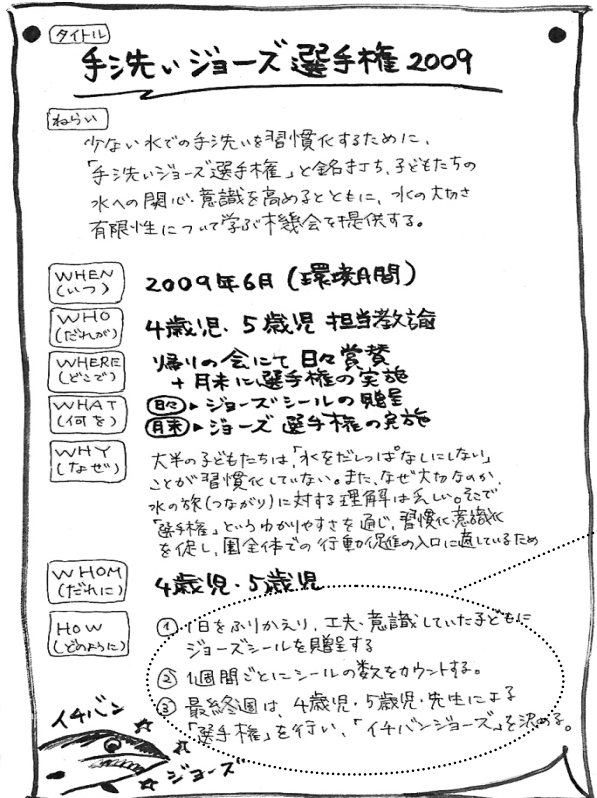
ポイントは、きれいに書こうとしないこと。関連する事柄は思考するスピードのままに手を動かすことで、混乱している要素が整理され、事象の背景にある課題がクリアになってきます。職員会議など複数人で行う時は、思いついたことを各々が書き留めるのではなく、会議の内容をすべて1枚の紙に書き残すこと（会議プロセスの見える化）により、話し合ったことを共有しやすく、また感情的な議論を避けることができます。

【1人でもできる発想法：マンダラート】

マンダラートは、9つのセルに区切った正方形の中央にテーマを、周辺の8つのセルに答え（思いつき・懸念事項など）を埋めていく発想ツールです。

連想ゲーム風に、様々な観点からアイデアを出すことで、多面的な検討が可能です。8つのセルが埋まったら、その1つをさらに中心テーマに置き直し、第2ラウンドスタートです。「食事の前、手洗いを通じて子どもたちと水の大切さを考える」ための具体案として「手洗い上手チャンピオン選手権」、「箱ティッシュ廃止、手ふきタオルを5歳児とつくる」などが出てきました。

STEP3 実施要項にまとめる：収束&共有/アクションシート



アクションシートの作成

何をどのように行うかという骨格が見えたら、左図のようなアクションシート（6W1Hを記載した活動計画）を作成しましょう。こうして文章化することは、計画内容が明確になるとともに、かかわる人たちの共通言語づくりになります。

アクションシートが完成したら、あとは実施するのみです。とはいえ、よほど意識しなければWHAT（何を）+HOW（どのように）は、できること（いつもやっていること・簡単なこと）に収まりがちです。言い換えると、WHAT+HOWが魅力的な活動にする鍵を握っているのです。

アクションシートを記入したら、第三者の意見を聞いてみましょう。「面白そう」、「素敵」といった反応が返ってこない時もチャンスです。活動を魅力的にするアイデアが眠っているかも知れません。

【活動計画アイデアあれこれ】

- ・シールを貼る
- ・スタンプを集める
- ・手帳（コレクション）
- ・表彰・メダル
- ・絵本にする
- ・発表する
- ・・・・etc.

②-1 体験・学習ベース：環境学習・教育を意図して既存の活動・行事を見直し、再構成する

すでに園で実施されている活動や行事を環境学習・教育の観点で見直すことは、今すぐ始められることであり、いつでも試行できることです。「恒例行事だから」「例年〇〇へ行っているから」といった、すでに固定化（定着化）している活動や行事を異なる観点から見直してみると、新たな展開や可能性が見つかるかもしれません。①では園での1日の生活を取り上げてみましたが、ここでは4月（入園）から3月（卒園）の1か年を環境の観点で紐解きます。

具体化の手順（3-Step）

1 可能性を洗い出す

4月から3月までの活動・行事を**時間軸**で書き出します。その際、環境学習・教育として取り組むことのできそうな観点を関連付けて整理してみると良いでしょう。（下図STEP1参照）

2 具体的なアイデアを出す

必要なこと（Needs）+やりたいこと（Want）+できること（Can）の**3観点**で、具体化のアイデアを広げます。（右頁図STEP2参照/ここではTチャートという手法を紹介しています。①で紹介したラベルワーク等を用いることも可能です。）

3 指導案にまとめる

明らかにした「ねらい」を達成するために、意図的・系統的なものとして指導案にまとめます。ここでは、平成19年度環境学習リーダー研修で作成したシートを紹介しています。

STEP 1 既存の活動・行事を環境教育・環境学習の視点で見直し可能性を洗い出す：時間軸で対応表

季節	主な行事	環境学習・教育として取り組む時のアイデア
春	入園式 子どもの日 春の遠足 参観日	園庭定点撮影スタート：四季の変化を撮りため、卒園式等にスライド上映すると素敵ですね。 柏餅を素材に：新芽が出るまで古い芽が残る特徴のカシワ。作る、食べるに加えて1メッセージ。 集める・つなげる：葉や花びらで遊ぶ際に、命のバトンをつなぐ役とのメッセージを託すとじんわり。 <春は、新芽・新緑など木々や草花を素材に“成長・生命”を学ぶのに適した季節です。>
夏	七夕 プール開き お泊まり会 盆踊り	朝露：願い事は朝露を集めてすった墨で書くと叶うと言われています。早朝登園でキラッと光る宝探し。 水の旅：水を多く使う季節。雲・雨・川・海…と地球上を回る水の経路を実感するチャンスです。 始まり・終わり：朝日、夕日、月の出を見るなど、特別な日にこそ貴重な瞬間を共有したいですね。 <夏は、水・太陽・エネルギーなど地球をめぐる“循環”を学ぶのに適した季節です。>
秋	運動会 収穫感謝 秋の遠足 餅つき	家族・地域：直接環境学習とは結び付きにくい行事ですが、保護者、地域の方など来園者の多い機会としては、“子どもたち自身が環境行動を発信する場”として適しているかも知れません。 (右頁参照)
冬	クリスマス会 生活発表会 節分 ひなまつり お別れ会	・ ・ ・ 以下、園の行事に照らし合わせながら、環境学習・教育として取り組むことができそうな観点を整理してみましょう。

STEP2

具体的なアイデアを出す：拡散&関連づけ/Tチャート（これまで・これから）

・・・秋の遠足を例に、Tチャートでアイデアを出してみます。

	これまで	これから
活動名	秋の親子遠足	おやこえんそく・秋の5,000歩
ねらい	親子でドングリや落ち葉に触れることを通じて、身近な自然で遊ぶことを楽しむ。	移動手段は車が主流の親子に対し、「歩く」、「探す」、「宝物」をコンセプトに地域の自然と出会う機会を親子でもつ。
対象	4・5歳児とその保護者	4・5歳児とその保護者（同左）
実施時期	10月上旬 お弁当持参で1日	10月上旬 お弁当持参で1日（同左） ただし、地域の協力者による“芝生で野点”（野草茶+和菓子）有り
フィールド	〇〇公園（例年実施、適度な自然環境で且つ、中央が芝生のため安全性が高い）	〇〇公園（同左）ただし、現地解散を基本とする。
交通手段	園バス（複数台）にて往復移動	居住地ごとの小グループに安全確保の教師・協力者を配置、現地までは“親子”を基本に徒歩移動（緊急時ピックアップ車の確保有り）
展開	〇〇公園に着いたら、自由に遊ぶ。子どもたちはドングリ拾いに夢中になる。保護者には安全確認をお願いしているが、芝生での談笑が中心で、自然遊びには加わってもらえていない。なお、拾ったドングリは持ち帰って工作に使っている。	親子で“道草”が一番の目的。道草グッズ（万歩計・探すモノが書かれた指令書・探したモノを入れる宝箱・謎の地図）を渡し、親子のペースで5,000歩を歩く実地版RPG。目的地（公園）では、協力者による野点があり、宝物をおすそわけ（=体験の共有化）することにより、別の楽しみを享受することができる。また、事後学習として、協力者を園へ招待し“子ども野点”を行うことで地域連携を図る。

※ Tチャートとは、現状と理想・過去と現在など対照する二つの項目を比較検討する際に適した手法です。

1つの活動・行事を別の側面、反対の側面から見てみることで思考の幅を広げることができます。

STEP1で、アイデアや計画が絞られてきた段階で使います。意思決定にかかわる人たちに、Tチャートの情報を示すと客観的に比較がしやすいため、意思決定の参考にしてもらうことができます。

STEP3

指導案にまとめる：収束&共有/企画シート（指導案）作成

● 活動/行事：

目標	命の大切さを知り（目的）		実施要項
	一本の木の変化を通して 季節を感じ 自然への思いを育てる。		
時間	ねらい	活動名	概要
春 4月～5月	森の中を探検して クラスごとに好きな木を見つける	見つけた「ぼくらの木」 「たろうくん」 など名前をつける	・スタンダラリー ・お散歩マップ、カード、地図を作って 森の中を探検する ・クラスごとに好きな木を見つけ 名前をつける ・記念撮影（木の前でクラスごと） ・自分たちが選んだ木に種をまいて 保護者へ贈る。 園に帰って ・園の近くで「ぼくらの木」の仲間を見つかり、 自分たちが選んだ木と距離を測る。 ・木の出てくる絵本を見る
夏 7月～8月 8月10日	名前をつけた木をさがして その変化を見たり その木で遊ぶ。	「いかに遊ぶ？」	・3時出発（親子遠足） ・お弁当持参で遊ぶ ・木陰の涼しさを肌で感じ、葉っぱの緑色を見る ・おしゃべり（夜） ・セオリー強化を見る ・パンフレット作り ・園の近くで「ぼくらの木」の仲間の変化を見に行く ・秋に遠足に行くことを話して準備をする ・季節の歌（音楽会）
秋 10～11月	（名前をつけた）木の実や 葉っぱを採って、いろいろな物を作って遊ぶ。	「見て見たい こんなのを作ろう」	・季節の歌（音楽会） ・親子遠足 ・「ぼくらの木」や、いろいろな木の葉や実を使って 季節の絵を作る。 ・森のストーリー「見て見たい」 ・「ぼくらの木」の前で記念撮影をする ・おしゃべり ・木の葉を園に植える。
チーム名	メンバー名	日付	

15ページの図1・2同様に、環境学習リーダー研修（平成19年度）で受講者が作成したものです。

STEP2のTチャートでも比較しているように、既存の遠足を、意図的・系統的な環境学習・教育の機会としてとらえるには、何を主眼にどのような展開が適しているかと話し合いました。

②-2 体験・学習ベース：環境学習・教育を意図して新規の活動・行事を導入する

①では生活習慣ベース、②-1では既存の活動・行事の見直しと、いずれも今の園生活を環境学習・教育の観点で見直す方法を提示してきました。これらの方法は、既に枠組みがあるため時間的・空間的な見通しが立てやすいという特徴もありますが、慎重に吟味しなければ一つの活動で複数のねらいがあるような、焦点化されない活動を乱立させる危険性もあります。その意味では、既存の枠組みに縛られず、環境学習・教育に焦点化した活動・行事を導入すると良いでしょう。

とはいえ、意図的・系統的な環境学習プログラムを完成させることは一朝一夕にはできません。そこで、環境に関する社会全体の“旬”、“時流”をヒントに、園独自のアレンジを加え、効率的・効果的な環境学習・教育に仕立ててみるのがオススメです。

ここでは、環境に関連したイベントを例に、園で取り組む場合の展開案を紹介します。

具体化の手順 (3-Step)

1 テーマを探す

環境に関連するイベント・歳時記の例を挙げています。(下図参照) このほか、地域の祭りや風習、歴史などからヒントを得て、新たな試みに適した場面・テーマを探しましょう。

2 意図的・系統的な教育・学習場面としてアレンジする

時代の流れは、“参画”(良い意味での便乗)です。いかに子どもたち自身が当事者になれるか、周りの大人たちが興味・関心をもって参加できるか、面的な広がり(うねり)として魅せることができるか考えてみましょう。

3 指導案にまとめる

まとめる際は余白(遊び)を残すことがポイントです。細部まで作り込むとイレギュラーに対応できません。魅力的な活動にするヒントも参照にしてください。



旬のイベント紹介

打ち水大作戦

決められた時間にみんなでいっせいに水をまくことで、伝統的な「打ち水」の効果を科学的に検証しようとする、前代未聞の社会実験です。(打ち水大作戦・WEBサイトより転記)

大暑(暑さが最も厳しい時期)から処暑(暑さがやむ、の意味で涼風が感じられる時期)の1ヶ月(2008年は7月22日~8月23日)残り湯などの二次利用水をつかった打ち水を行う一斉活動です。2003年からスタートし、全国各地(世界でも!)賛同する人・組織・企業が「この指とまれ」方式で増え続けている魅力的な活動です。WEBサイト(<http://www.uchimizu.jp>)も充実し、「私たち、賛同します!」の登録により、打ち水日記がアップできるほか、チラシ作成のためのロゴやバナーなど、自由に使えるツールが多彩に準備されていて、うねりをつくる・盛り上げる遊び心も満載です。

打ち水大作戦〇〇園の巻

最近、“打ち水”が流行っているみたいですが、うちの園でも取り組みませんか？

そんなA先生の提案によって、動き出した「〇園打ち水大作戦」。打ち水をする一それだけのコトだからこそ、魅力的な環境イベントにできないだろうかと思いを絞ってみました。

「まずは格好から入りましょうよ」とB先生。浴衣姿で柄杓片手に涼を打つ江戸時代にならって、子どもたちが浴衣で集まる、盆踊りの日を「〇園打ち水スペシャルDAY」とすることに。「1日だけでなく、何日かしませんか？」とC先生。「それなら、“手洗いジョーズ選手権（17ページ参照）”と連動させましょう」とA先生。A・B・C先生は、早速企画を練り始めました。

1. 〇園では、平成20年の環境月間（6月）を少ない水での手洗いを習慣化させるため、“手洗いジョーズ選手権”を行う。
2. プール開きをし、水に頻繁に触れる7月を“打ち水月間”として、プール・雨水等の二次利用水の還元を定着化させる。
3. 8月10日の盆踊りに「江戸の暮らし」要素を加える。
具体的には①浴衣で打ち水②金魚売り・氷屋さんの登場③蚊帳コーナーの設置により、涼を楽しむ機会を提供し、クーラーに依存しがちな生活習慣からの移行を図る。

と、骨子が決まったようです。そもそも、世界の水事情はどうなっているのだろうか？うちの園では1日にどのくらいの生活排水を流しているのだろうか？子どもたちは、水についてどんな感性・意識をもっているのだろうか・・・調べることを考えることはたくさん出てきます。



旬のイベント紹介

ごみ拾い

なぜ大人が捨てた物を・・・子どもに大人の尻ぬぐいをさせるなんて！というマイナスイメージもありますが、このごみ拾いを「かつこ良くて」、「おしゃれで」、「楽しい」活動にする取組が、近年日本各地で行われています。なかには、「ごみ置き場をアートにするプロジェクト」と名付け、赤の花（可燃ごみ）・青の魚（不燃ごみ）・緑の木（資源ゴミ）のイラストが入ったごみ袋を作製しているデザイン会社もあります。

同じ絵のごみ袋を積み上げれば、ごみ置き場がお花畑や海原、森のように見えることにプロジェクト名は由来しているようです。

確かに、ごみ袋を片手に園の周辺を歩くと、ペットボトルやたばこの吸い殻、空き缶などがあつという間に集まってしまう現実があります。とはいえ“拾うこと”に終始するのではなく、ごみとは何かを考えてみたり、物を大切にするためのルール決めをしたりと、ごみ拾いを糸口に、意図的・系統的な活動の機会として発展させるための要素を多分に含んでいます。

また先に挙げたプロジェクトにヒントを得て、園の周りの自然やまちの探検を兼ねてごみ拾いを行うのが良いでしょう。その際、子どもたち自身が絵を描いたごみ袋を持っていくことをオススメします。自筆の絵が描かれた袋を持って、まち中探検です。思わずワクワクしてしまう活動になること間違いなしです。また、思わず地域の人が声を掛けたくなる活動になること間違いなしです。子どもたちが描いた絵の袋を地域の方々にも配って、月に一度「クリーンアップデー」を設けるのもよいでしょう。もちろん、新聞社やテレビ局にアナウンスすることをお忘れなく！



第3章

具体的実践に向けての保育者の心得



園での効果的な環境学習・教育を進めるに当たっての考え方・具体的な方法を見てきました。具体的な実践に向けては、それを進める園、一人一人の保育者の環境問題や環境保全に対する意識、実践に向けての考え方ややる気が大きく影響します。

ここでは園全体で取り組もうという空気や一人一人のやる気を高めていく手順をみていきましょう。

STEP1

まずは、チェックシートを使って今の状況を見てみましょう。

エコでイイコを育てる E-CO保育やれるかなチェック

- スタッフ全員が環境問題や、そのための取組の重要性を認識している
- 園として環境学習・教育に取り組むに当たって、明確な考え方をもっている
- 園として環境に配慮した運営・管理を進めていくための明確な考え方をもっている
- 上の2つの考え方がスタッフ全員に共有されている
- 園としての考え方に基づき、環境学習・教育の取組を行っている
- 園の子どもたちや保護者にもそうした取組に力を入れていることが理解されている
- 園として環境問題や環境保全、環境学習・教育についての情報収集やスタッフの提供に努めている
- スタッフは園生活で環境に配慮した行動を日々心掛けている
- スタッフは私生活で環境に配慮した行動を日々心掛けている
- スタッフとして環境問題や環境保全、環境学習・教育について意識的に情報収集、自己啓発に努めている
- の入らない項目は多いがとりあえずできることから頑張っている。これから取り組んでいこうという思いはある。

STEP2

チェックした結果はいかがだったでしょうか。心掛け、やっていくことはいろいろありますが、とりあえずは最後の口に「レ」が入れば十分でしょう。

ここでは、具体化をスタートするに当たり、まずは園・保育者一人一人の立場で大切だと思われる役どころと心得を押さえておきましょう。

園の立場として

1 使命（ミッション）を明らかにする役割

今や環境問題は人類にとって最重要課題の一つであり、人々の健康で安全で幸せな生活を脅かしています。子どもたちの健康で安全で幸せな生活のための心身の発達を促進し、助長することを役割とする幼児教育（保育）現場で、環境学習・教育をその使命として位置付けることは必然とも言えます。とはいえ、様々な保育内容が期待される保育現場で、そのことを意識して実践していくためには、保育者自らの言葉で魅力的な目標に仕立てましょう。自分たちの取組の意味や価値が明確になれば自ずとやる気も高まります。

2 方向性（ビジョン）を示す役割

幼児教育の目指すところと、環境学習・教育のそれはほぼ同じと言っていいほど重なり合っています。だからといって、今まで通りの保育を行っていれば良いのでしょうか。環境学習・教育の具体化ということ言えば、今行っていることを環境学習・教育という観点でとらえ直したり、意味を考え直したりしてする必要があります。そのためには、自らの園の環境学習・教育を通じて育てて欲しい子ども像をしっかり描いてみる。そのために現在の保育をどうとらえ直すか、あるいは新しい試みとして何を行うかを考えてみる必要があります。

3 行動（アクション）を創り出す役割

組織やグループがある事柄を丸となって進めていくためには、具体的な目標やその達成のための手段をアタマとココロで納得していることが不可欠です。園として環境学習・教育を優先順位の高い保育内容として進めていくに当たり、使命の確認や方向性の整理・明確化を保育者全員の参画と協働のもとに行い、明文化し適切な場所に掲示するなど、「見える化」していきましょう。また、子どもたちにも分かる名称をつけたり、保護者向けの通信などのヘッダーやフッターにも必ず入れたりして、子どもたちはもとより、周囲の人たちの理解や参加を試みましょう。

保育者の立場として

1 学習・教育の場を計画する役割（デザイン）

地球規模で語られる環境問題を扱う環境学習・教育ですが、保育現場での取組では、年中・年長の子どもたちを対象に、ごく身近な自然の中での楽しい遊びを通して感じたり、気付いたり、考えたり、理解するといった様子が想定されます。その際、保育現場では「遊ばせておけば保育になるか」と議論になることがありますが、環境教育現場では「自然の中にいれば環境教育になるのか」と言われます。そのことを改めて考えてみる必要があります。

偶然的・非体系的な遊び中心の学習段階から、体系的・自覚的な保育が必要となってくる年代を対象とする難しさはありますが、学びの有効な手段である「遊び」をどう系統学習に生かせるか、保育の考え方、発達のメカニズムに詳しい保育者の皆さんのデザイン力（保育計画力）に期待がかかります。

2 学習・教育の場を促進させる役割（ファシリテーター）

環境に配慮した暮らしが実践できる人を育てることを目指す環境学習・教育では、環境の事柄についての知的・観念的理解もさることながら、態度や価値をはぐくむことが重要視され、参加型・学習者主体と言われる体験学習法が広く用いられます。そこでは、体験を通しての気づきや学びを体験学習の循環過程に沿って引き出し、促進させる「ファシリテーター」が重要な役割を担っています。保育者が一つの「ねらい」を実現させるために必要と思われる「望ましい経験」の場を整え、その経験を通して子どもの成長・発達を促そうとすることそのものです。そうした役割を環境学習・教育の視点で改めて意識してみてください。

3 環境に配慮した行動の模範を示す役割（モデル）

保育の中で、保育者がどう考え、どう行動するかが子どもたちに大きく影響するように、保育者自身の環境に対する意識や環境とのかかわり方が、そのまま子どもたちの環境学習・教育、環境に配慮した暮らしの実践モデルとなります。しかし、これを役割や立場で意識すると負担にもなるし、すぐに底が割れてしまいます。世間を見渡せば、環境に配慮することは以前のように特別なことでもなく、貧乏臭く不便でもなく、一人一人ができることからこうした暮らしづくりをすることは、ある意味当たり前でおしゃれで豊かなこととなりつつあります。無理せず、できることから楽しんでやっていると見た目にも大切です。

STEP 3

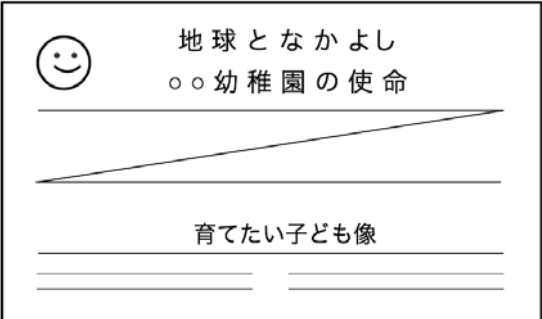
園全体で環境学習・教育に取り組んでいこうという空気や、保育者一人一人のやる気を創り出し、取組の質を高めていくには、取組の意味や価値が実感できる魅力的な目標を掲げ、それを「見える化する」(＝明文化し、身近にいつも目にできるようにする)ことが効果的です。

ここでは、園全体にとっての目標とも言える使命(ミッション)と方向性(ビジョン)、さらにそれらを実現に導く保育者一人一人のエコ保育スタイル(行動指針)を「見える化」しましょう。

使命(ミッション)と方向性(ビジョン)の見える化

【見える化の手順】

- 1 「園の環境学習・教育の実践で達成したいこと」「園の環境学習・教育の実践で育てたい子ども像」をテーマに、17ページのSTEP2で紹介したラベルワークで整理する。
- 2 整理されたものを明文化する。
 - ポスターにする(適当な場所に掲示)
 - カードにする(保育者のエコ保育スタイルカードに印字。保育者一人一人が携行)



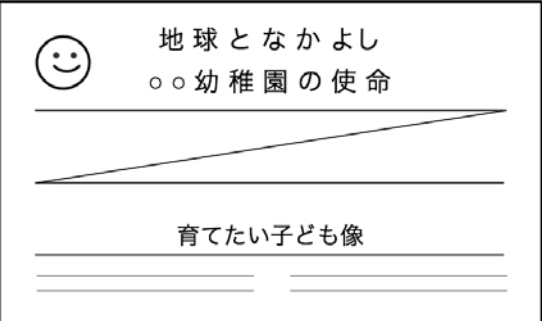
地球となかよし
○○幼稚園の使命

育てたい子ども像

保育者一人一人のエコ保育スタイル(行動指針)

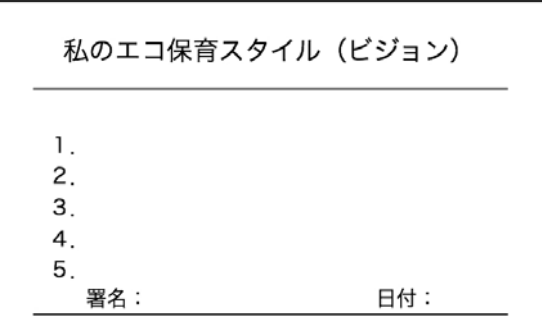
【見える化の手順】

- 1 園全体で共有した使命(ミッション)・方向性(ビジョン)を改めて確認する。
- 2 保育者一人一人で、その実現のために大切・必要だと思う行動を書き出す。
- 3 書き出したものを見直し、その中の項目を抽出、あるいは統合して3～5項目にまとめる。
- 4 表面に使命、育てたい子ども像を印字したカードの裏面に3～5項目の行動指針を印字してできあがりです。
- 5 各自の行動指針を読み上げ、他のスタッフから励ましの拍手をもらい、決意を表すサインをします。後はカードケースに入れ、名札と一緒にストラップに止め、常時携行します。



地球となかよし
○○幼稚園の使命

育てたい子ども像



私のエコ保育スタイル(ビジョン)

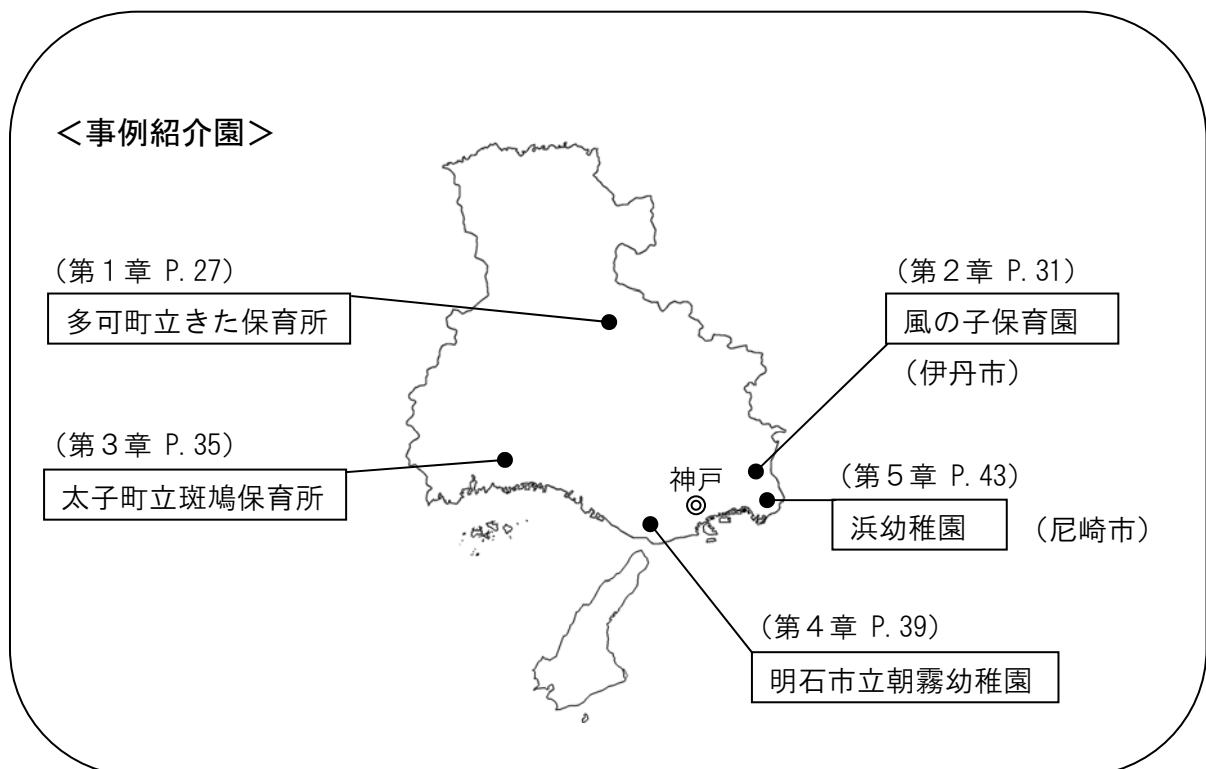
1.
2.
3.
4.
5.

署名: _____ 日付: _____

さて、具体化に向けての考え方も押さえ、具体化の手順も見えてきました。また、具体的な取組をスタートするに当たっての心得も確認しました。いよいよ実践です……。

第3部

幼稚園・保育所における環境学習・教育の実践事例



第3部 幼稚園・保育所における環境学習・教育の実践事例

第3部の基本構成について

第3部は、実践事例として、幼稚園・保育所での実践事例5事例を掲載し、1事例4ページ構成としています。本ページでは、第3部の基本構成を説明する。



第1ページ（概要）

平成20年度に取り組んだ環境学習・教育の概要等について記載している。

第2・3ページ（実践事例）

平成20年度の環境学習・教育の取組から、代表的な取組を事例として紹介している。

第4ページ（年間計画）

年間の取組を表にしている。第2・3ページの実践事例の位置も分かるようにしている。

第1ページ

(前章の第4ページ)		第〇章	
		〇〇〇〇	〇〇〇〇
	1 園の現況	
	2 環境学習・教育の実践概要	
	(1) テーマ	
	(2) ねらい	
	(3) テーマ設定理由	
	(4) 経緯と展開	
	3 実践による成果と課題	

第2・3ページ

活動名

事例の内容をイメージできるような名称にしている。

指導のポイント

環境学習・教育の観点を踏まえて、記載している。

活動名(タイトル)		写真・図	
1 概要	写真・図	4 成果と課題
(1) 活動名		
(2) ねらい		
(3) 場所		
(4) 対象		
(5) 時期(時間)		
2 指導のポイント		
3 実践事例		

写真・図

関連箇所に適宜または第4ページ上段にまとめて入れている。

成果と課題

環境学習・教育の観点を踏まえて、記載している。

写真等

第4ページ上段は、第2・3ページからの続きとして、写真や図をまとめて、または「4成果と課題」等の本文を掲載している。

年間計画

実践事例の年間計画を「自然体験」「生活体験」の観点から見た子どもたちの活動と、園における活動と合わせて掲載している。

第4ページ

(次章の第1ページ)		年間計画		
		園における取り組み	自然体験	生活体験
	春			
	夏			
	秋			
	冬			

第1章

身近な自然とかかわろうー溢れんばかりの自然を見直そうー

多可町立きた保育所



1 園の現況

本園は多可町の北部に位置し、四方を山に囲まれ、標高 1005m の千ヶ峰がそびえる山並みが見渡せるとても空気のきれいな所である。近隣には幼稚園・小学校・学童保育施設や老人福祉施設等がある。園庭には芝生もあり、クローバーやタンポポやネジリ花も群生している。スモークツリーやサクラ・イチョウなど多種の木々があり、年間を通して身近に四季を感じることができる。

園児数は0・1・2歳児計 17名、3・4歳児計 45名と少人数で、アットホーム的な保育所である。2世代、3世代同居の家庭も多く、ほのぼのとゆったりと育てられている。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

身近な自然とかかわろう
ー溢れんばかりの自然を見直そうー

(2) ねらい

- ・恵まれた自然の中へ出掛け、原体験を楽しむ。
- ・栽培活動を通し、収穫の喜びを体験して自然に対する興味関心を深める。
- ・四季を通して自然の移り変わりを感ずる。

(3) テーマ設定理由

保育所内も地域も溢れんばかりの素晴らしい自然環境にあるのに、自ら自然にかかわろうとする子どもの姿が少ない。また、通園バスや車で門までの送迎で歩くことが少ない現実を見て、より多くの原体験が必要だと思った。園庭の畑(16hm)正門すぐ横の畑(300hm)で栽培活動を通し自分たちで野菜を栽培、収穫する中で自然の

不思議さや感動を体験したり、恵まれた自然環境の中へ出掛けたりする等、当たり前にある環境を環境学習・教育の観点で見直そうと考えた。

(4) 経緯と展開

自然環境の素晴らしい中で生活しているにもかかわらず、それは当たり前という感覚で過ごしていたように思う。まず、保育者自身の感性を高め、気付く眼をもつことなどにより環境学習・教育の取組の入り口になることを環境学習リーダー研修で学んだ。栽培活動では五感を通して自然の不思議さや美しさ、おいしさを子どもたちと共感する体験ができ、全職員で意欲的な取組となった。また、恵まれた自然環境の中へ意図的に出掛けることにより、今までただ流れていたことが不思議と思える心が芽生え、心地よさを実感し、自然への関心をさらに高めることになった。

3 実践による成果と課題

環境学習リーダー研修に参加して、日々の生活の場や畑、散歩等で当たり前と感じていた身近な自然とのかかわりを見直すことを通して、不思議さやすばらしさと子どもと共に保育者自身も豊かさが感じられるようになってきた。また、保護者には毎月のたよりとは別に“すくすく”と題した「自然体験たより」を月1回発行し保育所の取組を保護者に発信し、理解、協力を得ることにつながった。

年間を通して系統的な活動としてはまだ不十分であるが、少しずつ課題をもち取り組むことができた。次年度は、年間計画に環境学習・教育の観

点での自然体験をしっかりと加えた取組を進めていきたい。

園外の自然と親しもう

【ねらい】

- ・恵まれた自然の中へ出掛け、原体験を楽しむ。
- ・四季を通して、自然の移り変わりを感じる。
- ・身近な自然とかかわり、感じたことや発見したことを周りの人に伝える。

指導のポイント

- * 事前に下見をし、“みちくさ”をしながら自然とゆったりと触れ合える場所を把握しておく。
- * 危険箇所をチェックしておく。
- * 保護者に宝物入れの作成を依頼し、自然の宝物をお土産にしてお家の人と一緒に秋の自然を感じよう。

＜遠足を見直したきっかけ＞

春の遠足、例年通り通園バスを利用して、知恵の輪があり、くぐると知恵が授かるという文殊堂、桜公園へ出掛けた。お弁当は保護者の手作りで食べきれない程の2～3段もあるカラフルな物であった。お弁当を食べるのに精いっぱいじっくり遊ぶ時間の余裕もなく帰ったという状態の遠足だった。

環境学習リーダー研修で環境学習・教育の観点で「遠足」を見直す研修を受け、本園においても“次回の遠足を環境学習・教育の観点から見直してみよう”と職員で話し合い取り組んだ。

【実践事例】

＜事例1＞ 秋の遠足 荒田神社（播磨二宮）
対象2、3、4歳児

目的地までバスで行くのではなく、出発時間を早めに設定し各年齢に応じて自然と触れ合う場を多く取り入れることを考慮して途中から歩いて行った。十分な時間を設定し、自然と触れ合いながら

“みちくさ”を楽しんだ。あぜ道を歩いていると子どもたちのズボンにヒツキムシがいっぱい付き、歓声をあげた。神社ではドングリ拾い、参道の土手滑り等存分に楽しんだ。「自然の宝物をお土産にしてお家の人と一緒に秋の自然を感じよう！」と保護者に宝物袋の依頼をした。子どもたちは見付けたヒツキムシやドングリ等を、大事に家に持ち帰った。翌日の連絡ノートで「大きな袋に小さなドングリが1個入っていて、“お土産”ってくれました。うれしかったです」「小さな木の枝がお土産でした。どんな所へ行ったのかが目に見えそうでした」等、保護者の感想が聞かれた。拾ってきた木々で小枝を使って、モビールや額縁を作り、その中に遠足の楽しい絵をかくて飾る等、製作活動にも発展した。

＜事例2＞ 散策 山の中の桜公園
対象3、4歳児

春の遠足と同じ場所に今回はバスでなく1.5kmを3歳児と4歳児が手をつないで、励まし合いながらゆったりと歩いて出掛けた。行く道々、木々の紅葉の美しさを存分に感じ楽しんだ。

公園に着くと、秋の遠足の土手滑りの楽しさが忘れられなかったようで赤土の土手を見付け、大はしゃぎで滑り遊んだ。舞い落ちる落ち葉を手で受け止めて、「これ真っ赤やなあ、きれいなあ」ときれいな葉っぱ探しが始まった。風に吹かれて飛んでいく葉っぱを見ながら「鳥みたいやなあ」と子どもたちの発想は楽しく、感性の豊かさを感じた。落ち葉を踏みしめる音を発見した子どももたくさんいた。

大きな岩もいっぱいあり、高いところに登り見渡すととっても雄大で気持ちがよかった。岩の上で感じる秋の風の心地よさを全身で味わった。子どもも保育者も、自分たちの住んでいる町の自然環境の素晴らしさを実感する経験となった。

＜事例3＞ 山登り 金蔵山→大歳神社
対象4歳児

「次は山に登ろうよ！」という子どもの声で山登りを計画した。

ところが朝から雨。残念ながらしょげていたところ天候が回復し、子どもたちのどうしても行きたいという気持ちが強かったので、雨上がりの山道は危険で安全面を考慮して大歳神社(2.9km)に場所を変更して行くことにした。

途中、四季の森や神社に立ち寄り休憩し、いっぱい“みちくさ”をした。雨上がり道のあちこちに水溜りがありそれを覗いた子どもが「空がうつとる」「雲が見える」と気づき、保育者も共感して感動しあった。

今回は保護者にお弁当の依頼をしないで、調理師に炊き込みご飯のおにぎりを現地まで運んでもらい食べた。自然の中で味わうおにぎりの味は格別だった。

＜事例4＞ 山登り 金蔵山
対象4歳児

予定していた山登りをどうしてもしたいという声が保護者や子どもたちから上がり、話し合いの結果、当初予定していた金蔵山に登ることにした。通園バスを使って10分間程行き、山道を30分歩き、山登りを体験した。軽々登り切る子どももいるかと思えば、途中で泣いてしまい保育者が大きく援助した子どももいて歩くことの少ない現実を実感した。

現地ではイチョウの大木があり一面黄色いじゅうたんを敷き詰めたようだった。子どもたちは歓声をあげて両手いっぱい落ち葉を集め、一斉に放り投げ、開放感を体全体で味わっていた。

保護者にも参加を呼び掛けたところ、数人の参加があり一緒に登った。

この時のお弁当は“おにぎりのみ”ということ

にした。豪華なお弁当もいいが自然の中だとおにぎりだけでも最高で子どもたちはおいしそうに食べていた。参加した保護者から、後日の連絡ノートに「自然の中に身を置くととてもいい体験でした。親子で楽しいひとときを過ごすことができました」と喜びの声が聞かれた。

【成果と課題】

溢れんばかりの園周辺の自然環境を見直そうと取り組んでいくと、子どもたちから「出掛けよう」「出掛けたい」という気持ちが高まり、それに保育者が寄り添うことで、自然の魅力を肌いっぴいと感じ、楽しい自然体験につながった。体験したことが心にとまるこの年齢だからこそ、じっくり時間を掛けて“みちくさ”をいっぱい体験することが必要である。

少しずつだが保護者を巻き込んだ活動も実施できてきた。身近な自然に存分に触れる中で、新たな発見をしたり、友達や保育者と感じたことを伝え合うことで互いに認められる喜びを感じたりすることができる。また、動植物とのかかわりを通して、それらの命を感じ、大切に思う気持ちが芽生えてくる。こういった体験を日々の保育の中で大切にしていきたい。

加美区の豊かな自然の中で、子どもたちと共に“自分の足”で、“自分の目”で、“自分の体”で、自然との付き合い方を知り、自然のもつ様々な不思議さや魅力を見付け、環境学習・教育の観点を意識した体験活動を工夫していきたい。

さらに、子どもたちと共に、きた保育所の広い畑での野菜の栽培収穫、落ち葉の腐葉土作り、給食の野菜くずやウサギの糞を畑の堆肥としてのエコ活動等も積極的に取り組んでいきたい。

家庭への発信



黄金に輝くいちよのじゆうたん!!

かなくらさんに登りました。黄金に輝くいちよのじゆうたんにビックリ!! 雨が降ったり止んだりしましたが、楽しかった。鐘つき堂でみんな1回しっかり鐘を打ちました。

すくすく!! No.8 平成20年12月18日

すくすく!!

No.8 平成20年12月18日
多可町立きた保育園



おにぎりおいしいなと見せ合いました。



お買い物ごっこで変なクッキーを自分たちの手で作りました。手触りがとても気持ちよかったです。

12月12日多可町老人クラブ女性部のおばあちゃん達と、めずらしい石臼できな粉のきをしました。大豆を2粒穴に入れてグルグル回しました。とっても甘いきな粉ができました。その後おはぎを作りました。



12月6日 青年団のお兄さん・お姉さんたちとお餅つきをしました。とっても寒い日でなぜだか顔が止まりませんでした。お餅はおいしかったです。



★お知らせ 19日のクリスマス会の日からこれまで写してきたアルバムに入りきれない写真を厳選します。1枚35円です。可愛いのもつけてね、ある分だけです。ごめんなさいね!!

保護者には毎月のたよりとは別に“すくすく”と題した自然体験のたよりを月1回発行しています。保育所の取組を家庭につなげ、理解と協力を得ることができました。

年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	・食のリーダーさん・地域の方と触れ合いについて話し合う	れんげ畑へ出掛けよう	園内でタマネギとじゃがいもを収穫しよう 食のリーダーさんの畑で赤いもを収穫しよう		よもぎつみをしよう	よもぎ入り焼き餅をつくろう
夏	・環境学習リーダー研修の参加・報告 ・今後の計画の見直し	野菜を育てよう ミニトマト・トウモロコシ・スイカ・きゅうり・なすび・人参・かぼちゃ	さつまいもの苗植えをしよう		なすびのバーベキューをしよう	
秋	・お出掛けの見直し ・畑の管理協力を得る	さつまいも・さいも・枝豆を収穫しよう	秋の自然を楽しもう 桜公園・荒田神社・金蔵山へ出掛けよう <事例1・2・3・4> りんご園に行こう		柿の皮むきをして つるし柿をつくろう	やきいもをしよう
冬	・取組の反省 ・来年度に向けての方向性の検討	野菜を育てよう 大根・丸大根・人参・ブロッコリー・絹さや タマネギの苗植え・じゃがいも植え・グリーンピース			臼と杵で餅つきをしよう	石臼できなこひきをしよう そのきなこでおはぎをつくろう

人と人のつながり

第2章 小さな命から学ぶこと

風の子保育園



1 園の現況

本園は、伊丹市西部に位置し、周囲には武庫川が流れ、近隣には広い公園や神社、田畑がある等、自然と触れ合える環境にある。

0～1歳児、2～5歳児の縦割保育を行い、異年齢との交流を多くもつ中で、常に“命”の大切さに気付けるように保育を展開している。さらに、腰骨を立て、姿勢を正しくする“立腰保育”を取り入れ、日頃から自分の姿勢に関心がもてるようにしている。また、この時間は全員がホールに集まるため、子ども同士がかかわり合える場としても大切にしている。

これまで、自然環境へ関心を寄せ、近隣の畑でジャガイモ掘りをしたり夏野菜を植えて収穫したりしてきた。

今年度、環境学習リーダー研修を受講したことで、より自然体験の重要性を痛感した。さらに、園の隣の畑が使用できるようになり、子どもたちと球根を植えたり二十日大根を植えて収穫したりと土に触れる機会を多くもつことができた。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

命の大切さを知らせると共に、身近な自然環境に対して目を向けていく

(2) ねらい

- ・畑で野菜の栽培を通して、野菜の成長や色、形への興味や関心を高めていく。
- ・保育者や友達と協力して野菜の世話をし、土に触れることで五感を働かせた体験をする。
- ・栽培活動の中で、異年齢児と共に小さな命の

成長を見守っていく。

(3) テーマ設定理由

本園が何よりも心掛けているのは、“命”の大切さを伝えていくことである。ゼロの状態から何かを作り出していく中での“気付き”や“発見”に着目し、さらにそこから小さな命の成長を観察しようということで野菜の栽培へと繋がった。

また、ゴミ拾い等の公園掃除では、『自分たちの手で空間を清める』という明確な目的から「環境学習・教育」の観点を意識した取組を進めていこうということにした。

(4) 経緯と展開

毎日の活動の中で、すぐにできることから始めようということで、毎年4・5歳児が定期的に行っているゴミ拾いを実施した。

また、野菜の栽培では、まず保育者が土をならし、ある程度うねを作り上げてから、子どもたちと一緒に種まきに臨んだ。20日程度で、種から収穫までできる二十日大根の栽培を通して、小さな命の成長を目の当たりにすることができ、子どもたちだけでなく保育者自身が“命”“育ち”についての『気付き』を多くもつことができた。

3 実践による成果と課題

1年間、水やりや観察を通して野菜の成長や小さな“命”に気付く体験を大切にしてきた。その中で、年長児が乳児に対する思いやりややさしいかわりがたくさん見られ、「やってあげようか?」「こうやってやんねんで」などの言葉が聞けた。乳児は年長児の言っていることを素直に聞いて

て動き出すなどの姿も見られ、子どもたちの“育ち”を発見することができた。

また、地域交流の中で公園掃除等の活動を行い、身近な環境を清潔に保つことを日常生活の中に取り入れ習慣化することで、快適な空間で生活することの心地良さをすることもできた。さらに、地域の人に「いつもありがとう」と声を掛けられ、さらに張り切ってゴミ拾いをする子どもたちの表情は、とても生き生きしていた。保育者も子どもたちと同じ立場に立って、同じ目線で物事を見ることで、子どもたちの中へより確実に目的を伝えることができることを再確認した。

野菜の成長を知ろう

～身近な野菜でみてみよう～

【ねらい】

- ・二十日大根の種まきを通して命の大切さ、また植物の成長を感じる。
- ・町探検を通して、様々な自然物の存在に気付く。

指導のポイント

- *畑の状態を見て、事前に土をならしておくことで、種まきに最適な環境づくりを心掛ける。
- *継続して水やりなどの活動を行い、植物の変化に触れる。
- *季節の図鑑を持って散策することで、自分たちで様々な種類の自然物に気付く。

【実践事例】

<事例1> 種まきをしよう！！

(場所) 園舎横の畑
(時期) 10月中旬～
(対象) 0～5歳児

新しく使えるようになった隣の畑は、元々の持ち主が様々な野菜を育てていたので土が肥えていた。職員でうねを整え、全員で二十日大根の種まきを行った。

子どもたちは、種から野菜を育てるという初め

ての体験にワクワクドキドキしながら「広い畑やな！！」「種まきって難しいのかな？」「どんな



ができるのかな？」「どんな形やろう」といろいろな言葉を発している姿が見られ、子どもた

ちの興味関心が高まっているのが感じられた。種をまく時には土の中を掘っていき、丁寧に一つ一つの種を置きながら芽の出る日を楽しみに土をかぶせていた。



<事例2> 水やりをしよう！！

～植物の育ちに気付く～
(場所) 園舎横の畑
(時間) 一日3回程度
(対象) 0～5歳児

二十日大根の種をまいてから、毎日のように子どもたちは進んで水やりに行く。



野菜がどうなっているのか気になるようだ。じょうろとバケツを持って「大きくなってかな？」と期待に胸を膨らませて畑へ向かう。

芽が出ていなかった頃は「まだかな?」「早く芽がでないかな」と言いながら水やりをする。土からかわいい芽が出てきたときは「かわいい葉っぱが出てきた」「ハートの形してるよ」等、大喜びだった。



毎日“水やり”を続け、少しずつ葉が大きくなっていくことや土から赤い大根がのぞき始めると「もっと大き

くなあれ」「早くたべたいな」と成長を楽しみにしていた。

大きく成長した二十日大根を収穫しみんなで食べた。満面の笑顔で「あまいね」「しゃきしゃき音がするよ」と会話を弾ませながらおいしそうに食べていた。



<事例3> 公園掃除をしよう!!

(場所) 近隣の公園

公園の隅々までゴミを探しに行き、見付けると手が汚れるのも気にせず、「あったー!!」とゴミを持ってくる。ゴミを全部拾い終わると「きれいやなあ!」と言い合い、自分たちで空間をきれいにしていくことの大切さを肌で感じていた。

【成果と課題】

これらの取組を通して、小さな命の成長を目の当たりにする経験ができ、活動を通して、自然と心が和んでくることを実感した。小さな命は周囲のいろいろな助けがあってこそ育まれるものである。その助けとは、即ち「土」や「太陽」「水」等

の自然そのものであり、それによって生き物は生かされている、環境のサイクル(命の循環)を認識することができた。

その中で、子どもにとって“体験すること”は、即ち“学ぶこと”である。大切なのは「なぜこれをするのか」という目的を子どもたちに分かるように明確に伝えることである。

また、年齢に関係なく0歳児から一緒に“小さな命”に触れる機会をもつことの大切さを感じた。これは、0~5歳児と一緒に生活する保育所の良さでもある。それぞれの年齢に合った活動を体験させていくことが大切である。

今回の環境学習・教育の取組から『自然環境』が保育に必要であり、あたりまえに進めていくべきであるということにも気付けた。

これらをしっかりと踏まえた上で、今後も継続的に野菜の栽培等続け、成長する喜びや驚きを共感しながら、子どもたちの感性をさらに豊かに育てていくということを意識して取り組んでいきたい。



お散歩まっぷ



年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	・職員間で環境学習についての年間計画の検討				窓からの木々の変化を観察しよう	
夏	・年間計画の再考 地域の人に協力してもらい夏の植物に触れる	園周辺の公園や河川敷へ行こう			水の中の生物を見つけよう	
		夏野菜を植えよう				
秋	・主に秋の自然に触れる	水遊び・泥んこ遊びをしよう			秋の自然物で作品を作ろう	
		どんぐり・落ち葉をあつめよう				
冬	・取組の反省および次年度に向けて課題を検討	二十日大根・小松菜を育てよう <事例1・2>				
		ゴミ拾いをしよう! <事例3>				
人と人のつながり						

第3章

身近な環境の中で自然とかかわろう

太子町立斑鳩保育所



1 園の現況

本園は、南東を姫路市、西北をたつの市に隣接する太子町のほぼ中央部に位置し、園児は0歳児～5歳児126名在籍している。周辺は宅地化が進み、子どもたちが触れて遊べる自然が少なくなりつつあるが、園の周囲には幼稚園、小学校、神社、寺、田畑もあり、日常的に散歩などでまだまだ自然に触れ合うことができる。地域には老人会等の活動も活発で、核家族が多い園児にとっては良い交流の機会となっている。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

身近な環境の中で自然とかかわろう

(2) ねらい

- ・地域の自然や周りの人とかかわりを通して地域への愛着や親しみ、感謝の気持ちをもつ。
- ・栽培活動を通して命の大切さや不思議さを感じる。

(3) テーマ設定理由

園の畑や四季に応じて変化する園庭の木々、花壇等で菜園活動や草花を育てることを通して、自然の美しさ、不思議さ、命の大切さを感じる豊かな心や、周りの人への感謝の気持ちをもてる子ども、散歩や地域交流を通して自分の住んでいる地域が好きだと思える子どもにはぐくみたいと願い設定した。

(4) 経緯と展開

環境学習リーダー研修に参加して、幼児期に環境学習・教育に取り組む大切さを感じ、我が園としてできることを見直した。十数年続けて

いる地域交流事業を通して地域や自治会とのつながりを深め、レンゲ畑、ヒマワリ畑、コスモス畑と四季を通じて畑を開放してもらったり、また、子どもたちが老人施設やふれあいサロンで和太鼓演奏やわらべ歌遊びを一緒にしたりするなどの交流を大切にしている。このかかわりを発展させ、子どもたちに地域を知ることや、地域の人とかかわりがもてるよう町探検や日常的に散歩のコースを工夫していった。

また、栽培活動では職員も野菜づくりは経験が少なく、上手く育たないこともあった。たまたま園の畑の近くで畑を作っておられる方に尋ねたのがきっかけで、次第に園の畑の様子を気に掛け、声を掛けて下さるなど協力者となって頂いている。このように思いのほか多くの方の協力があり、子どもたちが安心して自然とかかわることができ、周りの人への感謝の気持ちや温かさを感じる事ができた。「この地域に育って良かった」と思える体験が地域や環境を大切にできる子どもをはぐくむことにつながると考え取り組んだ。

3 実践による成果と課題

園の周りの環境の中で日常的に触れている自然を見直すことで、子どもたちが「感動」や、「気付き」「命の大切さを感じる」等、心を動かされる体験ができた。また、感謝の意味で自分達の住む町をきれいにすることを通し、エコについて考える機会にもなった。保育者が環境学習・教育に対する意識を高め、様々な環境の変化に対して「気付く眼」をもち、環境と子どもたちをつなぐ役割を

果たしていきたい。また、地域や保護者へも環境学習・教育の大切さを発信していきたい。

町探検をしよう ～私たちの町を知ろう～

【ねらい】

- ・1年を通して散歩に出掛けることにより四季を感じる。
- ・地域の人とのかかわりをもつ。

指導のポイント

- *季節が感じられるような日常の散歩コースを検討する。
- *ウォークラリーの形式でグループに分かれて行動する。気付かせたいことはクイズにしてポイントごとに興味付ける工夫をする。
- *危険な場所がないか確認しておく。

【実践事例】

<事例1> ウォークラリーをしよう

(場所) 園周辺の散歩コース (日時) 11月13日 (対象) 4、5歳児

コースを決める

職員が実際にコースを歩き、一定の時間内で出会わせたい所を盛り込めるように検討した。園庭を出発しいつもの散歩の拠点となっているお太子さん(斑鳩寺)の境内をゴールとした。日頃よく歩くコースから少し反れることで興味をもたせたり、知っている道につながっていて安心したりできるように考えた。

ウォークラリーマップを作る

★コースの目印は花、木の実、お店、学校、病院など子どもたちが見て分かるものにし、気付いて欲しいものや関心を向けて欲しいことはクイズとして盛り込んだ。大人がついてくださると言うことで「左右」と「方角」を入れた。

歩いてみて

★地域交流のおじいちゃん、おばあちゃんとウォークラリーをして自分たちの住んでいる町を探検

した。4、5歳児混合でグループに分かれ、それぞれが地図を持って出発した。初めて通る道もあり緊張しながらも興味津々で町を巡った。いつもの散歩はクラスごとに保育者と一緒に行くが、今日は少人数で担任がいないグループが殆どである。困った時はおじいちゃんやおばあちゃんがいてくださるので、子どもたちにとっては大変心強かった。



★「朝顔が咲いている家を右に曲がって～」や「あぜ道を通って黄色い実がなっている家を曲がる」等周りに目を向けるように工夫した。「これみかん?」「ゆずやで」とおばあちゃんに教えてもらった。

★「パン屋さんの角を西へ曲がる」の指示に「西ってどっち?」と尋ねる子どもたち。ここでおばあちゃんの出番。「お日様が沈むのはどっち?」「あ、わかった。こっちや!」と夕焼けの空に沈む夕日の方角を指して進む方向を確認した。日頃生活している地域だから分かったのだろう。反対に「お日様がでるのは東やで」と教えてもらった。

★「フェンスに絡まっている植物は?」の問いに「ふうせんかずら! 保育所にもあった」との答え。また「曲がり角の看板に書いてある言葉は?」の



問いに「みんなでまちをきれいに」と文字が読める子が読んだ。

★お太子さんでちょっと難しい質問「あ・ん像の“あ”の方は右？左？」に、おばあちゃんから「自分で“あ”“ん”と言ってごらん」とヒントをもらって「みぎ」と答えられた。

★歩いていて他のグループと出会うと、「僕たちは〇〇をみつけたー」と誇らしげに声を掛け合っていた。また狭い道に入り「忍者が出てきそうや」「忍者道や」と言いながらワクワクしながら歩いた。ここは以前に5歳児が散歩に行ったときに見付けた迷路のような路地である。「こんな道、知らなかった」とおばあちゃんからの言葉もあり、ちょっと子どもたちは自慢げだった。



この日はお弁当日ということで、いっぱい歩いた後の楽しみはお太子さんの広場でのお弁当。

子どもたちは、自然にグループのおじいちゃん、おばあちゃんの周りにシートを敷きお弁当を食べるほほえましい触れ合いの光景が見られた。ウォークラリーの形式をとったことで地域の環境を楽しみながら、町のいろいろなことに気付き、知ることができた一日だった。

【成果と課題】

4、5歳児混合のグループにしたことで5歳児は年長児らしい行動が見られた。いつもは「疲れた～」と弱音を吐く子どもも4歳児と手つないで歩くことで「守ってあげないと！」という気持ちも芽生え、ゴールまでしっかり歩き、クイズなど

は張り切って答えていた。

自分の足でしっかり歩き、周りをよく見ることでもいつも通っている道の中にも発見があり、初めて通る道も楽しむことができた。保育者が意識をもって出掛けることにより、子どもたちはいろいろなことに気付き、見付ける、感じる等の体験ができた。そして、心の栄養となるお土産をたくさん持って帰ってきた。

ウォークラリーで歩いている様子を見られた地域の方から「今日は何があるん？」「楽しそうだね」と声を掛けてもらった。参加してくださったおじいちゃん、おばあちゃんからは「久しぶりに小さい子どもたちと一緒に歩いて楽しかった」「また、こんな企画があったら参加したい」といって頂いた。

子どもたちの姿を通して、保護者も「休日に子どもの案内でウォークラリーで歩いたコースを親子で歩いてみました。とても楽しかった」「忍者道を歩いてきました」との報告もあった。子どもたちが自分の住んでいる地域を知ることと、地域の方に保育所のことを知ってもらう機会になった。また、保護者も含め「地域全体で子どもたちを育てていく」一歩にもなったと思う。

さらに今後は、親子遠足なども環境学習・教育の観点で見直し取り組んでいきたい。



第4章

自然物と触れ合う体験を通して、感動する心や探究心、いたわりの気持ちを育てる

明石市立朝霧幼稚園



1 園の現況

本園は、明石市東部に位置し、神戸市との境の明舞団地の一角にある。新興住宅地で、子どもたちが安心して外で遊べる場所はほとんど無いが、園の隣には、高齢者大学の『あかねが丘学園』があり、一年を通していろいろな形で交流をしている。

園児は、ほとんどが核家族で、3人以上兄弟のいる園児も多い。園児数は、107名で4クラス、2年保育を実施している。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

たくさん自然と触れ合おう

(2) ねらい

- ・身近な動植物や園内、地域の環境を生かして自然と触れ合う体験をし、感動する心や探究心、命を大切にする態度やいたわりの気持ちをはぐくむ。

(3) テーマ設定理由

近年、子どもたちを取り巻く環境は安全安心に過ごせる状況でなくなっている。そのため、ますます室内で過ごすことが多くなり、親も子ども心身ともに健康であるとはいいがたい状況にある家庭も少なくない。いろいろなことに興味や関心を示し、瞳を輝かせる幼児期にこそ、様々な自然環境に触れ、直接体験を通して感動する心や探究心を養い、自然事象や問題に自ら取り組もうとする人格を育てたい。また、痛ましい事件の多い世の中だからこそ、命の尊さを知り、人やものに対していたわりの気持ちがも

てる人になってほしいと願い、環境学習・教育に取り組んだ。

(4) 経緯と展開

年度当初に職員間で年間計画を立て、活動の共通理解を図った。その際、①日々の保育の小さなできごとを大切にする②園内の環境（特に朝霧山の活用）を生かす③地域力を生かす④子どもたちに直接体験をさせる（自分たちで土に触れ、苗を植える等）点に重点をおき活動に取り組むことにした。また、保育カンファレンスを行い、次の保育に生かすと共に、環境学習リーダー研修等の研修にも積極的に参加するようにした。

3 実践による成果と課題

- ・身近な自然に触れ合う環境学習・教育の年間計画を立て取り組んだ結果、後半子どもたち自らが環境の変化に目を向けるようになってきた。
- ・保育者は、幼児が今何に興味をもっているのか的確に把握し、それに応じた対応が大事である。
- ・環境学習リーダー研修等の研修に参加し、さまざまな観点から環境学習・教育について学ぶ機会となった。今後も積極的に研修会等に参加し、保育に役立てたい。
- ・毎年継続して行い、環境学習・教育の大切さを職員間で共通理解し、保育に取り組むたい。

朝霧山で遊ぼう!

【ねらい】

- ・四季折々の朝霧山に出掛け、そこに生息する動植物に興味をもつ。
- ・山を登ったり降りたりして遊びながら、体力づくりをする。
- ・園内の身近な自然に親しみ、山の変化する様子に関心をもつ。
- ・先生や友達と朝霧山で遊びながら、友達と共通のイメージや思いで遊ぶことを楽しむ。

指導のポイント

- *年間を通して朝霧山に出掛け、山の様子が変化することに気付き、感動体験が味わえるようにかかわる。
- *虫を捕まえたり、木の実や葉を見付けたたりした喜びに共感し、それらに対する興味や関心がもてるようにする。
- *崖に登れるようになったり、いろいろなものやことを発見したりしたことが、生活全般において自信となるようにする。
- *いろいろな活動を通して、友達と共感できたり助け合ったりできる人づくりを目指す。

【実践事例】

<事例1> 朝霧山で鬼ごっこをしよう

(場所) 山 山上 (時期) 5月 (対象児) 5歳児

5歳児にとっては、新しいクラスで初めての朝霧山に期待をもって出掛けていった。久しぶりに崖登りをしたり、たけのこや草花を見付けたたりして、ひとしきり思い思いに遊んだ。保育者は、子



写真1

どもたちの気付きや発見を受け止めながら、身近な自然を感じることができるようにした。

保育者は事前に山の危険物を除去し安全に遊べることを確認したうえで、クラス全員での『鬼ごっこ』を提案した。5歳児になると、集団でのルールのある遊びを喜ぶ。簡単なルールを共通理解すると、多少でこぼこした場所でも鬼ごっこを楽しみ、新しいクラスの友達との触れ合いを楽しんだ。

<事例2> 梅ジュースを作ろう

(場所) 園内 (時期) 6月中旬 (対象児) 4歳児

朝霧山へ探検に出掛けた時、子どもの手でやっと包めるくらいの大きな梅の実を見付けて大喜びした。ほのかに香る梅のいいにおいと柔らかな感触を肌で感じながら、梅の実拾いを楽しんだ。

保育者自身も初めての体験にワクワクした。立派な実だったので、梅ジュースを作ることになり、子どもたちは梅の実をきれいにやさしく洗い、来る日も来る日もでき上がりを待った。

やっとできたジュースの試飲にワクワクドキドキしながら、味わって飲んだ。

ほんのり甘酸っぱい天然ジュースに感動した。

2月3日、梅の花が咲いているのを発見して大喜び! 大きな実を見付けたことをきっかけに、子どもたちは梅の木の変化に自ら気付き関心を寄せている。

子どもたちは1年間梅を見続けている。



写真2

「先生、水が出てきた。」

「梅の色が変わった!」



＜事例3＞ 葉っぱのおうちは楽しいね
(時期) 6月下旬 (対象児) 4歳児

絵本『はっぱのおうち』(林明子作)をもとに朝霧山でいろいろな葉っぱや実などの自然物を探索し、見つけたものをダンボールの家に貼って、『はっぱのおうち』を作った。

「みんなで入ったら、ギュウギュウ。でも、おもしろい！」

「先生！こんな形の葉っぱ見つけた」
「どこにあったん？」
「こっちこっち！」
「怖いけど、登れた！」
「ヤッター！！よかったね！」
「あっ！あんな所にまた葉っぱがあった」



写真3

入園して、まだ3カ月足らずの子どもたちだが、見つけたものへの興味や喜びをそれまであまり話せなかった子どもが、少し自分の思いを伝えたり、友達の様子を見て真似たり、かかわりが生まれたりした。また、4歳児には、少し険しい斜面だが、自分の身体を使って崖を登れた喜び、自然物を見付ける楽しさを感じていた。

＜事例4＞ 虫捕りをしよう
(時期) 9月上旬 (対象児) 5歳児

園庭の花壇で水やりをしている時にバッタを見つけた。「バッタや！」「朝霧山にもっといると思う。」みんなで朝霧山へ虫捕りに行くことになった。

山の上の草原には、パッと見たところ虫がいるかどうか分からなかったが、数歩歩くと草むらからバッタ等いろいろな虫が、ピョンピョンとび出す。「いたいた！」と、早速虫捕りを始める。たく

さん捕る子ども、飼育ケースを持っている子ども、虫の餌にと草を集める子ども、それぞれに分担する姿が見られた。保育室に戻って飼育ケースを見ながら図鑑を見て、名前や飼い方を調べていた。

「カマキリはバッタ食べるで」
「カマキリ別にしとかなあかん」

降園前に、捕まえた虫をどうするかということになった。「僕らも帰るから、バッタも家



写真4

(原っぱ)に帰してやろう」とやさしい言葉が聞かれた。また、2学期の終わりには、「バッタいないな」「寒いから落ち葉の下に寝ているのかな」など、季節の移り変わりを肌で感じていた。

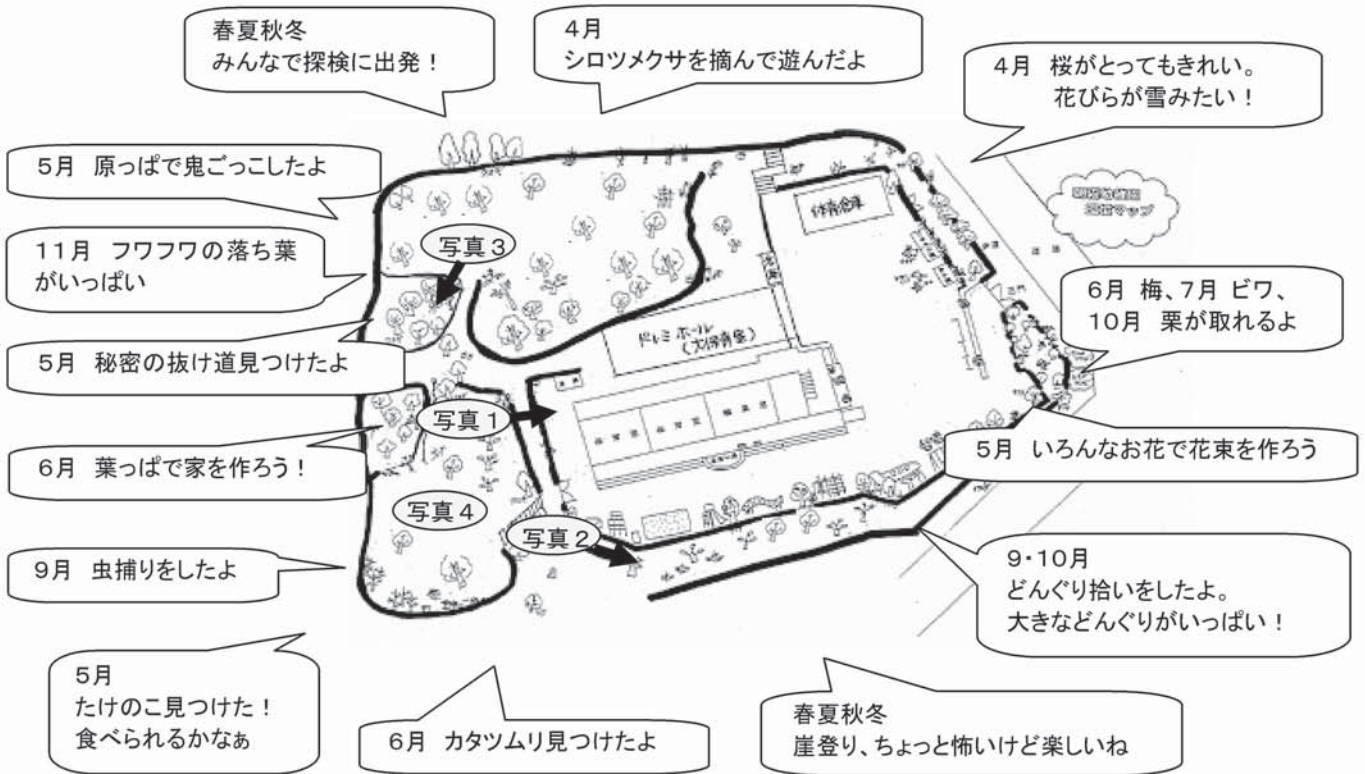
【成果と課題】

- ・四季折々の朝霧山に計画的に出掛けることで、子どもたちは山の変化に気付き、季節を体感することができた。
- ・残暑厳しい時期に虫捕りに行くと、やぶ蚊に悩まされた。その経験から山へ行く服装を学び、自主的に着替えていた。繰り返し経験することの効果や活動がおもしろければ子どもは自発的に困難なことにも取り組もうとすることが分かった。また、初めは怖がっていた崖登りも、繰り返し経験することで、一人で登り降りできるようになり、自信となった。友達と助け合う姿も見られ、人とのかかわりが自然とできた。
- ・保育者自身が“環境”“自然”を意識することが大切で、環境の変化に気付き感動したり動植物についての知識をもって子どもに接したりすると、子どもはどんどん新たな発見や学びに喜びを見出す。その姿を見てまた、保育者も学びがある。このサイクルを大切にして保育に臨みたい。

朝霧山まっぷ

園内には、『朝霧山』という自然環境がある。

子どもたちは、四季折々の朝霧山に触れたくさんの気付きを得ている。



年間計画

時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	<ul style="list-style-type: none"> 年間計画の立案・作成 季節に応じた活動の実践 	飼育物 (ウサギ、亀、小鳥) の世話をしよう	朝霧山で遊ぼう！ <ul style="list-style-type: none"> 鬼ごっこ <事例1> 草花取り 崖登り、すべり 森の家作り <事例3> 	<ul style="list-style-type: none"> サツマイモを育てよう 苗植え 	<ul style="list-style-type: none"> 朝霧山を散策しよう 夏野菜を育てよう 	
夏	<ul style="list-style-type: none"> 環境学習リーダー研修参加 季節に応じた活動の実践 1学期の活動のまとめ 		<ul style="list-style-type: none"> 虫捕り 	<ul style="list-style-type: none"> 芋畑の草取り、水やりをしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 朝霧山の清掃をしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 梅ジュースを作ろう <事例2>
秋	<ul style="list-style-type: none"> 環境学習リーダー研修参加 研修報告 季節に応じた活動の実践 		<ul style="list-style-type: none"> 虫捕り <事例4> 木の実木の葉拾い 木の家作り 木の写生 崖登り 崖すべり 	<ul style="list-style-type: none"> 収穫、試食をしよう 春咲きの花を育てよう 球根、苗植え 	<ul style="list-style-type: none"> 朝霧山の清掃をしよう イチゴを育てよう 苗植え 	<ul style="list-style-type: none"> 葉拾いをしよう (腐葉土作り)
冬	<ul style="list-style-type: none"> 季節に応じた活動の実践 今年度の反省と次年度の課題検討 		<ul style="list-style-type: none"> 年少児へ引き継ごう 	<ul style="list-style-type: none"> 冬の樹木の観察 水やりをしよう 	<ul style="list-style-type: none"> 球根の水栽培をしよう 霜、氷発見 	<ul style="list-style-type: none"> リース作りをしよう

人と人のつながり

第5章

四季を通して身近な自然「土」とかかわる

浜幼稚園



1 園の現況

本園は、尼崎市の東部に位置し、JR尼崎駅より徒歩7分の所にある。駅前には高層マンションが立ち並び、園は昔ながらの住宅地の中にある。近隣には自然豊かな公園や田畑はほとんどなく、家庭で自然に触れる経験をしている子どもは非常に少ない。

クラス数は8、3年保育、園児数は181名、教職員数24名である。

「わたしになる。ぼくになる。」を教育理念に、あるがままを受容し、子どもたち一人一人がもっている「らしさ」を引き出し、自己肯定感をもてる人になってほしいという思いをもち、日々保育をしている。

園庭には、既製の大型遊具は置かず、真砂土を盛り上げただけの築山、砂場が2カ所、伐採した枝で作ったオリジナルのティピー、子どもが自由に動かせる丸太や石などの自然物を用意し、外遊びを大切にしている。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

四季を通して身近な自然「土」とかかわる

(2) ねらい

- ・身近な自然や小さな生き物に興味・関心をもつ。
- ・四季を通して積極的に土に触れ遊ぼうとする。
- ・自然の中で遊ぶことが楽しいと感じる。

(3) テーマ設定理由

本園の子どもたちを取り巻く生活環境では、身近に自然物とかかわる経験が少なくなってきた

ている。そんな状況だからこそ、身近に自然に触れて遊び込むことは大切だと考えている。

そこで、決して自然豊かとは言えない本園が日々大切にしていることは一空・風・太陽・土・水等の身近な自然一に触れる、感じることである。

本発表では、その中でも特に「土」にフォーカスし、四季を通して思う存分「土」とかかわり遊ぶ子どもたちの育ちの姿を事例を通して紹介する。

(4) 経緯と展開

自然が乏しい立地だからこそ、自然や環境に対する豊かな感性を養いたいという思いがあり、園の行動指針に「環境」へのかかわりを掲げ、日頃から環境学習・教育に取り組んでいる。

そこで保育者が大切にしていることは、一緒に遊ぶ中で、子どもたちから湧いてくる気持ちに共感したり、感じたことを受容したりすることである。

保護者に対しては、入園説明会、クラス懇談会、ホームページ等で、日頃から園の保育方針を丁寧に伝えている。その上、親子で参加する園庭キャンプ、親子ハイキングなど、園外での自然体験活動を行うことで、実践を通して保護者に伝えるようにしている。

3 実践による成果と課題

四季を通して身近な自然を見つめなおすことで、周囲に豊かな自然がなくても環境学習・教育は可能であることが分かった。

外遊び中心に保育を進めることで、テレビやゲ

ームなどに夢中になっている今の子どもたちが自然や小さな生き物に興味・関心をもち、四季を通して積極的に土とかかわり、汚れることに躊躇せずに遊ぶことができるようになっている。

そのようになるには、大人が子どもと一緒に自然に触れ、変化に気付き感じること、外で思う存分遊ぶことを保障する必要がある。

身近な自然「土」と 四季を通してかかわる

【ねらい】

・四季を通して積極的に土に触れ遊ぼうとする。

指導のポイント

*子どもの発見・感動・気付き等があるがままだに受け止める。

*子どもの活動の幅が広がるように、虫かご、図鑑、スコップ等の必要な道具をあらかじめ用意しておく。

【実践事例】

<事例1>幼虫・虫探し

(時期) 4月上旬～

(対象) 3～5歳児

(場所) 園庭(虫のいる場所)

春、進級したばかりの5歳児が、スコップ片手に園庭に走り出す。昨年までの経験から、この時期になると、幼虫や虫が土の中にいること、そしてそれがどの場所において、どの場所にいないのかを把握している。

友だちと協力しながら、枯葉をのけ、土をスコップや手で掘っていくと「あ！ダンゴムシおった」「幼虫やん！幼虫見つけたで！」という声がすぐに聞こえてくる。

一方、3、4歳児の進入園児は、幼稚園生活に対して不安が多くあり、集団に馴染めない子どもがたくさんいる。その中で土に触れ身近な虫や幼

虫とかかわることは、彼らにとって幼稚園の中に居場所を見付け、しばしば落ち着き、安心できるものになる。虫への興味が湧いてきた子どもたちは、やがて年長児に対して憧れをもち、年長児の後ろを年中・少児がついてまわる姿が見られるようになる。

<事例2>どろんこ遊び、田植え

(時期) 6～7月

(対象) どろんこ遊び 3～5歳児

田植え 5歳児

(場所) 園庭全体、畑

本園では6月に入り、水遊びが気持ちいい気候になると、どろんこ遊びが始まる。普段ならばスコップを使っても掘りにくい土が水と交わることで変化し、その柔らかさを全身で感じる子ども、泥を丸めて団子を作り、的にめがけて投げる子ども、友だち同士で泥の塗り合いをし、その気持ちよさを互いに感じる子ども等、様々な形で土とかかわる姿がある。そして一人一人が自分の落ち着ける場所を見付け、自分たちなりに泥で遊ぶことを楽しみ、全身でその気持ちよさを感じている。

また同時期に年長児は田植えを行う。発泡スチロールの中に入った、園庭の土とは匂いも質感も全く違う土を足で踏む土作りから始める。

ここでもどろんこ遊びの経験があるため、ほと



んどの子どもがためらうことなく土踏みを行う。また、足だけでなく、手で感触を味わったり、匂いをかいだりすることで、園庭の土と田んぼの土の違いに気付く姿が見られる。

＜事例3＞恐竜の化石見つけたよ！

（時期）9月下旬

（対象）3～5歳児

（場所）園庭（築山）

本園の園庭には、真砂土を盛り上げただけの大きな築山がある。築山は毎年年度始めに土を入れるが、あえて土は固めることをせず、子どもたちが、自由に穴を掘ったり、溝を作ったりできるようにしている。またそこから隣接する砂場へ水を流し、流れを観察したり、水をため、池に見立てて遊んだりする姿も見られる。

そんな築山から、ある日「先生、恐竜の化石が出て来た！」という声があがった。築山を見てみると、スコップ片手に大勢の年長児が集まっている。子どもたちは築山に埋まっている大きな石を恐竜の化石に見立てて次々に掘り出していた。普段から恐竜に対して興味があった子どもたちは、

目を輝かせていた。この発掘作業は2～3週間続き、最後には恐竜の形に整えて公開展示するまでに至った。その展示を見に来た年少児が年長児の真似をし、築山を掘る姿も見られた。

同時期には芋掘り遠足もあった。日頃のこのような経験もあり、素手で土に触れ、芋を掘り出すことに抵抗なく取り組んでいた。

この時期の子どもたちは、土を掘り何かを見付け出すことに夢中になっていた。

【成果と課題】

幼児期の環境学習・教育が成立するためには、適当な環境を整え、保育者が一緒に共感したり、感じたことを受容することが大切である。その中で子どもたちは想像力と創造性を発揮し豊かな遊びを展開するようになり、それが後に自然や環境への広く深い興味・関心へと繋がっていく。

子どもたちの傍にいる大人がどの様なかわりをするのか、どの様な環境を用意するのが重要であり、特に大切なことは、保育者自身が日々四季を感じ、感性を研ぎ澄ませ、自然と向き合っていくことが大切である。



<本園の園庭の環境>



オリジナルのティピー



園庭築山の木

年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	・職員間で話し合い環境学習の年間計画を立案		チュウリップを見に行こう			
夏	・環境学習リーダー研修へ参加・報告		ツバメの巣を見に行こう			
			どんご遊び・田植えをしよう <事例2>			
秋	・環境学習リーダー研修へ参加・報告		お泊り保育を経験しよう(能勢)			
		服部緑地・芋掘り遠足に行こう 稲刈り・脱穀をしよう				
冬	・次年度に向け振り返り、方向性の検討	恐竜の化石探しをしよう <事例3>				
		さんま・焼き芋パーティーをしよう ほうれん草収穫・クッキングをしよう				
		飼育物とかわろう 雪遊び遠足に行こう				
人と人のつながり						

参 考

幼稚園・保育所における環境学習・教育の実践事例

過去に実践事例として紹介しました、8つの幼稚園・保育所の取組につきましても、参考として事例集に収めました。

事例5～8につきましては、抜粋版となっておりますので、詳しくは、
「ひょうごっこグリーンガーデン事例集」
(兵庫県健康生活部環境政策局環境学習課 平成19年6月発行)
をご覧ください。

<事例紹介園>

(事例2 P.53)

加東市立三草保育園

(事例1 P.49)

高砂市立北浜保育園

(事例7 P.73)

明石市立二見幼稚園

(事例6 P.69)

神戸市立西野幼稚園

(事例4 P.61)

三田市立藍幼稚園

(事例3 P.57)

YMCA松尾台幼稚園

(猪名川町)

(事例5 P.65)

宝塚市立宝塚幼稚園

(事例8 P.77)

神戸市立あづま幼稚園

神戸

もくじ

ちきゅうとなかよし はじめのいっぽ (地球となかよし 初めの一步)

一 幼児期の環境学習・教育実践事例集一

(兵庫県健康生活部環境政策局環境学習課 平成 20 年 3 月発行) に掲載した実践事例

- 事例 1 自然を通して、生命の不思議さを感じる・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 49
(高砂市立北浜保育園)
- 事例 2 四季を通して自然とかかわろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 53
(加東市立三草保育園)
- 事例 3 一年を通じた環境教育～身近な自然からはぐくむ小さなころ～・・ 57
(YMCA 松尾台幼稚園)
- 事例 4 地域の自然から学んだこと～自然体験活動を通して～・・・・・・・・・・ 61
(三田市立藍幼稚園)

ひょうごっこグリーンガーデン事例集

(兵庫県健康生活部環境政策局環境学習課 平成 19 年 6 月発行) に掲載した実践事例

(抜粋)

- 事例 5 地域をテーマにした環境学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 65
(宝塚市立宝塚幼稚園)
- 事例 6 近隣の公園を活用した環境学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 69
(神戸市立西野幼稚園)
- 事例 7 栽培活動を通じた環境学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
(明石市立二見幼稚園)
- 事例 8 一日を通じた環境学習・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 77
(神戸市立あづま幼稚園)

事例 1

自然を通して、生命の不思議さを感じる

高砂市立北浜保育園



1 園の現況

本園は、高砂市の北西に位置する。

近年、宅地や高齢者施設等の開発が進み、近隣の山々の景観も変わってきているが、園の周辺は緑豊かで、園内の畑や近隣の田畑、公園等、地域の中で自然体験をすることができる。

地域には、数々の史跡が残り、子どもたちが気軽に見に行くことができる。町全体でその史跡や郷土の祭りを守り、保存しようとする郷土愛が感じられる。

園児は核家族化が進む中で、祖父母との同居も多く、保護者に代わって祖父母が送迎する姿もよく見られる。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

自然を通して、生命の不思議さを感じる

(2) ねらい

- ・収穫の喜びを体験し、自然に対する興味や関心を深める。
- ・地域への散策を通して、自分たちが住んでいる地域の素晴らしさを感じ、人とかかわりを広げる。

(3) テーマ設定理由

恵まれた地域環境を生かし、園外に出掛ける機会を多くつくり、地域の自然の中でのびのびと過ごす中で、生命の大切さや不思議さに気付かせていきたい。

また、保育園で長時間生活する子どもたちに、いろいろな人とかかわる機会をつくり、その交流活動を通して思いやりやさしさを感じる心

豊かな子どもにはぐくんでいきたい。

(4) 経緯と展開

年度当初、自然に触れ、農作物の成長などから「食育」を促していくよう計画を立てたが、環境学習リーダー研修を受けたことで、「自然の生態系が激変していること」「地球が危機にさらされていること」などを学び、この実態を子どもたちにも知らせる必要があると感じた。未来を担う子どもたちが、幼い頃から「環境」について関心をもつことの大切さを感じた。保育士自身が「環境」に対する知識不足もあり、子どもたちと共に調べたり考えたりしながら取り組んだ。子どもたちは幼いから理解できないのではなく、子どもたちに分かるように、保育の場で「しかけ（出会わせ方）」を工夫することが大切であることに気付いた。その“しかけ”を工夫することによって子どもたちの「環境」に関する関心が高まり、「気付く」から「関心をもつ」姿へと変わってきている。

3 実践による成果と課題

これまでも、地域散策や地域の人とかかわる保育を展開してきた。しかし、もう一步踏み込み、保育士自身が幅広い視野をもち、地域を知り、地域の人々の生の声に耳を傾け、より深く状況を把握することで、子どもたちに出会わせる状況づくりを工夫することができた。

“大人が変われば子どもも変わる” 今後は、保護者にも園の取組を発信し、保護者と共に、地域の人たちとかかわりをさらに広げ、環境やその変化に興味や関心をもてる子どもの育成に取り組んでいきたい。

地域を探索しよう：パート1

－「水」って大事なんだね－

【ねらい】

- ・自分たちの住んでいる地域の史跡や民話に触れ、地域の素晴らしさに気付く。
- ・毎日使っている水の大切さに気付く。

指導のポイント

*園周辺マップを作る。

北浜の地域には史跡や神社仏閣がたくさんあり、自然も豊富である。民話や史跡の由来等を調べ、手作りマップを作成する。子どもたちが興味をもって、地域散策ができるようにこの地図を持って散策に出掛ける。

- ・地域の史跡を知る

雨乞い行列

北脇山の麓から一本松の頂上まで、雨乞い行列をして登り、頂上で農作物が実るよう「雨乞いの儀式」を行った。

- ・水に関する民話(西浜の地)

藤の井

昔、村の人々は塩気を含んだ水を飲んでいて、ある日、八幡様が西浜に立ち寄り、井戸を掘るように言われた。そこを掘ったところ、真水が湧き出てきて、それから人々は飲み水や田畑の水に困らなくなり、暮らしが良くなった。

【実践事例】

＜事例1＞ 水を大切にしよう

(時期) 8月上旬 (対象) 3・4・5歳児

今年(平成19年)の夏は例年になく暑い日が続いた。子どもたちは、毎日、たくさんの水を使って遊んでいる。水の大切さに気付いてほしいと思い、環境学習リーダー研修で聞いた「温暖化」について図鑑や写真を使って子どもたちに話をした。テレビや家の人の話から興味をもっている5歳児が、「北極の氷が解けて、シロクマが住めなくなっている」「水が飲めないところがあるよ」「反

対に台風で洪水になって、家がなくなっている人もいるんだよ」と自分の知っていることを話している。

＜事例2＞ 史跡めぐりをしよう

(時期) 8月中旬～10月中旬 (対象) 3・4・5歳児

当地域には昔から伝わる「雨乞いの儀式」がある。北脇山から一本松の頂上まで「雨乞い行列」が行われていたというコースを、子どもたちと歩いてみる。子どもたちは、山道を歩きながら「『雨乞い行列』ってどないしてするんやろ?」「太鼓をたたいたり、鐘を鳴らしたりするのかな」と言いながらその場で踊り出している。

また、「藤の井」の民話を聞き、今では蛇口をひねればいつでも出てくる水も、昔は塩辛かったり、井戸から汲んだりして大変だったことを知り驚く。

ここ北浜は、祭りが盛んで伝統を大事に守っている地域でもある。雨乞いの儀式・藤の井・祭りとどれもつながっているものであり、水の恵みを受け、田畑の農作物を実らせ、五穀豊穡を祝う大祭を、毎年盛大に行っている。このことは、子どもたちが受け継ぎ、伝えていかなければならないことだと考え、「北浜のいまむかし」として子どもたちと話をつくり、運動会で保護者や祖父母、地域の人々に見てもらおう。その後、高齢者施設や地域の人たちにも見てもらおう機会をつくる。

【成果と課題】

保育士自身が地域のことをよく知り地域散策を通して、子どもたちに何を学ばせるのかという目的を明確にすることの大切さを感じる。子どもたちに分かるように“しかける”ことで、子どもたちは豊かにイメージを広げ、自分の生活に結びつけて考えていくことができる。また、子どもたちの気付きが、地域の人々にもこの地域に伝わる民話等を知らせるきっかけにもなったことは大きな成果であり、このような取組を今後も続けていきたい。

地域を探索しよう：パート2

—私たちの町って素敵だね—

【ねらい】

- ・自分たちの住んでいる地域の素晴らしさに気づき、いろいろな人とのかかわりを広げる。

指導のポイント

- * 「妖精」の仕掛けを作り、園内やのじぎく群生地に置く。

「水を出したら蛇口を閉めようね」「お花に水をあげてね」「お花を踏まないでね」など、子どもたちに気付いてほしいメッセージを「妖精」に託して園内に仕掛ける。声を出してしまうと「妖精」は消えてしまうという約束をし、見付けたときはジェスチャーで教え合う。地域の人々の協力を得て、のじぎく群生地にも「妖精」の仕掛けを置く。

- * のじぎく群生地の世話をしてくれている地域の人と連絡を取り合い、群生地の花の状況を把握する。

のじぎく群生地：北浜・牛谷～日笠山・馬坂峠に自然に生えたのじぎく群生地がある。蕾の頃、満開の頃等、何度も訪れる。保存会の人々が世話をしている。その中に、園児の祖父もいる。

【実践事例】

＜事例3＞ のじぎくハイキングに行こう
(時期) 11月6日 (対象) 2・3・4・5歳児

のじぎくの開花時期になり、のじぎくの世話をしている園児の祖父から、「案内役をしてあげよう」という知らせが届く。園児の祖父の案内で、今年初めてののじぎくハイキングに出掛ける。

山道を散策しながら、野草や野鳥などの名前を覚えてもらったり、昔の様子を聞いたりしながら歩く。のじぎく群生地は、自然に自生している花ではあるが、保存会の人々のおかげで手入れが行き届き、美しい花を咲かせている。

のじぎく群生地は高台にあり、周囲が見渡せる。北側に見える町並みや道路、走り去る新幹線を見て歓声をあげ、「あれは石の山(石の宝殿)やで」「石がとれるんやって」と、5歳児が傍らにいた3歳児に、自分の知っていることを教えている。

南側には瀬戸内海や賢島、うっすらと見える淡路島を眺めているうちに、いろいろな思いが巡ってきたのだろう。「あれは無人島やで、おじいちゃんが若い時、船で行ったことあるって言った」と話し、周りの子どもたちも真剣に耳を傾けている。

＜事例4＞ のじぎくハイキングに行こう
(時期) 11月21日 (対象) 4・5歳児

2回目の訪問は、ひょうごグリーンサポーターの人を案内しようと4・5歳児の子どもたちが案内役になり出掛ける。自然ともっと遊べるように“妖精”を事前のじぎく群生地に仕掛けておく。子どもたちは、知っていることを教えてあげようと張り切っている。ちょうど満開の時期で、数十種類の花が咲いている。子どもたちは花びらの形や色の違いなどを得意げで話している。

花の間に仕掛けておいた“妖精”に気付いた4歳児が「妖精が来ている」と他の子どもたちに知らせている。サポーターの人にも知らせ、「大きな声を出すと(妖精が)消えてしまうからね。お花きれいでしょう」と言いながらかかわりを楽しんでいる。

【成果と課題】

豊かな自然を目の前にすると、大人も子どもも心が豊かになってくる。しかし、その自然もいろいろな人の手で守られていること、一人一人の「大切にしよう」という気持ちが大事であることなど、子どもたちに分かるように伝えていく必要がある。

自分が知っていることを「人に教える」という体験を通して、「大事に育てていくことが大切」ということに子どもたちが気付いていった。

おさんぽマップ

北浜保育園

おさんぽマップ
きたはま

楽しいなあー



散歩



藤の井



わあー海が見えるよー

淡路島が見えるよ



山道



昔は、遠くまで
続けていたん
やっ



年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	・年間計画検討 (食育・地域との触れ合いについて)	春を感じよう			田畑の野菜を見に行こう	
		タマネギ・ジャガイモ・イチゴを収穫しよう				
夏	・年間計画の見直し (環境に焦点をあてて)	サツマイモ苗・イネを植えよう			水を大切にしよう<事例1>	
		ツバメの巣を見つけよう・親子ツバメの様子を継続して見よう				
秋	・体験活動のふりかえり	ジャガイモを植えよう			史跡めぐりをしよう<事例2>	
		ドングリを探しに行こう			秋祭りを楽しもう<事例2>	
冬	・取組の反省および課題検討	サツマイモ・ジャガイモを収穫しよう			のじくハイキングに行こう<事例3・4>	
		タマネギの苗を植えよう			初詣(大塩天満宮)に出かけよう	

人と人とのつながり

事例 2

四季を通して自然とかかわろう

加東市立三草保育園



1 園の現況

本園は、加東市の北部に位置し、周辺は田畑に囲まれ、遠くの山並みや空を見渡すことのできる環境にある。近隣には、小学校や図書館、神社、牧場などがある。地域の方の保育への関心も高く、地域に密着した園である。昔からの地域行事が多く残っており、子どもたちにとって、世代間交流する場となっている。

園児は、平日、起きている時間の多くを保育園で過ごす。そのため、戸外での活動や子ども同士のかかわりの場として、重要な役割を担っている。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

四季を通して自然とかかわろう

(2) ねらい

- ・四季を通して同じ場所を訪れ、自然の移り変わりや美しさ、不思議さを感じ、興味や関心を深める。
- ・保育者や友達と協力して野菜を栽培し、五感で感じる体験をする。
- ・栽培活動を通して地域の人と交流をもつ。
- ・自然とかかわり、感じたことや気付いたことを、友達と言葉で伝え合う。

(3) テーマ設定理由

- ・年間を通して、園周辺の自然に触れ、遊ぶ機会をもっている。また、4・5歳児は、春と秋に同じ森に出掛けている。
- ・平成18年度より食育活動に取り組み、その中で、休耕田を借り、自分たちで野菜を栽培、収穫し味わう体験をしている。

- ・栽培活動、茶摘み体験を通して、地域の人や小学生との交流をもつ。

これらの取組を環境学習の視点から深め、継続的に取り入れていきたいと考える。

(4) 経緯と展開

前年度の保育をふりかえり、まず、4月当初に職員間（保育士・調理師）で話し合う時間を持ち、園の年間計画を立てた。同時に、各年齢のねらいも共通理解し、自然体験を通して、異年齢児とのかかわりが十分もてるよう話し合った。また、園での取組を、便り等で保護者や地域の人に知らせ、活動への理解が深まるようにし、時には、参加・協力も依頼していった。

環境学習リーダー研修の受講、報告により、保育者が『感じること』の素晴らしさを実感することができた。同時に子どもたちにも、自然とのかかわりの中で、『生命の大切さ』を伝えることはできないかと、職員間で保育を見つめ直した。

3 実践による成果と課題

環境学習の視点を明確にすることで、年間を通して、田畑や森などで自然とかかわり、実際に触れないと『感じること』のできない貴重な体験をすることができた。そういった園の取組が地域の人々の心を動かし、協力者が現れた。その協力者の姿に、今度は子どもたちの心が動かされ、感謝の気持ちが芽生えてきた。自然体験の積み重ねが、みんなの気持ちを揺さぶり、自然と人のかかわりを深めていった。異年齢児が一緒に取り組むことで、次年度へもつながっていく。地域と連携し、継続的に取り組むことが今後の課題である。

森へ出掛けよう

～四季を通して～

【ねらい】

- ・四季を通して、森に出掛けることにより、自然の移り変わりや美しさを感じる。
- ・森や水辺の動植物とのかかわりを楽しむ。
- ・自然とかかわり、感じたことや発見したことを保育者や友達と伝え合う。

指導のポイント

- * 事前に森の下見をし、森の道を把握しておく。
また、それぞれの場所で、どのような木や草花に触れることができるか知っておく。保育者自身が感じたことを、記録しておく。
- * 季節の移り変わりが感じられるよう、同じ場所に繰り返し行く計画を立てる。
- * 子どもの興味や関心、気付きや発見に寄り添い、かかわりがもてるよう、ゆとりをもった時間配分にする。
- * よほどの悪天候でない限り、工夫をし、計画を実践する。(＜事例4＞の実践は、管理事務所の方にルートを知らせ、安全面の確認をして行っている。また、荷物の管理や休憩の場所等の協力も得る。)

【実践事例】

＜事例1＞ 春の森を探検しよう

(場所) ひびきの森 (加東市上鴨川)

(対象) 4・5歳児

(日時) 4月20日(晴)9:30～13:30

ひびきの森は、本園から、車で10分程のところにある『鴨川の郷』にある。片道30分程で標高350mの展望台まで行ける。

例年、4・5歳児は春と秋にこの森に出掛けている。5歳児は、昨年も来ているので、森の様子はある程度分かっている。「川にサワガニおるか

な」「上まで行ったら、バスがミニカーに見えるで！ほんまは、ぼくらより大きいけどな」と歩きながら友達と会話を弾ませ、足早になる。4歳児は、初めてで森の様子が分からない。ワクワクしながら5歳児の後をついていく子もいれば、少し歩いて疲れをみせる子もいる。

5歳児が後方を歩く4歳児に、「おーい！！」と声を掛ける。「おーい！！」と元気な返事が返ってくる。ちょっとしたことだが、このやりとりが森の中では楽しい。

20分程歩くと、汗がにじみ出てくる。「風吹かへんかな～」時折立ち止まり、子どもたちと風の心地よさを感じる。

展望台まで行くと、達成感を感じる。ここでは、十分に時間をもつようにした。子どもたちの目は、ミニチュアのように見える建物や車に向いていた。保育者の山並みや空に目を向けた言葉に、子どもたちは遠くの景色にも目をやる。



下り道、森の中に差し込む木漏れ日が美しい。「きらきらしてきれい」、「鳥の音が聞こえる」そんな子どものつぶやきに足を止め、共に感じる時をもつ。

＜事例2＞ 川遊びを楽しもう

(場所) 鴨川児童館側 (加東市平木)

(対象) 5歳児

(日時) 7月18日(晴)10:00～11:00

鴨川地区の子どもたちとの交流、自然とのかかわりを目的とした行事である。この日は、前週の雨で水かさが増し、川遊びには最高の日であった。

自己紹介をし、川遊びの約束事を聞いてから、遊び始めた。水の中に足を入れた子どもたちは、山の水の冷たさに驚いていた。水の流れに逆らい歩いてみたり、サワガニ探しをしたりした。

しかし、サワガニをなかなか見付けることができない。子どもたちは、地元の子どもたちが、石をそっと動かし捕まえていることに気づき、早速同じようにしてみる。

大きいカニや小さいカニを、石の陰から次々と見付けることができた。カニの動きに興味をもち、じっと見たり、大きさ比べをしたりする。



カニ 見つけた!

時間を忘れて遊び、11時、帰る時間になった。子どもたちが「サワガニ、持って帰りたい」と言い始めた。サワガニは逃がすというのが約束だが、子どもたちの気持ちは抑えられない。以前、園でサワガニを飼育し、数日しか生きなかった体験をしている。その時に、「きれいな川の水やないとあかん」とつぶやいていたのに。だが、保育者の「みんなが、またサワガニに会いに来よう」という一言で、急展開した。

園に帰り、この出来事を園長先生に報告し、一か月後、再び川を訪れることになった。

<事例3> 秋の森を探検しよう

(場所) ひびきの森 (加東市上鴨川)

(対象) 4・5歳児

(日時) 11月8日(晴) 9:30~14:00

繰り返し同じ森を訪れることで、子どもたちの楽しみは増しているようである。

春と違い、秋は森の道に、落ち葉の吹き溜まりがある。きれいな落ち葉や木の実を探し出し、見せ合う。「これきれい」、「ひげみみたいな葉っぱ見付

けた」とのんびりと周りのものに目を向けながら歩いた。園周辺では、見付けることのできない木々や草花もある。「この森だから咲いているのかな。摘むと枯れるかもしれないね」と保育者がつぶやいた。「とったらかわいそうや」、「また見に来たらいいやんな」と、子どもたちはつぶやく。植物への思いやりの気持ちが芽生えてきている。



今回、森で子どもたちとしたいことがあった。環境学習リーダー研修の時にした、森の中で立ち止まり、しばらく目を閉じるという体験である。展望台からの帰り道、子どもたちとしばらく目を閉じてみる。「風が気持ちいい」、「鳥の音がする」「何かいいにおいがする。目を開けている時より、よう分かる!」とつぶやく。あの時、保育者が感じたことを子どもたちも感じていた。

<事例4> 雨でも出掛けよう

(場所) ひびきの森 (加東市上鴨川)

(対象) 4・5歳児

(日時) 平成18年5月16日(雨) 10:15~14:00

計画した日は、あいにくの雨。子どもたちは、テラスから空を眺め、雨がやむのを待っている。その姿に、保育者の心は動かされた。雨の日の森に出掛けることにする。子どもたちは「ヤッター! 行ける〜!!」と大喜びである。

今日は、なだらかな別のルートをし、傘をさし、雨音を感じながら、散歩する。森の中に入ると、傘に打ちつける雨音が少なくなる。木々が大きな

傘になっているようだ。地面の落ち葉や草が水分を吸収してくれているため、ぬかるみも少ない。



この日の森の様子を子どもたちは、「恐竜探検しているみたい」とつぶやく。4歳児が滑らないように恐る恐る歩いていると、「ゆっくり歩いたら大丈夫やで」、「こっち、通り」などと、5歳児は年下の子を思いやる言葉を掛け、見守り待つという姿が見られる。

子どもの興味を引いたのは、池の水に雨粒が落ち、水面に模様を描いている様子である。水の透明度が高いこともあり、より美しく感じる。そし

て、小川の水量や水音、流れである。「すごい水や！！今日、雨が降るとるからやで」、「(水の)音が大きい！」など気付きや発見を伝え、眺めている。

11時半頃、空が明るくなった。予定通り午後も森で過ごした。

【成果と課題】

4・5歳児と2年続けて同じ森に掛けることで、四季のめぐりを感じることができる。森の中で、木々や草花に目を向けたり、しばらく目を閉じてみたりすることで、気付きや発見がある。保育者や友達と感じたことを伝え合うことで、認めてもらい喜びを感じたり、新たな発見をしたりすることができる。また、自然の中で動植物とかかわり、それらの生命を感じ、大切に思う気持ちが芽生えてくる。今後も、これらの活動を環境学習の視点でもとらえながら、継続的に進めていきたい。

年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気付く	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気付く	資源を大切にしようとする
春	<ul style="list-style-type: none"> 職員間で話し合い、環境学習の年間計画を立案 三草小学校との連携活動について伝達 	ツバメの巣を観察しよう	園周辺のサクラめぐりをしよう		窓からの景色に興味をもち、林を観察しよう	
夏	<ul style="list-style-type: none"> 環境学習リーダー研修に参加、報告 鴨川児童館との交流計画を立案 年間計画を再考 	野菜を育てよう	小学生と茶摘みをしよう			
秋	<ul style="list-style-type: none"> いずみ会に食育教室を依頼 はばタンと環境学習 畑の管理協力を依頼 	収穫した野菜を使って親子でクッキングをしよう			はばタンの環境学習に参加しよう	栽培物の皮や野草で布を染めよう
冬	<ul style="list-style-type: none"> 次年度に向け、方向性を検討 	野菜の苗を植えよう				雲から天気や季節を感じよう

人と人とのつながり

事例3

一年を通した環境教育 ～身近な自然からはぐくむ小さなころ～

Y M C A 松尾台幼稚園



1 園の現況

大阪府、京都府との府県境に位置し、辺りは、自然に囲まれている。園内においては、園庭が2か所あり、中庭は全面芝生、裏庭は自然のままを残し、タンポポやシロツメクサなどの植物をはじめ多種の木々があり、一年を通して四季を身近に感じることでできる環境にある。また、園で飼育している多くの小動物との触れ合いの中で小さな「いのち」の存在や大切さに気付くことができるように環境を整備している。

園の周囲には自然が身近にあるが、最近では保護者を含め、なかなか実際に触れる機会や体験が少なくなっている。そのため、卒園児や地域のネットワークを生かした地域活動委員のボランティアの人々と共に、子どもの感性をはぐくむために五感を十分に使えるような活動を保育に取り入れ、さらにそのことの大切さを保護者に訴えている。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

一年を通した環境教育

～身近な自然からはぐくむ小さなころ～

(2) ねらい

- ・一年を通して自然とのかかわり、感じる・遊ぶ・考えるをキーワードに豊かに親しむ。

(3) テーマ設定理由

私たちにとって何よりも一番大切な「いのち」を守ってくれている地球が危ない、ということは何とか子どもたちに伝えたい。「どうしたら、いいのかわかるのか」、「何から始めたらいいのかわかるのか」難しくてなかなか手をつけられなかった。そこ

で、「何が足りないのか」「どういう工夫がいるのか」を教職員で話し合う中で、身近にある園内や園周辺の自然を見つめ直すこと、子どもと一緒にできることから取り組んでいこうということになった。日常の中で何気なく感じたり、触れたりしていた「自然」や体験することで満足してしまっていた「自然体験」を見直し、「環境学習・教育」の視点を意識した取組を進めていこうと考えた。

(4) 経緯と展開

日々の保育の活動の中の“ちょっとしたこと”から行動をしようとした。子どもたちが新たな気付きや感じる力を身に付けてくれることを願い、教職員一人一人が少しの工夫と意識の持ち方を変えて取り組んでいくように心掛けた。また、地域の人々に協力してもらいながら、子どもたちと共に考えながらできること、楽しく取り組むことで豊かな環境教育への感性をはぐくまれることを目指した。

3 実践による成果と課題

一年を通して身近な自然を見つめ直すことで、改めて「いのち」の大切さを日々の保育の中で感じることができた。今回は、花とのかかわりを通して、教師や周囲の人々が細やかにかかわることによって、小さな花にも「いのち」があることに気付き、大切にしようとする気持ちが芽生えるなど子どもたちの成長を見ることができた。今後も、子どもたちの豊かな感性をはぐくんでいくためにも、教師自身が自然に対する感性を磨き、環境学習・教育の視点をもつ姿勢を大切にしていきたい。

お世話になっている人にお花を届けよう — 「花の日」に思いを込めて—

【ねらい】

- ・家の庭に咲いている花や道端に咲いている花などを全園児が少しずつ幼稚園に持ち寄り、「花の日」を知り喜ぶ。
- ・それぞれの花の美しさに気付き、花にも「いのち」があることを知る。
- ・自分たちも花と同じようにたくさんの人から見守られ愛されていることを知り、感謝の気持ちをもつ。
- ・花束を作り、地域で日頃お世話になっている人々に感謝の気持ちを込めて届け、喜びを感じる。

指導のポイント

- * 花や植物を栽培し触れることで自然の恵みや生命を身近に感じるだけでなく、地域や生活へどうというふうに結び付いていくかを考えて取り組む。
- * 花を通して普段自分たちの周りには、知らないところでいろいろな形でたくさんの人に見守られているということに気付くことができる機会とする。
- * 保育者自身も子どもと共に、自然の恵みを受けながら生きていることを感じられるようにしていく。
- * 「花の日」の趣旨を保護者に連絡し、協力を依頼する。
- * 近隣施設（郵便局・派出所・消防署・動物病院など）との連携を図る。

【実践事例】

花の日

（時期）6月初旬 10時～12時

（対象）全園児（3～5歳児）

本園では、6月に花の日という日を設けている。どんなに小さな花にも「いのち」があること、また、人もその「いのち」をいろいろな人に守られていることを知り感謝する機会としている。普段何気なく見過ごしていた花を見ながら、改めて日々の生活の中で感謝する気持ちを感じることができるよう願って行っている。



花の持参については、前もって各家庭に花の日の案内を配布し、この趣旨を伝え、花を持参することを依頼している。

当日子どもたちは、少し照れくさそうな、また、とても素敵な笑顔で花束を握り締めて登園してくる。大きな花束にラッピングされたものや一輪の可憐な花、「このお花、おじいちゃんの家で咲いていたの！」「お花屋さんで選んできたよ！」とロ々に言いながら、みんなとてもうれしそうに差し出す。教師が「ありがとう！」「きれいなお花だね！」と答えるにつこりとほほえむ。いろいろな花が集まり、その種類の多さや同じように見えても形がどれも違うこと、また、良い香りがしていることを感じる。

集められた花は、いろいろな種類を取り混ぜて花瓶や花束にしてホールに飾る。ホールでは、花の香りを感じながら、「たとえ、小さな花でも大切な『いのち』があること」「同じ花でも、みんな形や色が少しずつ違うこと」などの話を聞き、大切な「いのち」について考える時間をもつ。



その後、各クラスで日頃お世話になっている人々に花束を届ける。行き先は、年齢によって距離などを考慮し決める。

3歳児は、園バスの運転をしてくれている人や毎日、幼稚園をきれいに掃除してくれている人、いつも世話になっている事務の人々に届ける。自分たちが持ってきた花を花束にし、身近な人に渡せたことで「ありがとう」の気持ちが自然と高まったようで、とてもうれしそうな表情が見られる。

4歳児は、派出所と郵便局の人々に、5歳児は、動物病院と消防署の人々に感謝の気持ちを込めた手紙を事前に用意し、歌と共に花束に添える。

どの人からも心からの「ありがとう」という言葉を聞き、子どもたちの心も穏やかで大喜びの一日になる。

【成果と課題】

花に囲まれた子どもたちは、自然とやわらかい表情になり、幼稚園全体がやさしい雰囲気にも包まれたように感じられた。花の持つ力の大きさ、不思議さを教職員も改めて気付かされた一日となった。これからも幼稚園、家庭、地域とが、子どもたちの思いを受け止めて、共に豊かなところをはぐんでいくことができるようにしていきたい。

身近な自然とじっくりかかわることによって小さな「いのち」を大切にすることをはぐくみ、

自然を愛せる人になってくれることを願って、工夫しながら継続していかなければならない。

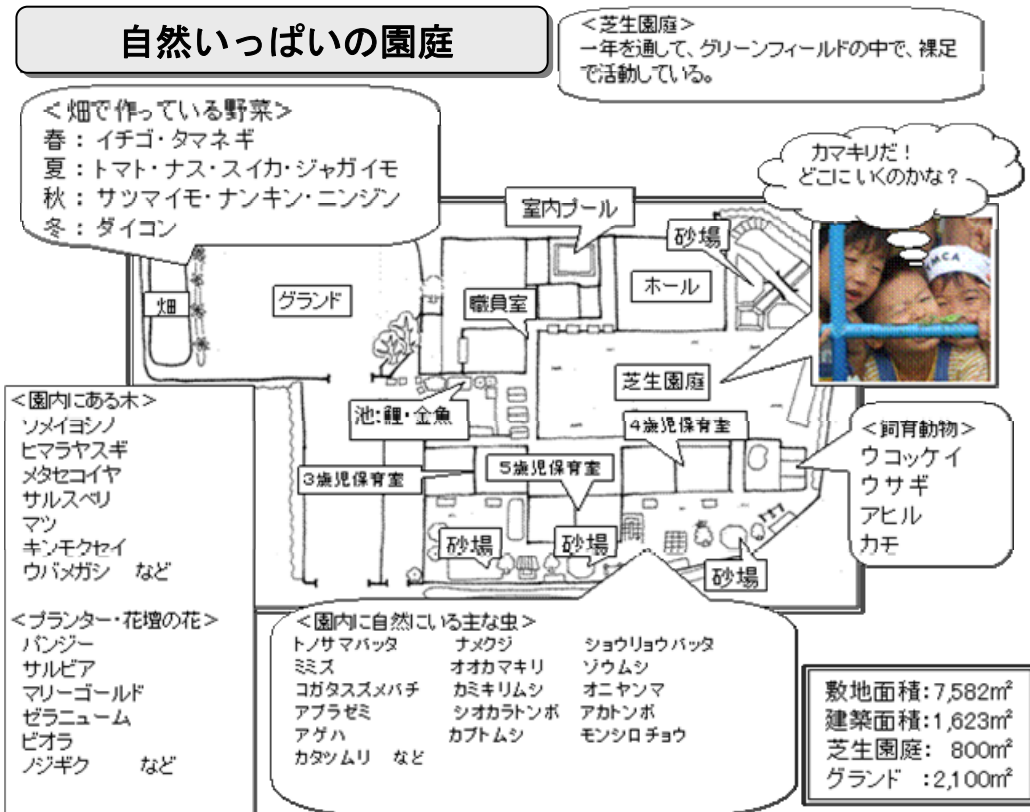
しかし、何よりもまずは、もっと自分の周りの環境から見直し、園内、地域社会から地球環境へと広がる学習へと結び付けてくよう大きな心でとらえていきたい。そのためにも「身近な環境」を子どもたちともっと愛し、守り育てていく必要がある。

春の散歩では、花を好きなだけ摘んでいる姿や捕った昆虫を家に持って帰る子どもが多く見られた。一年を通して「花」などの身近な自然に触れる中で”ちょっとしたこと“から気付く感性をはぐくむことに取り組んだ。はじめは、子どもたちに気付いてほしいということを重点に考えていたが、実際は保育者自身の気付きや視点を工夫することが日々問われていることが分かった。そして、いろいろなことを経験し、感じ、気付く中で「この花、きれいやなあ。〇〇ちゃんにも見せてあげよう!」、「この虫おもしろいなあ。でも捕ったらあかんよ!(虫さん)お友達の家遊びに行く途中かも!」など、知らず知らずのうちに大切なことを学んでいる姿が見られるようになってきている。

こうした子どもたちの有り様を意識して、これからは環境学習・教育と結ぶためには「日常性」と「継続性」が大切である。そして、子どもの安定した自然観を形成していく基盤としていきたい。



自然いっぱいの園庭



年間計画

内容 時期	園における取組	自然体験			生活体験	
		生命の大切さ・ 不思議さに気付く	自然の大きさ・美しさ・ 不思議さに気付く	地域の中の自然やそれに かかわる人々に親しむ	生活の中で環境や その変化に気付く	資源を大切に しようとする
春	・畑のイチゴ、タマネギを収穫するに当たり、地域の人に協力を依頼 ・地域の関係施設に協力を依頼	近くの原っぱや公園に出掛けよう			ファミリーで自然の中に出掛けよう	
夏	・トマトなど野菜の栽培をするに当たり、地域の人に協力を依頼 ・職員が環境学習リーダー研修に参加	お花を届けよう (実践事例)			テントに泊まって 非日常的な生活を体験しよう	
秋	・地域から依頼があり、里山の手入れに協力 ・地域と話し合い	夏の自然を体験しよう (キャンプ)			地域の畑や山の手入れをお手伝いしよう	
冬	・畑に野菜の苗を植えるに当たり、地域の人に協力を依頼	冬の自然を体験しよう (キャンプ)			ほんの少し自分たちにもできることを 考えよう (エコプログラム)	
人と人とのつながり						

事例 4 地域の自然から学んだこと ～自然体験活動を通して～

三田市立藍幼稚園



1 園の現況

三田市の西北部に位置し、周囲を山や川、田畑に囲まれた自然豊かなところにあり、四季の移り変わりを肌で感じることができる。農村地域に位置するが、住宅地域から通園している子どもが半数以上いる。家庭で自然に触れる活動を経験している子どもはとても少ない。

2 環境学習・教育の実践概要

(1) テーマ

地域の自然から学んだこと
～自然体験活動を通して～

(2) ねらい

- ・自然体験活動を通して、地域の人々とかかわり、その楽しさを知る。
- ・地域の自然に親しみ、素晴らしさを感じる。

(3) テーマ設定理由

家庭では核家族化が進み、子どもたちが自ら周りの環境にかかわって体験を積み重ねる機会が少なくなっている。また、子どもたちは生活の中で友達や周囲の大人たちとさまざまな経験を共有したり、共に感動したりする機会が少ないように感じる。恵まれた自然の中で過ごしていても、意識して見たり、触れたりしたことのない子どもたちがほとんどである。

教師自身が自然の中で遊びながら、動物や植物などと触れ合い、その素晴らしさや不思議さに気づき、「どうして?」「なぜ?」と感じる体験をすることで、子どもたちの学びも豊かになっていくと思い、自然体験活動を計画した。恵まれた自然との触れ合いを通じた遊びの中か

ら自然の多様性や循環性に気づき、生命の大切さを実感し、美しいものに心を動かされ、友達とその感情を共有することで人間性や社会性など豊かな心が養われていくと考え、自然体験活動を進めていった。

(4) 経緯と展開

身近な人（小・中学生、地域ボランティアなど）との交流の機会を多く持つような自然体験活動を計画し、地域のいろいろな人に支えられているという安心感を持ち、生まれ育った地域を愛する心情を育てようと考えた。

同じ場所で継続的な体験活動を積み重ねることで、人と自然と生活がつながった自然観がはぐくまれるのではないかと考え、実践を進めた。

3 実践による成果と課題

地域ボランティアの人々の協力を得ながら、自然体験活動を実施することができた。保育の中で教師は、環境教育への視点を明確にし、体験活動を実施したことで、子どもたちは、自然の営みや恵み、素晴らしさに気付くことができ始めた。また、その経験をふりかえることで子どもたちは、環境学習につながる力を持ち始めたと感じる。体験活動のふりかえりを積み重ねることにより、発見や疑問、さらには学びが明らかになっていった。また、友達と考えを折り合わせていく中で、協同的な学びになり、幼児の自然観が培われていくと感じた。

教師が保育を見直し、身近な自然や身の回りのことに気を配り、環境を大切にすることで、その時にしかできない出会いや経験ができた。そのような教師や大人の姿勢が大切だと感じた。

サンキュウ牧場での体験から

【ねらい】

- ・動物との触れ合いを楽しみながら、命の大切さに気付く。
- ・山や川での遊びから、楽しさや自然の素晴らしさや不思議さに気付く。

指導のポイント

- * 牧場の下見をし、牧場主から動物との触れ合い方や餌の話聞き、教師が動物や里山の自然について予備知識をもっておく。
- * 子どもたちが動物との触れ合いを楽しめるよう、保護者に餌の協力を求める。
- * 子どもたちが十分に楽しめるように時間に余裕をもった計画を立てる。
- * 継続して同じ場所で体験活動を行い、四季の変化を肌で感じる。

【実践事例】

(場所) サンキュウ牧場 (三田市藍本)
(対象) 4・5歳児
(日時) 5月23日(晴)9:30~14:00<事例1・2>
9月5日(晴)9:30~14:00<事例3>
12月12日(曇)9:30~12:00<事例4・5>

体験活動の中で、牧場主のお話は、子どもたちにも教師にも心に響くものがあった。

<事例1> サンキュウの意味

…牧場主の話

ここにいる動物たちは、捨てられたり、助けてもらったりした動物がいるんだよ。みんなにも命があるでしょう？動物たちにもあるんだよ。そのままにしておくと死んでしまうから、おじちゃんが引き取って飼っているんだよ。命をありがたうの、サンキュウという名前を牧場につけたんだよ。

牧場主の命を守ろうとする気持ちや自然を愛し

守ろうとする姿、そして、その素晴らしさを私たちに伝えようとする姿に感動し、本物に触れる経験を子どもたちにさせたい気持ちを強く持った。

<事例2> ウマ(ハヤテ)にあいさつ

牧場のお約束です。ウマがこの牧場のリーダーです。先生みたいかな。ハヤテにこれから牧場に入りますよってあいさつをしなければいけません。あいさつをするとハヤテはみんなのことを一人ずつ覚えていきます。あいさつの仕方は、一人ずつ手をパーにして、ハヤテに餌をあげてください。そうすればハヤテは、匂いで覚えてくれるんだよ。やってごらん。

子どもたちは真剣な表情で手を差し出してハヤテに餌をあげていた。ハヤテが餌を食べるとその表情は和らぎ、牧場の中へと入って行った。しかし、動物が怖い子には大きな関門だった。見たことも触れたこともないウマやヒツジに近付き触り、その感触を味わっていた。

動物には、動物たちのルールがあること、その中に入るときにはそのルールを守ることを学んだ。自然の中では、人間は共存者であることを実感した。

<事例3> サンキュウの川遊び(キャッチ&リリース)

捕まえたものを見てみようかな。これは、シマエビ。きれいな水の中にしか住まないんだよ。

子どもたちの疑問にすぐに答え、一つ一つの生き物の生態を分かりやすく話してもらったことで、「あそこに行けば、いるんだ」と一層興味を持っていた。よく知ると、子どもたちは、自分の見つけた生き物を「幼稚園や家に持って帰りたい」という気持ちが強くなった。環境学習の観点からは、元の場所に返すほうがよい。子どもたちにとっては、理由が分からないだけに、「嫌だなあ」と納得できないようだった。

捕まえて、よく見た後は、元いたところへ返してあげようね。そうしてあげないと、そこで卵を産めなかったり、そこに住めなくなったりするので、いなくなってしまうんだよ。

水の種類(淡水・海水)によって魚たちは、すむところを分けているんだよ。この少し下の堰には、清流にすむ魚が40種類も住んでいるんだ

今いるものを大切にするということを教えてもらった。「たくさんいるから」などと、安易に小動物などを幼稚園に持ち込んでしまっていたことを反省する。自然との向き合い方を改めたい。この経験が将来子どもたちの心に、「ここに素晴らしい自然がある」と残っていることを期待する。

<事例4> 命はひとつ

幼稚園に地域の人を招待した時に、牧場主から、ウマ(ハヤテ)の死を聞いた。このことをどう受け止めるか、職員で協議した。子どもたちには事実を伝え、命について考え合う機会とした。牧場に出掛け、ハヤテが生きていた場所で子どもたちと一緒に命について考え合うことにした。

みんな、来てくれてありがとう。きっと、ハヤテもみんなのこと、忘れへんよ。おじちゃん、嬉しいわ。・・・ウマやヒツジいろいろな動物や人間もそうやな、いつかは死んでいなくなってしまうんだよ。これが命なんやで。・・・ありがとう。

涙ぐみながら話される牧場主を見た子どもたちは、おじさんの悲しい気持ちを受け止めているように感じた。ハヤテと遊んだ経験、ハヤテが死んでしまった悲しみは、子どもたちの心の中にしっかりと残り、これからの人生の中でいつか、思い出されることと思う。

<事例5> リクガメは風邪をひくんだよ

カメさんはね、今は寒いから、暖かいお部屋の中にいるんだよ。このカメは、本当は暖かい国

に住んでいるから、寒いところに出ると風邪をひくんだよ。カメさんが風邪をひいたらどう思う?温かいお風呂にいられて、風邪を治すんだよ。そうしたら、風邪が治るんだ。このカメさんが入るお風呂は、皆が遊ぶプールみたいなものを使うんだよ。

リクガメの背中に乗ることができなかったことで子どもたちは、自分たちの暮らしと比較し、同じようにカメも暮らしていることに気付いた。

山の中も冬を迎え、以前来たときと違っていた。木の葉の見分け方やその名前、遊び方、木の実(ケンポウナシ)の試食などをし、自然の楽しさや不思議さを体感することができた。

【成果と課題】

子どもたちの体験の前に、教師が身近な自然に興味や関心を寄せ、自然観や環境観をもつことが大切だと感じた。環境学習の視点からねらいを明確にしたことで、体験活動を通して、たくさん学び(季節・触れ合う楽しさ・不思議さ・命等)を得ることができつつある。また、牧場主の子どもの視線に立って疑問に答えてくれる姿に学び、教師も環境観に関する知識や見方を子どもたちと共に、さらに高めていかなければならない。

自然は、偶発的に様々なことが起こり、そのことへの興味関心が、感動体験につながる。そこで、一人一人の幼児が何を感じどのような体験をしているのかを捕らえ、教師もそれに共感していくことにより、より深い感動を味わえることができると思う。教師は今まで保育に都合がよいように自然とかかわってきたのではないだろうか。環境学習を学んでいくと反省点がたくさんあることに気付いた。今までの自然観を見直し、今後、自然の見方や付き合い方、知識等を専門家と交流しながら磨いていき、「当たり前」と感じていたことが「不思議」につながる自然体験活動を進めていきたい。

事例5

地域をテーマにした環境学習

宝塚市立宝塚幼稚園



<園の状況>

- 園児数は、4歳児3学級、5歳児3学級 計6学級
- 6学区の広範囲から通園をしており、近所に同年齢の遊び友だちが少ない。園児は、家庭で大切にゆったりと育てられているためか、人懐っこく素直で明るい幼児が多い。
- 園の所在は、宝塚市の北の玄関口であるJR宝塚・阪急宝塚駅と阪急清荒神駅の間地点に位置している。震災後の開発に伴い、高層マンションや住宅が増加し、乳幼児をもつ家庭が増えている。
- 本園の発足は、大正13年に地域の婦人会によって開園された歴史と伝統のある幼稚園である。熱い思いと願いがこもった、地域の幼稚園という基盤があり、地域から大切にされ、見守られている。
- 園の周りは、どんどんと住宅開発が進み自然環境は減少しているが、園地内は、四季を感じる木々が豊富にあり、桜の名所として地域から重宝されている。
- 保護者は教育熱心で、園の教育に対して、理解があり、協力的である。行事やサークル・保育ボランティアにも積極的に参加したり、おやじの会も活動的に幼児と触れ合ったりと意欲的である。

<テーマの要旨>

- 園舎隣接地は、地域の方の広大な畑があり、季節の野菜栽培を観察できたり、ご厚意で畑を借りて園児と共に、タマネギやサツマイモの栽培交流を継続的に行ったりしている。
また、園内には四季を感じる木々がたくさんあり、見たり触れたり遊びに取り入れれたりできる、恵まれた環境である。
- 園の近くには、小・中学校、保育所、児童館等があり、異年齢との交流や、老人会や青年団、コミュニティ、おやじの会等々、いろいろな人とかがわれる機会に人材に恵まれた環境である。
また、商店街・宝塚歌劇場、手塚治虫記念館や清荒神、鉄斎美術館、図書館などの文化施設があり、人の往来も多く地域との交流が図りやすく、地域探検心をそそる環境にある。
- 地域環境は環境学習の宝庫であり、幼児の自然体験や生活体験が豊かにできる学びの場や機会となっている。そこで、年間を通して、地域に出かけ、自分たちが住んでいる地域の素晴らしさやよさを感じたり、人間関係を広げたりする経験や体験を意図的、計画的に行いたいと考え、地域探検をテーマに設定し取り組んでいる。
- このような環境学習を通して、幼児が地域を愛し、地域を大切にしたい気持ちを持ち、地域の方と連携していける人に育ててほしいと願っている。

テーマ「地域探検をしよう」

内容 時期	自然体験		地域の中 の自然やそ れにかかわ る人々に親 しむ	生活体験	
	生命の大切 さ不思議さ に気づく	自然の大き さ・美しさ ・不思議さ に気づく		生活の中 で環境やそ の変化に気 づく	資源を大 切にしよ うとする
春	<p>春を感じよう (事例 1-1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然の身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ 	<p>タマネギを収穫しよう</p> <p>季節により自然や人間の生活に変化があることに気づく。</p>	<p>畑の野菜を見に行こう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・季節により自然や人間の生活に変化があることに気づく。 	<p>クリーン作戦に出かけよう (事例 1-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な物を大切にしよう。 	
夏	<p>ツバメの巣を見つけよう・親子ツバメの様子を継続して見よう (事例 1-3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な動物に親しみをもって接し、命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。 ・自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。 		<p>中学校へ虫捕りに行こう (事例 1-4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ 	<p>クリーン作戦に出かけよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な物を大切にす。 ・日常の中で簡単な文字などに関心をもち。 	
秋	<p>ドングリを探しに行こう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ 	<p>サツマイモを収穫しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ 	<p>清荒神の秋を楽しもう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもち。 	<p>神社の秋を見つけよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ 	<p>秋祭りのだんじり曳に参加しよう (事例 1-5)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもち。
冬	<p>タマネギの苗を育てよう (事例 1-6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な動物に親しみをもって接し、命の尊さに気づき、いたわったり、大切にしたりする。 		<p>清荒神で出かけよう (事例 1-7)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもち。 	<p>クリーン作戦に出かけよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な物を大切にす。 ・日常の中で簡単な文字などに関心をもち。 	

人と人とのつながり

事例 1-2 テーマ「地域探検」

活動名	クリーン作戦に出かけよう		
ねらい	○清掃をしながら、自分たちの幼稚園のある地域を大切にしようとする。 ○公共の場を大切に使う心をもつ。		
場 所	幼稚園周辺	対 象	5歳児
時期・時間	6月 9:30~10:20	準備物	軍手・ビニール袋
展 開	指 導 の ポ イ ン ト	幼 児 の 姿	
○園庭に集まり、教師の話聞く。 ○幼稚園周辺の歩道に移動する。 ○ゴミを拾い集めて、分別しながら袋に入れる。 ○幼稚園にゴミの袋を持ち帰る。 ○思ったことや感じたことを話し合う。	○燃えるゴミと燃えないゴミを分別してそれぞれの袋に入れるように説明をする。 ○車道に出ない・一人で遠くまで行かない・歩行者の邪魔にならないように心がけるなどの注意事項を幼児と共に確認する。 ○一生懸命にゴミを拾い集めている姿を認め広めていく。 ○幼児のつぶやきに耳を傾け、たくさんゴミがある驚きに共感する。 ○たくさん拾い集められた頑張りを認める。 ○集めたゴミを幼児に見せながら、どうしてこんなにゴミがあるのか、またどうしたらゴミが無くなると思うか、幼児に投げかける。 ○幼児の考えに共感しながら、公共の物や場を大切に使えるようになってほしいという願いを幼児に伝える。 ○園内にも分別用のゴミ箱を設置したり、表示をわかりやすくしたりしてゴミへの関心が向くようにしておく。	○ゴミには種類があり、分けて捨てなければならないことを知る。 ○大勢で行動するとき、安全やマナーに気をつけて行動しなければならないことに気づく。 ○「またタバコを見つけた!」「いっぱいゴミがあるなあ」「何でポイポイ捨てるんやろ?」と怒って言う。 「僕のお父さんにも言うのかなあかんわ」怒りをあらわにしながら熱心に拾う。 ○「袋がゴミでいっぱいや」「こんなにいっぱいだったわ」と友だちと見せ合う。 ○「みんながどんどんゴミを捨てるからや」「ゴミ箱に捨てないとあかん」「家に持ってかえらなあかん」体験してみて、感じたことを話す。 ○「みんなの道やねんから」「そうそう、大事にせなあかん」「絶対ゴミなんか道に捨てへん」と強い口調で、意志を表す。 ○幼稚園の周辺だけでなく、通園途中のゴミにも気づき拾い集めて来る幼児も見られるようになる。	
留意点	毎日通る道であるが、実際にゴミを拾い集める経験をしたことで、思いのほかたくさんゴミが捨てられていることに気づくことができた。そこから、どうしてこんなにゴミがあるのか、また自分だったらどうするかを考え合う機会となる。		

事例 1-3 テーマ「地域探検」

活動名	ツバメの巣を見つけよう・親子ツバメの様子を継続して見よう・春を感じよう		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○身近な生き物に親しみをもって接し、命の尊さ不思議さに気づく。 ○興味関心をもって見たこと、感じたことを取り入れて遊ぶ楽しさを感じる。 ○親ツバメの愛情や子ツバメの成長に気づき、愛着をもって観察をする。 		
場 所	阪急「清荒神」駅周辺	対 象	5歳児
時期・時間	5月中旬から6月中旬 9:30~10:30	準備物	救急用具 カメラ
展 開	指 導 の ポ イ ン ト	幼 児 の 姿	
<ul style="list-style-type: none"> ○晴天もしくは曇りの日の午前中に出かける。 ○駅に着く。駅員さんや乗客の人と挨拶をする。 ○子ツバメが巣の端につかまり、羽をばたつかせている様子を見る。 ○子ツバメが近くの電線やひさしまで羽をばたばたさせながら飛び移る。 ○親ツバメが帰ってきて子ツバメの近くに止まるが、しばらくして飛び去る様子を見る。 ○園に戻り、見てきたこと、感じたことを話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○事前に子ツバメの成長を把握しておき、時期を逃さないようにする。 ○前回に見た子ツバメの様子を思い起こしながら、今日の子ツバメの成長に期待をもたせる。 ○歩道の端を歩くこと、前の友達と間隔が開かないようにするなどの園外保育の約束を確認する。 ○事前に駅員にツバメの観察に来ることの了承を得ておく。 ○駅の利用者の邪魔にならない所で固まって見る。 ○幼児の驚きと気づきに笑顔で共感する。 ○じっくり見ることが出来るように座って見るよう促す。 ○一生懸命な様子に目が向くように声をかける。 ○子ツバメが何をしようとしているのかを共に考える。 ○子ツバメの様子を幼児と共に見ながら、幼児の反応を見守り共感する。 ○子ツバメが飛べた嬉しさを幼児と喜び合う。 ○今までのようにえさをあげない親ツバメの様子を不思議に思う気持ちに共感する。 ○安全に気をつけたり、地域の人と言葉を交わせたことを認める。 ○ツバメの親子を観察できたことを喜び合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ○初夏の日差しを感じたり、草花の様子にも関心を向けて見ようとする。 ○地域の人と挨拶したり、親しく声を交わしたりする。 ○「わー、羽をばたばたさせてるー」「わー、大きくなってる」「こんなんしてる」とまねる等、子ツバメの成長に感動したことを話す。 ○「かっこいい」等、感じたことを友達や教師に話しかける。 ○「飛びたいんや」「まだ飛ばれへんから練習してるんや」等、子ツバメの様子を友だちや教師に話しかける。 ○「飛んだー」「落ちなくてよかった」勇気を出して飛んだ子ツバメの様子に歓声があがったり拍手をしたりして喜ぶ。 ○「どうしてえさをあげないのかな」「えさがなかったのかな」等、今までとの親ツバメの姿の違いを不思議に思う。 ○親子ツバメになってごっこ遊びを楽しんでするようになる。 	
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ○自然観察がしにくいときは絵本、図鑑やビデオ等の視聴覚教材を活用する。 ○何回も継続して出かけることで、地域周辺への関心が多様に広がり、いろいろな気づきにつながっていく。 		

事例6

近隣の公園を活用した環境学習

神戸市立西野幼稚園



<園の状況>

- 本園は神戸の長田区にあり、阪神・淡路大震災で多大な被害が出た地域である。本園も園舎が全壊し、震災後に建設された復興住宅の1階で再開し、現在にいたっている。
- 園児数は4歳児22名、5歳児17名で1クラスずつである。
- 近隣には、地域の憩いの場となっている会下山公園、新湊川河川敷やせせらぎの小道などがあり、園からも散策にでかけ、四季折々の自然に触れて遊び、保育に取り入れている。また、交通の便がよいので、神戸電鉄で北区に出かけ田畑で遊んだり、神戸市営地下鉄、山陽電鉄などで、西区や須磨区の海や川にも出かけたりと、自然に触れて遊ぶ機会を多くもてるように工夫している。
- 園庭は狭いが、実のなる木や花壇、小さな畑などがあり、身近に自然に触れられるように環境を整備している。
- 園児は5つの小学校区から通園しており、園児の住居は点在している。従って、幼稚園に来て初めて知り合ったり、友だちになったりしている幼児がほとんどである。

<テーマの要旨>

本園の近隣には、さまざまな公園や自然がある。今回の取組においては、一つの公園に繰り返し行くことで、子どもがどのように環境学習をしていくかということに着目していきたい。また、同じ公園に繰り返し行くことで、下記のような意義があるのではないかと思いつき取り組んだ。

- 自然は季節によって変化するので、子どもたちは同じ場所に行っても、違った経験や体験をすることができる。
- 公園が、子どもたちにとってより身近なものになり、生活に溶け込んでいく。
- 同じ場所に行っても子どもの発達段階が違ってくるので、感じたり、発見したりすることも違ってきて、単なる繰り返しにはならない。
- 教師も繰り返し行くことで、公園の環境を十分把握することができるので、適切な援助ができたり、安全面での安心も得られたりする。

テーマ「会下山公園の自然に触れる」

時期	内容			生活体験
	生命の大切さ不思議さに気づく	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気づく	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	
春	<p>サクラと遊ぼう(事例2-1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・近くに公園があることを知り、身近な自然に触れ感動する。 			<p>生活の中で環境やその変化に気づく</p>
	<p>タツポポと遊ぼう(事例2-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・会下山の自然が変化していることに気づく。 			
夏	<p>ツツジと遊ぼう(事例2-3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・五感を通して、自然に触れることにより、より自然に親しみを感じる。 ・自然の変化を感じる。 			<p>資源を大切にしようとする</p>
	<p>せせらぎと遊ぼう(事例2-4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の方と触れ合いながら、自然の大切さや自然を大切にしている気持ちを共感する。 ・水の気持ちよさや流れを感じる。 			
秋	<p>ブンゲリと遊ぼう(事例2-5・2-6)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然を取り入れ遊び、興味を深める。 			
	<p>落ち葉と遊ぼう(事例2-7)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然の美しさや不思議さを感じる。 			
冬				

人と人とのつながり

事例 2-1 テーマ「会下山公園の自然に触れる」

活動名	サクラと遊ぼう		
ねらい	○サクラの花の見事な開花に感動する。 ○5歳児と4歳児の触れ合いを楽しみ、親しみをもつ。		
場 所	会下山公園（山頂付近の広場）	対 象	4歳児・5歳児
時期・時間	4月中旬 9:30~10:30	準備物	ビニール袋
展 開	指 導 の ポ イ ン ト	幼 児 の 姿	
<p>○正門に集合する。</p> <p>○幼稚園で留守番してくれる管理員にあいさつをする。</p> <p>○幼稚園を出発する。（他の事例も同じ）</p> <p>○会下山公園に着く。 シダレザクラ・タンポポのつぼみを見ながら、散歩する。</p> <p>○広場・公園で遊ぶ。 サクラの花びらを集める。 落ちてくる花びらを追いかける。</p> <p>○公園の遊具で遊ぶ。</p> <p>○公園を出発する。（他の事例も同じ）</p> <p>○幼稚園に到着する。</p> <p>○出迎えてくれた管理員にあいさつする。</p> <p>○遊んだこと、見つけたこと、楽しかったことなどを話し合う。</p>	<p>○4歳児と5歳児のペアを知らせ、確認しながら、手をつないだり、あいさつをしたりするように声をかける。</p> <p>○どのようなあいさつをしたらよいか、考えてできるように働きかける。</p> <p>○交通ルールを守りながら、歩けるように声かけをする。</p> <p>○道で出会う地域の人に教師が率先してあいさつをする。</p> <p>○広場には、タンポポがまだ咲いていないことに気づけるように、遊ぶ時間をもつ。</p> <p>○シダレザクラの香りをかいだり、木の枝の間に入ったりなどして楽しめる時間をもつ。</p> <p>○思い存分サクラに触れて遊べるように、時間を十分とったり、広場で自由に遊べるように教師と一緒に遊んだりする。</p> <p>○集めた花びらを持って帰れるように、ビニール袋を準備しておく。</p> <p>○ペアがわかり手をつないでいることを確認する。</p> <p>○公園で遊んだことや楽しかったことなど一人一人の思いを聞いたり、楽しかったことを共有したりする。</p>	<p>○ペアの友だちを知らせると名前を教え合い、どのペアも手をつないで行動している。4歳児を意識して、車道側に4歳児を歩かせないように気をつけて歩こうとする5歳児もいる。</p> <p>○歩道のない車道では、自動車の音などに気づいて、止まって自動車が行き過ぎるのを待つことができる幼児もいる。</p> <p>○タンポポは咲いていないが、昨年も来ている5歳児はよく覚えていて「まだ咲いてないね」と友だちと話している。</p> <p>○シダレザクラの枝の間に入って、鼻を近づけて「サクラって甘い香りがするよ」と言ったり「なんか花のおうちに入っているみたいや」「先生も入ってきて」と直接触れたり、香りを感じたりして発見している。</p> <p>○広場はサクラに囲まれていて、風が吹くたびにサクラの花びらが舞う。それを見ると幼児たちはいっせいに走り出す。散ってくる花びらをつかまえようとしたり、舞い落ちてくる花びらを見上げたり、地面に積もるように落ちている花びらを拾ったりして楽しんでいる。</p> <p>○園に持ち帰った花びらを画用紙に貼って飾ったり、保育室で花びらを飛ばしたり、お家の人に持ち帰って見てもらったりした。</p>	
留意点	<p>○下見を欠かさないようにする。</p> <p>○手をつないで歩く、4歳児と5歳児のペアを検討する。</p> <p>○時期をのがさないようにする。</p>		

事例 2-4 テーマ「会下山公園の自然に触れる」

活動名	せせらぎと遊ぼう		
ねらい	○水の中の生き物や水生植物に触れて遊ぶ。 ○せせらぎの流れを感じたり、水の冷たい感触を味わったりする。		
場 所	会下山公園（せせらぎの小道）	対 象	4歳児・5歳児
時期・時間	7月上旬 9:30~11:00	準備物	足ふきぞうきん 自治会の方との打ち合わせ
展 開	指 導 の ポ イ ン ト	幼 児 の 姿	
<p>○せせらぎの小道に着く。 ショウブやハスの花を見たり、アメンボやメダカを見つけたりする。 キンギョやコイの様子を見る。 ハスの花や葉を見る。</p> <p>○自治会の方にあいさつをする。</p> <p>○裸足になって、水に入って遊ぶ。 葉っぱを流す。 キンギョやアメンボをつかむ。など</p> <p>○自治会の方にあいさつをする。</p>	<p>○せせらぎの小道に咲いている花や生き物がゆっくり見られるように、歩くテンポを調節する。</p> <p>○幼児には車道側に出ないように注意する。</p> <p>○一人の幼児の発見や驚きや疑問などを他の幼児にも伝える。</p> <p>○自治会の方の話が聞きやすいように幼児たちを並べる。</p> <p>○地域の方や通行の方の迷惑にならないように、靴や靴下の始末をする。</p> <p>○存分に遊びが楽しめる時間を確保する。</p> <p>○幼児の発見や驚きなどに共感する。</p> <p>○すべったり、転んだりしないように声をかける。</p> <p>○感謝の気持ちが伝えられるようにする。</p>	<p>○ハスの花や葉を見て、「これカエルが座るところやで」「水の中に花が咲いてる」と、気づいたことを友だちと話し合っている。</p> <p>丸網をしている所がある。それを見てA児は「どうしてかな？」と隣にいた友だちに尋ねると「誰かが取るんちがう？」「そんな人おれへん」「分かった鳥がねらうんちがうか」と周りの幼児たちも考えを出し合いながら話している。</p> <p>○地域の方が、いつもこのせせらぎの小道を手入れをしてくれていることを、幼児たちに歩きながら話す。すると、「知ってる、掃除してくれているの見たことがある」と言う幼児もいる。</p> <p>○暑い日だったので、せせらぎに入ると、「ワーワー、キャーキャー」歓声があがる。</p> <p>○水の中でアメンボを追いかけたり、金魚をすくおうとしたり、見るだけでなく実際に生き物と触れ合っている。</p> <p>○楽しかったことを自分の言葉で伝えようと「水に入らせてくれてありがとう」と、自治会の方に自分からお礼を言いに行く幼児もいる。</p>	
留意点	<p>○地域が震災時の火災でほとんど燃えてしまったことから、水の大切さを感じた自治会が中心となり、「せせらぎの小道」が作られた。地域の憩いの場に、いつでも水が流れているようにという願いから汚水を浄化して流している。自治会の方から、子どもたちに「せせらぎの小道」ができた理由や、水を大切にしたいという話があった。子どもたちには、その内容を理解しにくいところもあり、教師がわかりやすく伝えていく。</p> <p>○興味をもってせせらぎの小道を見に行く親子もあるので、降園時に保護者に子どもたちの様子を伝える。</p>		

事例 7

栽培活動を通じた環境学習

明石市立二見幼稚園



<園の状況>

- 本園は、明石市の西部、瀬戸内海の海岸線に位置し、昔から漁師町として栄えてきた地域である。
- 数年前までは、園周辺には空き地や田畑など豊かな自然があり、幼児たちは、自然や草花に触れて遊んだり、海岸に行き磯の生き物をとったりして、広々とした空間の中で伸び伸びと過ごしてきた。しかし、ここ数年間に高層マンションが建ち始め、バイパス（明姫幹線）が走るなど、都市化、核家族化が急激に進んできている。それに伴い、幼児の遊びも、ゲームやテレビが中心になりつつある。
- 幼稚園は、木造平屋と鉄筋2階建て園舎からなり、平成16年度には芝生を園庭全面に植栽した。園児たちは芝生の上で遊び、園庭の樹木の変化と共に、季節を肌で感じ取っている。
- 幼稚園区内にある路地や商店街なども昔からの面影が残っており、地域の人たちは子どもたちを温かく見守ってくれている。また、保護者同士のつながりや助け合う姿も多く見られ、園に協力的である。

<テーマの趣旨>

- 日常行っている保育内容を、改めて環境学習という視点から見直し、教師自身が意識していくことで、幼児の環境への意識が育つと考える。
- 収穫や種取りを楽しむ中で、植物にも違いのあることに気づき、発見の楽しさを実感すること、自分で栽培したものをプレゼントしたり、他の人と食べたりすることで、育てることの喜びと、食べ物大切さを感じることをねらって、取り組んでいる。
- 年間を通じ、チューリップ・夏野菜・アサガオやフウセンカズラ・ジャガイモ・サツマイモ・タマネギ・ヒヤシンス・クロッカスなどの栽培活動の中から、サツマイモの栽培を通じた実践事例を記載した。
- 昨年度は、園舎の裏庭の畑を活用してきたが、幼児が日々遊んでいる園庭から見える位置に畑を作ることで、幼児の気づきが多くなるのではないかと、畑の見直しをすることから取り組んだ。
- 幼稚園に協力的な地域の特長を生かし、より多くの学びができるよう、畑の提供を呼びかけ、地域や保護者の協力を得ながら、つるや葉に十分に触れられる芋掘りを体験させた。
- 東播磨食育教室による農業体験の一環として、取り組める活動を考慮したことで、「食育」ということも、環境学習の大きな要素になると考えた。

テーマ「サツマイモを育てよう」

内容 時期	自然体験		生活体験	
	生命の大切さ不思議さに気づく	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気づく	地域の中での自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気づく
春	<p>園庭の畑にサツマイモのつるを植えよう(事例3-1)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植物のつるが伸びていく。 ・身近な植物に興味や関心をもち、大切に育てようとする。 		<p>園庭に畑を作ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活のなかで、より良い環境を作り出すことを体験する。 ・「トライアやる・ウイーク」生と一緒に作り、親しみを深める。 <p>畑の提供を地域の人々に呼びかけよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活に関係が深い、いろいろな人々に親しみをもち。 <p>地域の畑にサツマイモのつるを植えよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の方・PTAなど、いろいろな人と触れ合う。 ・自分の住んでいる地域環境を知る。 	
夏	<p>水やり・草引きをしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植物の根の深さ・草とつるの形のちがひなどに気づく。 ・水の量の調整や生長など、命あるものとして感じる。 		<p>草引きをしよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・季節が違えばつる、植物の生長や環境にも変化のあることを感じる。 ・提供者など、いろいろな人への感謝への気持ちをもつ。 <p>畑を整備しよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・危険な場所が分かり、安全に行動しようとする。 ・植物の形・色・大きさ・感触などに触れ、美しさや不思議さに気づく。 	
秋	<p>園庭のサツマイモを掘ろう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・植物の生長に気づき、生命力や不思議さを実感する。 ・植物の色・形・大きさの違いなどに気づく。 ・東播磨食育教室による農業体験の一環として実施し、食べることに期待感をもつ。 		<p>地域の畑のサツマイモを掘ろう(事例3-2)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・収穫の喜びを十分に実感する。 ・女たちや地域の方との触れ合いを大切にし、感謝の気持ちをもつ。 	
冬		<p>芋版で遊ぶ(事例3-3)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自然物が遊びに活かせることを知り、大切に使うことを経験させる。 		
		<p>焼き芋大会をしよう(事例3-4)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東播磨食育教室による農業体験の一環として実施し、自分で育てたものを食べる楽しさを感じる。 ・本朝劇見・保育所見・小学校1年生の人たちなど、いろいろな人と一緒に、楽しさを共有する。 ・ドラマ館での焼き芋を体験し、おいしさ・暖かさなどを実感する。 ・トライアやる・ウイーク生・PTA役員・地域の方・警備員の方など、お世話になった方に感謝の気持ちをもつ。 		

人と人とのつながり

事例3-1 テーマ「サツマイモを育てよう」

活動名	サツマイモのつる植え		
ねらい	サツマイモがつるから育つことや、つるの特徴を知り、生命力の強さや植物の不思議さを感じる。		
場 所	幼稚園園庭	対 象	年長児
時期・時間	6月初旬 10:30~11:00	準備物	サツマイモつる・カメラ・空き箱 ペットボトルの手づくりじょうろ
展 開	指 導 の ポ イ ン ト		幼 児 の 姿
<p>○サツマイモのつるを見る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・つる状であること。 ・葉が一定方向に伸びていること。 ・1本のつるの中で、葉と根の出ている部分のあること。 ・葉と根の方向が、それぞれ一定であること。 <p>○植え方・世話の仕方を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・葉は、土より上に出す。 ・つるは、根が出る個所を考慮し、ねかせて浅く植える。 ・水は少なめにする。 <p>○つるを植える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畝の窪みにつるをねかせる。 ・土をかける。 ・水をやる。 	<p>○葉・根の方向がよく分かるよう、葉を上向き・つるを横向きにして持つ。</p> <p>○葉や根の方向に気づくよう、手ぶりや擬音を交えて見せていく。</p> <p>○幼児のつぶやきに留意し、気づいたことは、皆に伝えられるよう支援する。</p> <p>○土の中でのつるの様子が理解しやすいよう、土に見立てた画用紙の前で、実際につるをねかせて見せる。</p> <p>○水やりは、〈つるが浮かぬように〉と、〈土の状態を手で触って確かめる〉というポイントに気づかせる。</p> <p>○全員に植える経験ができるよう、つるとスペースを確保する。</p> <p>○つるも命あるものとして感じられるよう、教師が率先してつるに語りかける。</p>		<p>○「つる長い」「葉がハート型」「葉が上向きに、くねーと上がっていつている」「白いひげがある」「途中で色が違つとう」など口々に気づいたことを言う。</p> <p>○「えっ？まっすぐせえへんのん？」「こう（夏野菜を植えた時のようにつるを立てる手ぶり）ぎゅってしないの？」と驚く。</p> <p>○土が意識できると、葉が全て土の上に出るよう、ねかせることに納得する。</p> <p>○「葉っぱでお日さんもらうねんで」「そうやで、お日さん栄養やねんで」と経験より話す。</p> <p>○「先生、これひげあらへん」と根が短い、もしくは、出ていないつるもあることに不安感をもつ。</p> <p>○「いっぱい飲んでよ」「やりすぎたらおなかこわすねんで」など、自分が赤ちゃんを育てているような気分で声をかけている。</p>
留意点	<p>○様々な気づきを受け止めながら、注意深く観察する姿勢を育てるよう努める。</p> <p>○つるを命あるものとして感じられるよう、意図的に擬人化した言葉で受け止める。</p> <p>○「トライやる・ウィーク」の中学生も一緒に作ってくれた畑であることを、話しの中に盛り込み、親しみや感謝の気持ちを感じさせていく。</p>		

事例3-2 テーマ「サツマイモを育てよう」

活動名	サツマイモを掘ろう		
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ○秋の自然の心地よさや収穫の喜びを感じる。 ○自分たちのことを見守ってくださっている地域の方に、感謝の気持ちをもつ。 ○交通ルールや公共マナーを守って、園外保育に出かける。 		
場 所	A氏所有の芋畑（二見西駅南側）	対 象	全園児（保育ボランティア B氏他19名）
時期・時間	11月上旬 9:15~12:00	準備物	水筒・ビニール袋・絵本袋・スコップ・虫かご・ダンボール・シート・電車賃・救急セット・名簿・タクシーチケット
展 開	指 導 の ポ イ ン ト	幼 児 の 姿	
<ul style="list-style-type: none"> ○園庭に集合する。 <ul style="list-style-type: none"> ・人数を報告する。 ・年少児・年長児がペアになる。 ○園を出発する。 <ul style="list-style-type: none"> ・東二見駅まで歩く。 ・山陽電車に乗る。 ○芋畑に到着する。 <ul style="list-style-type: none"> ・水筒・絵本袋をクラスごとのシートに置く。 ・ペアで芋畑に入る。 ・A氏のお話を聞く。 ・ペアで助け合って掘る。 ・掘った芋をビニール袋に入れる。 ・つるや葉で遊ぶ。 ・芋入り絵本袋を、クラス毎にまとめる。 ・B氏の車に積む。 ○休息・虫捕りをする。 ○ペアで並ぶ。 <ul style="list-style-type: none"> ・人数を報告する。 ・A氏にお礼を言う。 ○芋畑を出発する。 <ul style="list-style-type: none"> ・山陽電車に乗る。 ○園に到着する。 <ul style="list-style-type: none"> ・用便・手洗い・うがいをする。 ・お弁当の準備をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○交通ルールや公共マナーは共通理解し、約束など事前に話し合っておく。 ○年少児に交通ルールを伝えやすいよう、実践できている幼児を認めることで、具体的な方法を広めていく。 ○教師や保育ボランティアとの連携を密にし、安全確保に努める。 ○全クラスの幼児がスムーズに動けるスペースや動線を考慮しながら誘導する。 ○緊急事態発生時は、状況を判断し、園長の指示のもと対処する。 ○健康面で注意すべき幼児の確認を行う。 ○近隣の医療機関と連絡先を事前に把握しておく。 ○全員が芋掘りの体験が十分に出来ているかを確認しながら進める。 ○幼児の喜びや気づきの受けとめとともに、周囲の幼児の共感を促す。 ○幼児の直接体験や気づきを促すよう、収穫後の時間を十分とる。 ○A氏に感謝の気持ちをもって、お礼が言えるように、言葉がけをする。 ○芋分けを、幼児も一緒にすることで、大きさ・形の違いなどに気づかせていく。 	<ul style="list-style-type: none"> ○「この子友だち」と互いに顔を見合わせて微笑む。 ○得意気に手をつなぐ幼児もいる。 ○「大きい組。こっちにつなぐぞ」と車道側の年少児の手をとる。 ○「半分よりこっち」と車道と反対側に年少児を導く。 ○「あっ！芋見えた！」「何か鳴いとう」と気づいたことを話し、期待感を膨らませる。 ○互いに声をかけ合いながら、畑に入っていく。 ○「もう掘ってよい？」と期待感をふくらませている。 ○「あった！」「見て見て！」「こんなん」と大きさや形・つながっていることを喜び、友だちや教師に共感を求める。 ○「ここあんで」「掘ったるか」「出てきとうやん」など、自分の周辺の様子にも気づき楽しんでいる。 ○残った芋がないか、周囲一面を掘り返し、確かめている。 ○「ここココオロギおった」「捕まえて」「これ虫籠に入れて」「早よ閉めてよ」と、友だちと一緒に遊ぶことを、楽しんでいる。 ○皆でお礼を言った後、帰り際に、口々にお礼を言う。 ○「多いで。分けたりか？」など公平になるように、互いに声をかけ合っている。 	
留意点	<ul style="list-style-type: none"> ○畑の提供者の好意・栽培の苦労など、幼児が受け止められるよう、意図して言葉にしていこう。 ○直接体験の喜びや驚きは、機を逃さず大きな声や表情で受け止め、心を弾ませる。 		

事例 8

一日を通した環境学習

神戸市立あづま幼稚園



<園の状況>

- 神戸の市街地の中央にあり、交通量の多い9車線の国道2号線に面している。
- 園区は主に商業地域と高層住宅群で、土のある場所は少なく、自然とかかわる場には恵まれていない。園のごく周辺では古くから地域としての活動を行っており、園児との交流の機会も多い。新たに開発された地域から通う保護者は、行事を通して馴染みつつある。
- 園舎は統廃合で空いた小学校舎の1階の一部を地域の生涯学習支援センターと共用で使っている。広い運動場は保育時間中にだけ使用できるため、幼稚園として自然とかかわる場をつくることのできる範囲はかなり限られている。
- 園では、幼児の目の高さにある小さな自然を大切に、自由に土に触ったり、花を摘んだり、虫を見つけたりしてよい場所を花壇やプランターで作っている。遊ぶ過程でチョウやダンゴムシにとっても花が必要なこと、花がきれいに咲きたいと思ってつぼみをつけていることなどにも気づいていき、大切にしようと感じられるように配慮している。
- 日常的に自然体験がしにくい環境であるため、便利な交通機関を利用して、大きな自然に触れられる園外保育の機会を多くもつようにしている。また、地域の中の小さな自然をこまめに見つけに行き、街中の見逃してしまいそうな場所にも動植物の営みがあることに気づかせている。
- 保護者には、幼児にとって自然とかかわりが大切であることを幼児の姿から伝えたり、親子で自然体験ができる機会をつくったりしている。
- 園児数は4歳児60名、5歳児52名で増加の傾向にある。

<テーマの趣旨>

- 幼児が自然に触れたときに感動する姿を保護者に伝えたい、また、保護者自身も幼児とともに感動体験をしてほしいという願いから、春に親子遠足を行っている。
- 神戸市立神出自然教育園の環境を生かして体験できる活動には、全員の幼児を対象としたものと親子で散策しながらそれぞれに楽しむものがあるが、どちらの活動にも「ねらい」がある。環境学習の観点から活動を見直すことで、ねらいや援助の方向がさらにはっきりしたものになった。
- 自然体験は、活動すること自体が目的になってしまうことがあるが、ねらいの意図を明確にすることで、今日の経験がどのような経験のつながりの中にあるのかがわかった。また、幼児の動線を細かく見直すと、一日の行動すべての中に環境学習につながるものが含まれていることがわかった。
- 親子遠足では、保護者の意識を環境学習のねらいの方向へ向けていくための配慮も大切である。保護者のかかわり方で幼児が学べるものも変わってくるため、保育の意図が感じられるよう、伝えていくことが必要である。

テーマ「親子で春の自然を見つげよう」

内容 時期	自然体験			生活体験	
	生命の大切さ不思議さに気づく	自然の大きさ・美しさ・不思議さに気づく	地域の中の自然やそれにかかわる人々に親しむ	生活の中で環境やその変化に気づく	資源を大切にしようとする
6/5 9:00～ 14:00	<p>ジャガイモ掘りをする (事例4-1) 身近な動植物に親しみをもって扱い生命の尊さに気づく。</p>			<p>施設の手洗い場やトイレ、シャワーを使う 生活に関係の深い情報に興味や関心をもつ。</p>	
	<p>ザリガニつりをする(事例4-2) 身近な動植物に親しみをもって扱い生命の尊さに気づく。</p>	<p>あぜ道をどんどん渡っていく(事例4-3) 身近な事象に関心をもち、取っ入れて遊ぶ。</p>	<p>ザリガニつりの竿を作る(事例4-2) ザリガニつりの餌を始末する 身近なものや遊具に興味をもってかかわり工夫して遊ぶ。</p>	<p>大型観光バスに乗る 生活に関係の深い情報に興味や関心をもつ。</p>	<p>ザリガニつりの餌を始末する 身近なものや遊具に興味をもってかかわり工夫して遊ぶ。</p>
	<p>小さな生き物を見つける 身近な動植物に親しみをもって扱い生命の尊さに気づく。</p>	<p>栽培している作物を見る 季節により自然に変化のあることに気づく。</p>	<p>泥田で遊ぶ(事例4-3) 自然の中で生活する心地よさを感じる。</p>	<p>弁当の後始末をする 生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整える。</p>	<p>泥田で遊んだあとの身支度をする(事例4-4) 生活の中で様々なものに触れ、興味や関心をもつ。</p>
	<p>泥田で遊ぶ(事例4-4) 身近な自然事象に関心をもち、取っ入れて遊ぶ。</p>	<p>広い池に架かる橋を渡る(事例4-3) 自然の中で生活する心地よさを感じる。</p>	<p>レンゲ畑で遊ぶ 自然の中で生活する心地よさを感じる。</p>	<p>摘んだ雑草を大切に扱う</p>	
	人と人とのつながり				

事例4-3 テーマ「親子で春の自然を見つけよう」

活動名	あぜ道をどンドン渡っていく 広い池に架かる橋を渡る		
ねらい	○春の田畑や広い池の様子を見ながら、のびやかな空間や風、自然の気配を感じる。 ○自然の中の動植物の営みに触れ、取り入れて遊ぼうとする。		
場 所	神戸市立神出自然教育園	対 象	4, 5歳児親子
時期・時間	6月上旬 11:20~12:00	準備物	飼育ケース、ビニール袋
展 開	指 導 の ポ イ ン ト		幼 児 の 姿
<p>○あぜ道を歩く。</p> <p>○タンポポの綿毛のとばしっこをする。</p> <p>○雑草園になっている場所で、虫やカエルを見つけたり、雑草を摘んだり「同じものみつけ」をしたりして遊ぶ。</p> <p>○橋を渡る。 ・池を見渡したり、波紋を見つけて何があるのか想像したりする。 ・背の高い水草の茂みの鳥やカエルの声を聞く。</p>	<p>○細い土の道や土手を歩いた経験はほとんどないため、段差などには不慣れであるが、ゆったりと楽しみながら歩けるよう、時には別れ道も認める。</p> <p>○あぜ道脇や近くの空き地でタンポポの綿毛を見つけたら、自由に、また風向きを考えて一斉に飛ばすなど、自然とのかかわりが楽しめるよう一緒に楽しむ。</p> <p>○捕まえたものを逃がしたくないと思う幼児もいるが、たくさん見つかることを知らせ、触れて遊べるように誘う。</p> <p>○風の爽やかさや開けた感じを心地よく感じられるように広がって池を見る。</p> <p>○水面を飛ぶトンボやカエルの声など自然の中で生活する小動物に興味をもてるようにみつけっこをする。</p>		<p>○一列に並んで歩きながら、前の友だちが止まると止まり、そこで目を周囲に向ける。</p> <p>○小さい弟妹を連れた親は、歩きやすいあぜ道を選びながらついてくる。一列になるため、親同士の会話は減り、一心に歩いている。</p> <p>○最初は無造作に飛ばしている幼児も何回か目には、綿毛をじっと見つめ、自分なりの意識をもって吹くようになる。</p> <p>○アマガエルやテントウムシを見つけ、捕まえようとする。テントウムシが指を登り、羽を広げて飛ぶ瞬間を見つける。</p> <p>○波紋を見つけて「何がおるんかなあ」と話し合い、コイやザリガニの他に、ヌートリアもいることを聞くと興味をもって水面を見つめる。</p>
留意点	一列に長く広がって歩くため、前もって動きやすい保護者に周辺の幼児にも気を配ってもらえるよう依頼しておく。先頭の担任は全体が把握できるようにコースを選ぶ。		

事例4-4 テーマ「親子で春の自然を見つけよう」

活動名	泥田で遊ぶ		
ねらい	泥田の感触を味わいながら、そこに棲息する小動物の様子に気づき、興味や関心をもつ		
場 所	神戸市立神出自然教育園	対 象	4, 5歳児親子
時期・時間	6月上旬 12:00~13:00	準備物	着替え、バケツ、タオル、足洗い場、シャワー
展 開	指 導 の ポ イ ン ト	幼 児 の 姿	
<p>○裸足で浅瀬に入り、泥田の中を歩く。</p> <p>○浅瀬や水草が生えている付近にオタマジャクシやメダカがいるのを見つける。</p> <p>○温かい石の上にあがったり、木の橋の上に足跡をつけたりして遊ぶ。</p> <p>○足や手についた泥を洗い、身支度をする。 ・溜めた水で泥をざっと落とす ・タオルの傍に靴を持ってきておく。 ・流れ水で仕上げ洗いをする</p>	<p>○ヌルヌルしたり、泥に足が沈んだり、感じる温度が違ったりするのを一緒に歩きながら、言葉で伝え合えるようにする。</p> <p>○日当たりのよい浅瀬に誘い、足の近くに何かいると目を向けさせる。</p> <p>○泥が立って水がにごったり、そっと歩くとにごりにくかったりすることを見つけると共感する。</p> <p>○泥の中に入ったことがない幼児も多いので、時々声を掛けて誘いながらも、自分から入ってくるのを待つ。</p> <p>○自分の手でこすって泥を落とすことを知らせるとともに、自分で考えながら洗ったり身支度をすることの大切さを伝える。</p>	<p>○「冷たい」「ぬるう」など日当たりや深さによって、温度が違うことや泥の量によってすべる感じが違うことに気づいている。</p> <p>○すべりそうであまり歩き回らなかった幼児も水の中を覗き込む友だちの姿に誘われて動き出す。</p> <p>○草の陰に大きなトノサマガエルを見つけて、じっと立ちすくんでいる幼児もいる。</p> <p>○一人で入るのが怖い幼児もいる。ちょっと入ってはすぐ上がり、親のところに戻る年少児に、親が自分も裸足になり、手をつないで入ってくる。</p> <p>○つい親が洗ってしまう姿が多いが、友だち同士で「まだついで」と教え合うなど、幼児が自分たちでしようとする姿に気づく親もいる。</p>	
留意点	幼児の場合、気温や日差しによっては、泥田が楽しみにくいこともある。心地よく安全で楽しい経験になるよう、職員間の連携も必要である。泥田の広さやある程度水の中が見えるにごり具合を考えて、一時に入る人数も配慮が必要である。		

資料編

兵庫県の取組

ひょうごっこグリーンガーデン実践事業



1 ねらい

「ひょうごっこグリーンガーデン実践事業」は、県下の幼稚園・保育所が主体的に新たな観点からの環境学習・教育に取り組むきっかけとするため、幼稚園・保育所での環境学習・教育の取組に対して、実践にかかる経費を補助することで、幼児期の環境学習・教育の全体的な展開を図ろうとするものである。

2 新たな観点～「日常性」「継続性」～

「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」には、「環境」について、ねらい・内容が示されている。この領域「環境」と区別するため、ひょうごっこグリーンガーデン実践事業では、「環境学習・教育」を次のように概念規定している。

日常的に行っている幼稚園、保育所の活動を「環境学習・教育」の観点から、年間を通じて、また、1日の中で「日常性」や「継続性」を意識しつつ、田畑での農作業体験や動物、花木に触れるなどの自然体験等を通じて、「命の大切さ」に身をもって気付く力を養う。

このことは、実践園に指定されたから、まったく新しい環境学習・教育の取組を始めなければいけないということではなく、従前から取り組んでいる行事や日常の保育内容を「環境」という新たな観点で見直すことで、子どもたちや保育者が同じ取組であっても「環境学習・教育」という違った意識をもってとらえ直すことができ、保育活動の中での意識や行動の変化へとつながっていく。

本事業のねらいは、「環境」を意識した園生活、活動が日常的、継続的な取組になっていくことである。

このねらいを達成するためには、一過性の遠足、体験活動等は当てはまらないということに留意する必要がある。例えば、遠足を核にする場合であれば、日常の園における取組とつながりをもった園外活動として遠足を位置付けるといったことが必要である。

また、本事業を進めるに当たっては、当初に事業計画の提出がある。ここでは、昨年までは子どもたちの活動は収穫だけだったが、種まきも全員で実施する、園外から指導者の指導をする講師を招くといった活動の幅の広がり意識して計画を立てることが求められる。

また、日常性、継続性という意味では園だけでなく、子どもたちが毎日を過ごす家庭や地域とも連携しながら取り組んでいくことが有効である。そのためには、園での取組を家庭や地域にも呼びかけ理解してもらうことも大切である。

3 支援体制

県では、地域において、円滑に年間を通じて環境学習を展開できるよう、支援体制を整えている。

実践を進めるうえで、継続的な農作物の管理や栽培の指導等、専門的な知識や技術など幼稚園・保育所の中だけですべてを行うことは難しい場合が出てくると思われる。そのため、以下のような支援があるので、活用してほしい。

(1) 地域環境学習コーディネーター

人材や活動場所の紹介や実践内容の相談対応により環境学習・教育の実践を支援するため、各県民局に配置している。

(2) ひょうごグリーンサポーター

環境に関する専門知識をもっている方や自然体験の指導など子どもたちの環境学習・教育を支援したいという意欲をもつ方を各県民局で登録している。

(3) 研修会の開催

幼児期の環境学習・教育を進めるうえでの具体的な手法を学んだり、受講者自らがプログラムを体験したりする参加体験型の研修会を開催する。(平成20年度の内容は下表参照)

4 実践園での効果

「平成19・20年度ひょうごっこグリーンガーデン実践園」へのアンケートによると、次のような効果があることが分かった。

- ① 実践により、これまでよりさらに活動の幅が広がった。

- ② 「環境」を意識して取り組んだことで、職員全体で話し合いの場をもつなど園全体で取り組むようになった。
- ③ 保育者の意識や子どもたちとのかかわりが増え、これに伴い、子どもたちの意識・行動にも変化が現れるようになった。
- ④ 保護者や地域の方々々にサポートをお願いし、これを通じて取組が家庭や地域へも広がった。

多くの実践園が①から④のいずれかについて効果があったとして回答している。

実践園としての取組は1年限りのものである。しかし、園の活動や子どもたちと「環境」とのかかわりには終わりは無い。

本事業はあくまでも園の行事や毎日の生活を「環境学習・教育」の観点で見直し、環境学習・教育に取り組むきっかけとするものである。

本事業で得られた効果やつながりを活用し、取組の継続を期待したい。

平成20年度幼稚園教諭・保育士環境学習リーダー研修

(※本事例集では、「環境学習リーダー研修」と表記)

1 開催会場

- (1) 県立嬉野台生涯教育センター
- (2) 県立有馬富士公園
- (3) 県立ゆめさきの森公園
- (4) 県立明石公園
- (5) 西宮市立甲山自然の家
- ※各会場とも3日間開催((1)は、宿泊で実施)
- ※参加者は3日間を通して参加

2 進め方

- ・各会場とも同一内容、参加体験型(ワークショップ)で実施
- ・各会場1ファシリテーター(進行役)が3日間を通して担当

3 参加者の心構え

- ・主体的であること
- ・遊び心を忘れないこと
- ・お互いから学び合うこと
- ・教えられる→学ぶ
- ・暗記する→考える
- ・知識の蓄積→意識の変化

4 プログラム

(1日目) 幼児期における環境学習の必要性について理解する	
アイスブレイク	事業に関わるみんなが知り合う
全体会	環境学習をはじめるにあたっての心構えについて
事業説明	兵庫県の環境学習・教育について
事例紹介	幼児期の環境学習の実践事例で学ぶ
全体会	みんなの疑問にみんなが答える
(2日目) 環境学習リーダーとしての基本を押さえる	
実習	環境学習リーダー自身の環境観をとらえ直す
実習	環境学習リーダー自身が自然と触れ合う
講義	参加体験型学習の基本的な考え方を学ぶ
(3日目) 園での環境学習の具体的な展開を考える	
全体会	幼児向け環境学習の課題と可能性について
グループワーク	園生活の1日・1年を環境学習の観点で見直す
全体会	実践に向けての疑問を解消する

兵庫県によるサポート

兵庫県では、幼児期の環境学習・教育の実施を支援するため、次のようなサポートを行っていますのでご活用ください。

ひょうごっこグリーンガーデン実践園でなくても活用いただけます。

地域環境学習コーディネーター

人材や活動場所の紹介、実施内容の相談対応等のコーディネートを行い、地域における環境学習・教育の実践の円滑な実施を図っています。

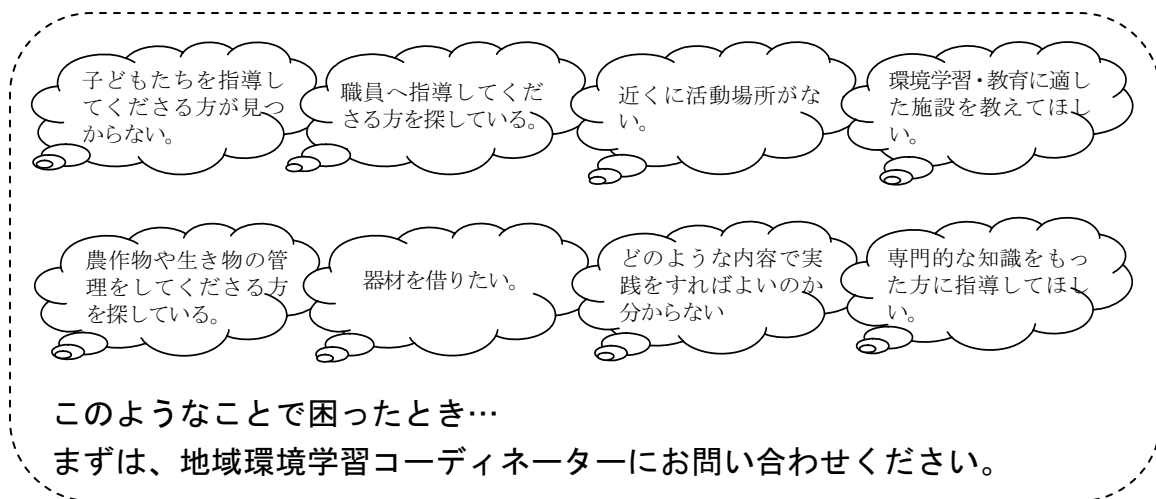
- ・配置：各県民局に1名
- ・業務：指導者・支援者等の人材紹介、活動場所紹介、実践内容の相談対応など、環境学習・教育の実践のコーディネート
- ・問い合わせ先：各県民局環境課（右ページ参照）

ひょうごグリーンサポーター

子どもたちの環境学習・教育にかかる活動を支援する意欲を持つ人を公募し、各県民局ごとに登録しています。

子どもたちの活動に次のような支援ができる方に登録を呼びかけています。

- 農作業体験
 - ・田畑を環境学習・教育に提供してくださる方
 - ・農作業を指導してくださる方
 - ・植えたお米や野菜の水やり等田畑を管理してくださる方
- 里山体験
 - ・里山を環境学習・教育に開放してくださる方
 - ・里山や森の動植物に詳しい方
 - ・里山での自然体験を指導できる方
- 水辺体験
 - ・海の生き物に詳しい方
 - ・小川や川べりの動植物などに詳しい方
 - ・浜辺の動植物などに詳しい方
- 自然体験
 - ・鳥や昆虫、花や木などに詳しい方
 - ・五感を使った自然観察を指導してくださる方
- ・問い合わせ先：各県民局環境課（右ページ参照）



<問い合わせ先>

地域環境学習コーディネーター、ひょうごグリーンサポーターについては、最寄りの各県民局環境課までお問い合わせください。

担当窓口	住 所	電話番号（直通）	所管市町
神戸県民局 企画県民部環境課	〒650-0004 神戸市中央区中山手通 6-1-1	(078) 361-8628	神戸市
阪神南県民局 県民生活部環境課	〒660-8588 尼崎市東難波町 5-21-8	(06) 6481-4654	尼崎市、西宮市、 芦屋市
阪神北県民局 県民生活部環境課	〒665-8567 宝塚市旭町 2-4-15	(0797) 83-3146	伊丹市、宝塚市、 川西市、三田市、 川辺郡
東播磨県民局 県民生活部環境課	〒675-8566 加古川市加古川町寺家町天神木 97-1	(079) 421-9130	明石市、加古川市、 高砂市、加古郡
北播磨県民局 県民生活部環境課	〒673-1431 加東市社字西柿 1075-2	(0795) 42-9377	西脇市、三木市、 小野市、加西市、 加東市、多可郡
中播磨県民局 県民生活部環境課	〒670-0947 姫路市北条 1-98	(079) 281-9202	姫路市、神崎郡
西播磨県民局 県民生活部環境課	〒678-1205 赤穂郡上郡町光都 2-25	(0791) 58-2137	相生市、たつの市、 赤穂市、宍粟市、揖保 郡、赤穂郡、佐用郡
但馬県民局 県民生活部環境課	〒668-0025 豊岡市幸町 7-11	(0796) 26-3650	豊岡市、養父市、 朝来市、美方郡
丹波県民局 県民生活部環境課	〒669-3309 丹波市柏原町柏原 688	(0795) 73-3773	篠山市、丹波市
淡路県民局 県民生活部環境課	〒656-0021 洲本市塩屋 2-4-5	(0799) 26-2071	洲本市、南あわじ市、 淡路市

Webサイト

環境学習・教育を進めるうえで便利な情報（子ども向け）

環境省こどものページ（環境省）

<http://www.env.go.jp/kids/>

- ・環境省の子ども向けサイトです。

こども環境白書（環境省）

<http://www.env.go.jp/policy/hakusyo/kodomo.html>

- ・『環境白書』を子ども向けに分かりやすくイラストや図で説明しています。

子ども環境情報センターエコっ子ナビ（環境省）

<http://www.eeel.jp/ecoco/>

- ・キャラクターによる解説、クイズ、ゲームなどで楽しく環境を学べます。

環境学習・教育を進めるうえでの便利な情報（大人向け）

兵庫の環境（兵庫県）

<http://www.kankyو.pref.hyogo.jp/JPN/apr/index.html>

- ・兵庫県の環境に関する情報やデータが紹介されています。

ひょうごエコプラザ（（財）ひょうご環境創造協会）

<http://www.eco-hyogo.jp/ecoplaza/>

- ・ひょうごエコプラザの利用案内、県内で開催のセミナーなどの情報などが掲載されています。

ECO学習ライブラリー（環境省・文部科学省）

<http://www.eeel.jp/>

- ・環境学習・教育に関する情報が総合的に紹介され、指導者向けの情報もあります。

エコライフハンドブック（内閣府）

<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/sho-ene/index.html>

- ・省資源・省エネルギーに取り組むポイントが紹介されています。

みんなで取り組んでみよう

こども版環境家計簿 こどもエコチェック手帳（（財）ひょうご環境創造協会（兵庫県地球温暖化防止活動推進センター））

<http://www.eco-hyogo.jp/junioreco/>

- ・自分の行動や家庭の生活をチェックし、自分たちでできることを考えます。

こどもエコクラブ（環境省）

<http://www.env.go.jp/kids/ecoclub/>

- ・身近な地域で楽しみながら環境活動に取り組むクラブです。幼児の参加可能です。

我が家の環境大臣（環境省）

<http://www.eco-family.go.jp/index.html>

- ・環境にやさしい行動を宣言すると「我が家の環境大臣」に任命されます。

『幼児期の環境学習・教育実践事例集』作成委員会委員名簿

澤田 愛子	兵庫県国公立幼稚園長会 副会長 神戸市立東灘のぞみ幼稚園 園長
前田 幸男	社団法人兵庫県保育協会 理事 社会福祉法人萬年青友の会 おもと保育園 園長
大滝 あや	環境教育事務所 T a o 舎 代表
鷹江 美鈴	明石市立朝霧幼稚園 教諭
安倍 学	学校法人小寺学園 浜幼稚園 教諭
木俣 美代子	多可町立きた保育所 主任保育士
金子 多鶴子	太子町立斑鳩保育所 主任保育士
村山 雅子	NPO 法人子育てセンター風の子会 風の子保育園 園長
大西 眞弓	兵庫県教育委員会事務局義務教育課 指導主事

(参考) 過去に紹介した実践事例

事例 1	高砂市立北浜保育園
事例 2	加東市立三草保育園
事例 3	Y M C A 松尾台幼稚園
事例 4	三田市立藍幼稚園
事例 5	宝塚市立宝塚幼稚園
事例 6	神戸市立西野幼稚園
事例 7	明石市立二見幼稚園
事例 8	神戸市立あづま幼稚園

発行 兵庫県農政環境部環境創造局環境政策課

TEL (078) 362-9895

平成21年3月発行

